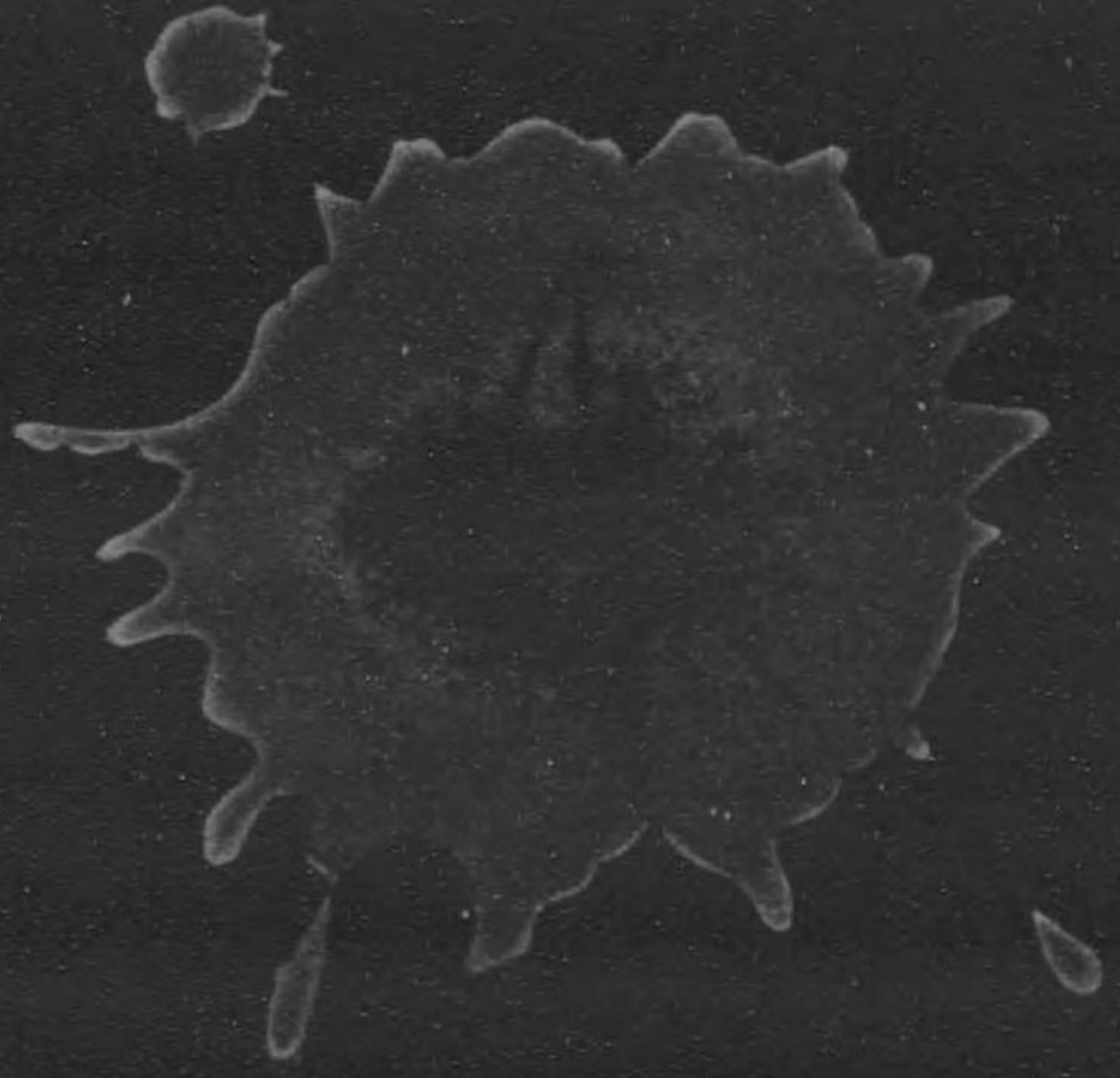


387
213

大正の
新編



始

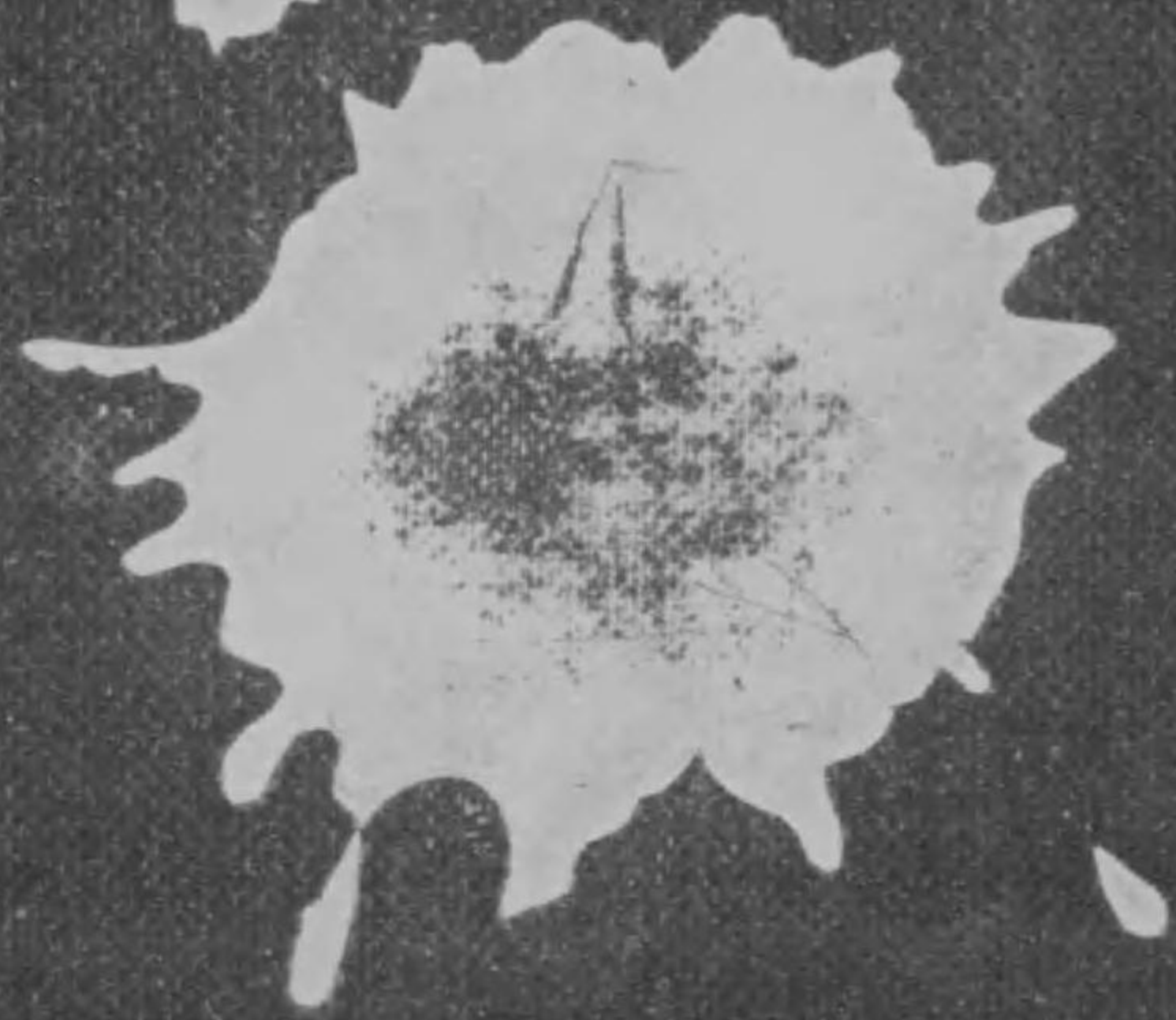


387

213

踊のへ

著公柯庭丈



387-2/3

踊のへ

善公柯庭丸



大正
10 4 5
内交

版藏號屋阪大

自序

ロシアの踊も随分度々見た。藝術だ々と無理やりに思ひ込んで見物はしたやうなもの、それよりも先に、それよりも強く、私は其の踊まじ子共の職業的勤勞の悲哀を、その踊の手や足の動きに作れて、感ぜずにもられないのが常であつた。殊に露都の夜中専門の寄席兼料理屋では、其地の、又は各國から遣つて來てをる酒客遊子共が、十一時過ぎに劇場が果てゝから、夜半の日課のやうに集まつて來て、夫れ／＼氣のむいた風に椅子を占め、前の小卓に小料理の皿と、好いた酒とを置いて、葉卷の煙で客間が濛とする時分、前面の小さな綺麗な舞臺に入れ代り立代り、

或は緋の或は緑の横手の幕間から、横飛びに躍り出て、節面白い音楽につれて、目まぐるしいまでに踊り狂ふ風情を、私は感賞するよりも前に、一夜一席何程の収入といふ、それこそ一舉手一投足を切り賣りにせねばならぬ藝人の悲哀を、何時も痛切に感ぜさせられるのであつた。

ペンを執る商賣のものも亦、この踊子の境涯と同様ではないかと、不圖私が想ひ込んだのは、近來のことである。あんな小料理屋の舞臺へは決して出まいと、自己の小藝術心に忠實である踊子のやうに、なんでアんな色の着いた紙上へ筆を執るかいと、記者の權威を保持してをる男もある。どこやらの雑誌の持主とか、自動車で數回やつて來ての、罷々の懇請でさへも、氣が向かぬとあれば、向く時までは決して筆を執らぬと、ふ大家も無くはなからう。私の如きは、世の操觚者の仲間の、果し

て一人であるか否かさへ、自分にも疑はれる場合もあるが、兎も角もこれ迄は幸に、自分の出る舞臺だけは、良心の自由な撰擇によつて、出たり退いたりして來た。小料理屋の踊子よりは、幸に藝術的良心に忠實であり得た。

だが考へて見ると、踊子の踊と吾々の仕事とは、吾々が職業的に筆を執る場合、どうやら太した相違はないやうである。稿料などいふことを私が想像にだも上せなかつたのは、數年前迄のことである。近來の私は、それを受取るのを當然の事と考へてゐるほどまでに、何時の間になつてをる。杜甫でさへ「賣文爲活」と諺つてゐるではないかなど、俗な事に雅な理屈を附けたりなどしてゐる。

私は今この書が出版されるに當つて、この文士踊子論に因んで、無造

目 次

ペン の 踊

貝 杓 子

カフエー(上、中、下)……………二

くすり……………一四

メロン(上、下)……………一八

査 公……………二六

銀座繁昌記(一、二、三、四)……………三〇

曝書氣分……………三六

浪人氣分……………四〇

朝 の 街……………四五

球家文化(一、二、三)……………五〇

文 求 堂(上、下)……………七〇

天才到處……………七九

作に「ペンの踊」と名づけた。書中には無論ザクエスカでも摘みながら小舞臺の踊を眺める程度で、極く淡い心持ちで讀過し去るべき駄文の、決して妙くないことを、私自身最も克く知つてをる。しかし讀者としては、こんな中からでも何物かを見出す——恰度藝術眼に富んだ觀客が、職業的踊子の踊にさへ藝術味を見出すやうに——ことが、著作物に對する眞面目な仕事ではなからうか。

一九二〇年の大晦日於新陳書屋

柯 公 生

東西文化	八二
特殊雑誌	八六
愛書癖	九〇
中齋小記	九五
浮沈	九八
十二階下(上、下)	一〇二
斗鷄	一〇〇
流行	一一四
書籍談(上、下)	一一七
河岸の哥兄	一二五
お臺場	一三三
長崎文化	一三七
馬鹿話	一四一
小川町の話	一四五
京大阪	一四九
外來語	一五三
文化無疆(上、下)	一五八

墮胎	一六六
詞の詮索	一六九
女の職業	一七三
肉食	一七七
町の名	一八二
年齢	一八六
其頃の話(上、下)	一九〇
初年の耶穌教	一九八
蟲の音	二〇一
ルイ十四世の間	二〇八
二人の波蘭の女	二二二
嘲と憤と笑と	二三三
杜翁商賣、かはせみの嘴、神様の戸惑ひ	二三三
ノリ坊の想出	二三九

改良服罵倒論……………一四

新時代と慈善事業……………二五

バルチザン寸言……………二六

露人の友愛性と残虐性……………二八

波蘭の叛亂と統治と……………三〇

~~~~~

ぶら 一 翠……………三二

奥女中江島……………三九

ペン の 踊 目 次 終

ベンの踊

大庭 柯 公 著



貝 杓 子

貝杓子は原始的なものである。名ばかり美しくして其實何の奇もない散蓮華な  
 どは、較べものにならない。況して磨き粉でみがかれてピカ／＼してゐるス  
 プーンやら、瀬戸ひきのレードルなどは、貝杓子の原始的雅趣には及びもない。  
 それだけにまた極少量なものを、不完全にしやくい得るに過ぎぬことが、貝杓  
 子の非進歩的な處であらう。兎も角近頃では荒物屋の店からも、此の原始的な



産物は段々その影を潜めて来た。今の少い婦人などには、殆どその名をさへ忘れられて来たであらう。手桶が何時の間にか影を没して、バケツ蹴履の時代となつたことは、荒物屋の店頭が時代の進歩と、それに伴ふ變遷とを語る所以ではあるまいか。併しお墓詣りの阿迦はバケツで下けて行つては氣が濟まぬやうでもあり、墓参といふことと調和が取れぬやうな氣もする。車井戸に釣戸の水の時代には、手桶が相應し、栓をひねるばかりの水道の相棒に、バケツが産れて来たことは、物事の自然の數ではあらうが、しかも如何なる新時代の如何なる場合にも、原始的の物と力とは必要であると私は信ずる。夏の日の退屈まぎれに、種々な社會現象を、少しづつ貝杓子で杓ひ上げて、それに原始的な觀察を加へて見たいと思ふ。

カフェー (上)

印度の佛教も、日本へ渡り來ては、日本の佛教となつた。耶蘇教さへも亦同様の傾向だとは、國粹論者の御自慢な話であるが、西洋産物の「カフェー」も亦、此頃では著しい日本化である。殆ど憲法的に、イナ寧ろ國際規約的に、カフェーの給仕人は男と定まつてゐるのを、何時の間にか女給仕を常則とすることにした東京のカフェーは、時代語の一つに「女給」といふ言葉をさへ造り出した。折角に國際常規通り給仕男を使つてゐるカフェー・パウリスタは、男には相違ないが無鐵砲盛りの男の子に、鐵砲に縁のあるカーキ服をきせて、——此頃は白服のやうだが——軍隊式の給仕振りには、如何に河童流の南蠻のお客と雖も、恐れ入らざるもの蓋し稀であらう。女給の尤物に名を得たるもの、銀座ではカフェー・ライオンと臺灣茶とであらうか。曾ては有樂橋畔「さゝや」カフェーの女王と仰がれたミスお清の、先頃ライオンへ植替へられて以來、同所はへ抜きの星お里君と相並んで、カフェー常連の間に、夏の夜の相場を狂はせてゐると云ふ。



時代の進運はこんな所にも見られる。「遊茶よかノ」お仙の茶屋へ」と手鞠歌にうたはれた明和年代に、笠森稻荷への参詣をダシに使つて、茶汲女お仙の嬌姿を拜まんとした御常連の心理は、今復銀座の散歩に貨幣タラン／＼連が、ライオンや臺灣茶の美形をはりに行く大正都人士の心理であらねばならぬ。「笠森へ女房ぶつてうづらで行き」と當時の川柳は語つてをるが、カフェー・ライオンへバナマ帽と肩を並べて入り来る令夫人の中にも、ぶつてうづらの二人や三人はあらう。

都人士の集中心理に今昔の別がなく、女性中心主義に掛け茶屋とカフェーとの相違がないとすれば、笠森お仙に對して、その當時淺草觀音の大銀杏の下に、柳屋のお藤といふ娘が現はれて、遂に蜀山人をして「阿仙阿藤優劣辨」の戯文を草せしめるやら、二代目瀬川路考が市村座でお藤に扮した濃茶染の着附けが、所謂路考茶の名で一時江戸の流行を成した女性嘆美熱に較べると、ライオンの兩星に對する臺灣喫茶店のお輝の近時福島への歸省が、左程に常連間の評判と

もならず、新聞三面子の紫鉛筆の端にだに上らぬことは、蜀山人に對しても申譯なき次第である。

しかも銀座繁昌記は、先づカフェーの灯より始まらねばならぬ。その昔權現様が、諸國銀山堀出しの吹銀をその儘通用した、國々の銀の不同を統一せんと  
の思召——今日の言葉で言へば權現様の銀貨統一政策の結果出来上つた江戸銀座が、今は帝都繁昌の中心の巷となつて、數千點の灯の光の裡に、人知れぬ淡き戀心を、ビールの泡と共に吹き、他に語れぬ熱き念を、一杯のアイスクリームに消す青年と中老とが、雜然混和するカフェーの宵の賑ひは、流石の權現様も豫想されなかつたであらう。

カフェー——(中)

戀を戀する人とやらいふことがあるが、カフェー出入りのお客の中には、カ



フエー氣分を味ひたいばかりに通ふ男もある。煙草の煙で雲蒸された朦朧氣分を、一杯のビールで數十分間も打眺めて、恰も哲學者といふ閑な男が、霞舒雲卷の眺めに想を練つてをるのと同格だと、云はんばかりの顔付の男も、西洋のカフエーのお客には少くない。だが日本は性急な國柄だ、カフエーのお帳場さんも、その女共も、こんな變哲人の長居を容さう筈がない、流行るカフエーだけそれだけ性急に、先様お代り式を本則とし、この本則の前には、壯者と禿頭との差別待遇は殆ど容されぬ。その點に於て極めて軽い氣分で、しかも性急な壓迫を感じることに少いのは、臺灣茶の特色であらう。一碗の烏龍茶に數片の菓子、たゞそれだけで時餘の閑想に耽つてゐることを妨げぬのは、理想的である。光線の具合の悪いため、晝間は多少とも暗いのが缺點であるが、あれで西洋流に數種の新聞を備へつけ、書翰用箋の用意などが整つたら、瀟洒たる居こゝちの好いカフエーと爲り得よう。

柳の下の霞簀張りで育つた「甘酒」やら「飴湯」やらが、時代の進化とやらに會つて「氷水」と爲り、「ゆであづき」の行燈から抜け出たものが、飲料と食物との兩性を兼ねた「氷しるこ」と爲つた。一旦アイスクリームといふ冷たいものを味はつてからは、「夏來にけらし白妙の心太」では、いかな坊やも承知せぬが當然であり、かくて曾ては江戸の夏の夜を代表した霞簀張りも、甘酒の行燈も、不格好な心太の機械も、何時の間にかやら無用の舊物として、都人土から忘れられるやうになつた。たゞそこに一つの一致は、飲料食物の上にも、何にかな奇を好む心であらう。嚴めしい髯の男が紙製の麥稈で、クリームソーダをチューク、やつてゐる圖は、大人はたゞ小兒の大きくなつたものに過ぎぬことを證明するに十分である。此點に於ては昔の大人も同然で、「生き物のやうにとらへる心太」などいふ川柳を遺してをる。

此頃では東京市の氷の消費高は、日に四五十萬貫を下らぬといふ。この中の何萬何千貫がカフエーの専用に屬するかは、國勢調査局のお役人の仕事に譲つておくが、荷も氷とコップと、そして椅子と卓子とを備へたものは、直ちにこ



れをカフェーと稱し得べきであらうか。但しは又氷、コップ、椅子卓子の外に、女性の定住をカフェーの必要資格と算へべきであらうかは、當然御常連のレフエレンダムに待つて決すべき問題であらう。例へば飲料の點では第一流であつても、性の問題に餘りに冷淡な資生堂(出雲町の)は、果してカフェーと認むべきであらうか否や。「フルーツ・パーラ」の千正屋の二階は、朝行くとどうかすると藝者が來てゐることがあるから、これは檢定ぬきでカフェーの部類へ加へてよからう。この夏からカフェーの番附へと割り込んだカフェー・ナシヨナールがその女將に、従一位公爵桂太郎氏の遺愛お鯉の方を、看板として有する點に於て、銀座第一流カフェーの五指中の一に位すると云へよう。銀座ビヤ・ホールが、烏賊の干物やらおでんやら豆やらを、盛り澤山で差出すのは特色には相違ないが、これは亦カフェーとパーとの、その孰れに屬するかの資格審査が必要ではなからうか。新橋軒に至つては、ビール良し居心地好し女給更に佳しの、理想のカフェーと評判するに何の躊躇も入るまい。「カフェー半玉」の名で常連

の間に論はれてをるおとし君も、齡と共に姿態に一種の艶を添へて來たとの評判である。

西洋のカフェーは、或る意味に於て倶楽部の性質を帯びてをる。既に一人の紳士である以上、何々カフェーへ出入りすること、恰もその所屬のやうに定つてをる。そこで一時「鴻の巢」が文士連の集り所であつたやうに、銀座から日本橋へかけての各カフェーが、紳士とまで成り得ぬ、随つて今日現存のブルジョア本位若くは資本家中心の倶楽部へ加入し得ぬ文士、思想家共を、各々所屬的に吸収することに努めて見るも面白からう。彼等自身こそは貨幣タラン／＼黨には相違ないが、文士何某思想家誰彼れが、凡そ一定の時刻に常客として顔が見えるといふことになれば、これに誘れてやつて來る若いお客も少くはあるまいそして思想家の吸収力が強いが、女王と呼ばれる女給共の引力が強いかを、實地に試すことも亦夏の夜の一興ではなからうか。日本の所謂思想家とやらは、大概は此の位の賣物に過ぎまい。



## カフェー(下)

「煮うり屋の柱は馬に喰はれけり」川柳もこの邊まで行くと神に入つてゐる。芭蕉翁のむくけの原作よりも、立ち優つてをるやうに感ぜられる。煮うり屋の發達したものが簡易食堂であり、居酒屋の進化したものがバーであるが、ここに唯昔も今も變らぬものは、其處に立入るお客の簡易な氣分である。彼等は其の日の稼ぎ高の中から、一夕の慰安を得るため、居酒屋の樽に腰を卸して、自らを矢大臣に擬した。今日の簡易食堂のお客の中にも、矢大臣氣分は少からず見受けられよう。西洋のバーは、縦し紳士と街の女とが、五色の酒を酌み合ふ場所であるとしても、日本化せられたバーは、結局平民の自腹を切つての慰安場である。居酒屋で升の隅から立飲みをやり鹽を揃んで一ト嘗めやつた豪快の氣は、バーのコップ酒に、腸詰の一片を揃む簡易な立飲み氣分と全く同一精神

である。

私は敢てバーとカフェーとを混同しようと思ふものではない、が日本化せられた此二つのものは、それ自身混同してゐるのだ。イヤ二つ處ではない、バーとカフェーとレストランの三つが巴のやうに混一されてゐて、何の不思議もない有様である。西洋ではB、C、R此の三國の境界は甚だ明確で、カフェーとバーとは飲むことを本則とし、レストランは食ふことを本位とする。そして前二者の區別は、バーが強いやら甘いやらの酒を主とするに對して、カフェーは珈琲茶、麥酒および強い酒を飲ませる處と相場が定つてゐる。カフェーだけで言つても、女の行かぬカフェー、家族一同で出かけるカフェー、後家さんの主として行くカフェー、と歐洲のカフェーは自然の特色を、夫れ々が備へてをる。これを我カフェー・パウリスタ——それは日本化中の日本化、雜然混和中の雜然混和の模範的カフェー——に就て見れば、男も女も入り、老爺も子供も來り、記者も藝者も、入り代り立ち代り、奎兵衛も低野拔作も、一人前のお客として



皿のものとコップのものを食ひ且つ飲む。そして物好きな氣取り屋が、所謂カフェー・シヤンタンの光景でも夢想してか、白銅の一つか二つを自働樂機へ投ずると、怪しげな迂鳴りが、隅々の話聲と煙草の煙とをかき混ぜて了ふ。まるで行進譜に促されながら、駈足で食ひ飲みをしてゐるやうな氣分である。尤も此點では西洋のカフェーも同程度で、流石に中以上のカフェーにはオーケストラの用意はあるが日本人が入つて來たと見ると、直ぐかつほれとチヨンキナを奏り出す處などは、不高尙千萬なものである。

一應は爰で東京の市での、烏瞰的カフェー觀を取調べる必要があらう。先づ神田では須田町にメトロポールとカフェー・ドナウと萬世樓とミカドとがある。神保町のカフェー・ランチオン、駿河臺のパウリスタなど、蓋し西にレーニン東に原の類で、兄たり弟たり難しである。振はざるべからずして振はざるものは、本郷のカフェーである。燕樂軒以外には赤門前の一「鉢の木」——私はこの名に多大の憧憬を有つてをる。何故日本化された多くのカフェーが競ふやうにして

平凡極まる西洋名を片假名で附けたがるかを不思議に思ふ——を算ふるに過ぎぬではないか、琵琶湖の底にまで、戀を徹底させた程の帝大の學生が、カフェーの女に行かずして、白山の藝者に向つたといふことは、總てカフェーの繁昌を妨げるものゝ中の一種が、藝者であることを語るものである。が、それに就ての詳論は「私娼」の項に譲るとして、帝大生諸君の本郷が、カフェーを有することの斯くも少いことは、道徳家教授の謬まつた風紀論は別として、聊か物足らぬ氣がする。

淺草は本來バーが発達すべくして、カフェーの有望な場所柄ではない。その「ヨカロー」は美形を覗かせた新聞廣告で有名であり、公園内のパウリスタ以外チンヤ横丁のチンヤ・バーを算へ得るに過ぎぬ。牛込での神樂坂上のカフェー・ラザワと田原屋、四谷での三河屋カフェーは、赤坂見付外の赤坂カフェーの、可なり古くして有名なるに未だく及ばぬであらう。これを要するにカフェーの本場は銀座と定まつた。既に地の利を占めてをるライオンが、近く納涼會と



やらを催し、女給に丸鬘を結はせて、大に御常連を集めて示威運動に人の和を誇らんとするといふは、商賣上手ではあらうが、さてく暑いことである。

くすり

維新建設の當時、智慧者の大久保内務卿は、明治の將來を過渡の十年、改良の十年、守成の十年とかに分けたと云ふ話であるが、守成が聊か續き過ぎて木乃伊となつたものもないではない。若し「くすり」の世界から維新後の五十年間を分界させるなら、千金丹の二十年、寶丹の二十年、そして仁丹の十年と言ひ得よう。未だ蝙蝠傘をさし、手に鞆をさけて「本家は大阪安土町」と、呼び賣りをした千金丹は、精神と型とを藥種行商の祖定齋屋から受け繼いだにも拘はず、その呼び聲と歩調とに新し味を見せて、その流行は一時都鄙を風靡した。千金丹に亞で次の時代を作つたものは寶丹であつた。守田寶丹翁の風變り

の書と共に、その錫の容器は、日本は愚か東亞の天地に行き渡つた。支那四百餘州を呑むほどの年少氣鋭者達が、寶丹を唯一の武器として、その眞劍な夢想を果すべく、古の蜀の國へさ、入込み得たほどであつた。

何時の頃からか、新時代を標榜して起つたものが仁丹である。定齋屋式の行商の故智杯に目もくれず、新考案によるあらゆる廣告手段を大膽に利用することによつて、一躍して賣藥界の巨人となつた。處が最近廣く且つ深くぐい幅を擴げて來たものが、有田ドラックである。若し仁丹を賣藥界のケレンスキとするならば、ドラックはレーニンを、否一層險惡な人相をしてゐるトロツキを、想像させる。そして仁丹もドラックも、共に賣藥界の革命兒であることだけは確である。ドラックは國音「道樂」に似てゐる。すなはち道樂藥のドラックが、幅をきかせて來ることは、やがて日本に道樂者が多く、道樂病が幅をきかせてゐることを證據立てるので、有田ドラックを怪しからんものゝやうに言ふ人は、先づ道樂病に鼻の落ちかゝつた此國人の怪しからん状態を咎める



ことを忘れてはならぬ。雷鳥女史の新婦人協會が、結婚男子の總てに對して、花柳病の疑を持つたことは、やがて有田ドラックの事業の擴張と繁昌とに、十分の理由のあることを證明する所以であらう。

しかし豪く進歩したやうで案外進歩と變化のないのが、賣藥界である。西洋の新知識を看板にして競つてゐる、内國製藥、三共、並に星製藥、更に理科研究所まで有つてゐる三ツ輪などいふ進歩派が一方にあると思ふと、御成道にはまだ黒燒屋の店が現存してゐるではないか。蝶貝で張つた定齋の箱荷を擔いだ定齋屋が、東京市中をガチャつかせて歩いてゐるではないか。黒燒が多少とも需要があるとすれば、肺癆の特藥淺右衛門藥やら、急病に効目があると稱せられた今川の赤藥やらの時代を距ること果して幾何であらうか。初めて富山へ赴いた友人からの手紙に「門を出づれば立山の聳ゆるに接し、街に出づれば藥臭きに驚く」とあつたことを私は覚えてゐるが、その市内の一巨刹妙國寺内の反魂丹の祖萬代常閑の碑が有名である限り、その二百五十年來の賣藥業が、東は

太平洋を越えて米國、南は熱帶地方を通じて印度まで、その販路の拓け行きつゝある限り、更に東京數十萬軒の家々へ、富山からの藥袋が、一年一度信用貸的に配られてある限り、賣藥界は飽まで新舊渾沌の竝進を續けて行くより外はなからう。「極内でかくらんをする定齋賣」と江戸人にさへ擲擧はれた定齋賣を、遽に時代錯誤の産物だなどメケナす譯には行くまい。

それにしても仁丹とドラックとの兩革命兒は、今少し奇抜な着想きをする必要であらう。道樂病藥を徹底的に天下に擴めようとするドラック君ともあるものが、今更國粹論やら舊道德論やらを、假令口先きだけにでも楯に取つての説法は餘りに平凡に過ぎる。大に新婦人協會の花柳病請願運動に、數萬圓の寄附でもして、ドラック即アンチ、ドーラク氣分を天下に發揚すべく試みては如何であらう。



メロン (上)

メロン愛好家が、大隈侯邸の品評會以來、切賣りまでして美味宣傳を試らうとしてゐるさうである。兩三年前までは一個四五十圓もしたメロンが、昨今では六、七圓位の處まで落ちた。支那の書物に就て西瓜の由來を調べると、五代の時、胡峯といふ戎地より種を移し來るとあつて、梁の武帝西園に綠沈瓜を食ふなどゝある。梁の武帝が飛び出したる綠沈瓜などゝいふ文字で西瓜もぐつと豪くなる譯であるが、大隈侯邸の名と、メロンといふ高襟名とで、事實以上メロンの珍を想はしめる。が、その淡黄色の肉と、淡くして軽い味とは、如何にも上品な瓜で、残念ながら西瓜は敗北である、敗北ではあるが、メロンには到底西瓜の野趣はない。朝から井戸に釣るしておいて、午睡の後で、胡坐に肌ぬぎで飽食するに於て、西瓜は我が家の友である。ナーニ梁の武帝だつて、達磨

との會見の餘興に、胡坐位かいて西瓜の喰ひ競をやらかしたかも知れない。メロンが必ずしも貴いのではない、その珍しきによるのである。同じく肉果の生食される點から言ふと、必ずしも胡蘆科植物と言はず、總ての生食果物は、我國に於て今少く珍重され賞味される風習を獎勵する必要があると私は思ふ。この點に於て果物店としての千正屋は、東京市民に貢獻する所が決して少々ではない。三越白木の食堂などでも、二三種の凡果以外に、今少し犠牲を拂つて、珍果賞味の風を獎勵して貰ひたいものである。斯く言つたからとて決してバナナや水蜜糖を凡果扱ひにするのでもなく、又徒に凡果を擯斥する譯でもない。西南阿弗利加の原産である西瓜が、寛永年間に葡萄牙人の手で、我國へ渡つて來た時分には、それは珍果以上の珍果であつたに相違ない。梅窓筆記などを見ても、所謂長安城東出五色瓜とあるのを、西瓜に當てはめたやうにも見える。然るにその珍果が、野趣に満ちた畑で作られ、野人や町人の手で賣買されるやうになるにつれて、賞味者に馴染がついて來るので、果物そのものが凡果と成



り下るのではない。「西瓜賣首實見のやうに見せ」「西瓜盗入ねち首にして逃ける」など川柳子の社會觀に入るやうになつて、西瓜の民衆化が愈々著しくなつた。私の理想は、今日の珍果メロンを、貴族や富豪の卓上から、平民の口へと運びたいことに在る。

歐米では果物商は、伊太利人が希臘人かに、殆ど相場が定まつてゐる。それは勿論南歐の暖地が、果樹の栽培産出に適したるに因るのであらうが、概して栽培の點でも取引の上でも、果物を珍重する念が、西洋人は邦人の比でないやうに感ぜられる。米國のオレンジにしても、日本で栽培されると、年一年とあのヘッがなくなると云ふぢやないか。ヘッの談だけに「笑はせるぜ」といつて了へばそれまでだが、ヘッがなくなるだけ、それだけ、オレンジの特色と美味とは減る譯で、こんな日本化はいくら頑固な國粹論者も褒めはしまい。同じ時代に東西兩洋に頒種された西瓜が、今日では西洋西瓜の方が、その味の上で立優つてゐるのは、地味の關係といふよりは、恐らく多年の栽培方の適切であつ

たことに囚らう。櫻の國が、花でこそ勝つてゐるが、食用としての櫻ン坊を殆ど西洋の傳示によつて知り得たことを思ふと、吾々が如何に果物の趣味に冷淡であるかを恥ぢねばならぬ。

冷淡であるばかりではない、侮辱をさへ瓜に加へて、半ば遊戯的餘興的に、葫蘆科植物を取扱つて來たことが、今日東洋人たる吾々が、果物に没趣味であり、やがては西瓜がメロンに敗けた根本原由であらう。即ち支那で所謂「瓜戰」と云ふこと、また「抽火」と稱するものなどが夫れである。八百屋の店先の涼み臺で、哥兒連が寄つて近處の娘の評判もあきた頃に「オイこの西瓜に種が幾つある、一番外れた奴が西瓜一個おごるんだ」などやる遊戯が、所謂瓜戰で、支那傳來のものである。支那では「紅抽の肉を去りて燈籠とす」と云つて西瓜提灯を造しらへるが、我國ではたしか白瓜が身代りに立つやうである。



メロソソ(下)

私はこゝで所謂「果樹責め」の土俗が、各地方に、郷土的風俗として現存することを物語らねばならぬ。それは各地とも大概正月の半頃に行はれる習俗であるが、一人の男が鉈を持ち、他の一人が團子や粥を煮た汁を手桶に入れ、果樹の前にやつて来て大音あけ「なるかならぬか、ならざあ鉈で打ち切り申すぞ」といつて少しばかり幹に傷をつけると、手桶の男が「なりますく」と答へて、その汁を切口に注ぎかける。或は處によつては萬力男といふのが「今年は澤山なるかならぬか、己れツ」と掛矢の大槌で、樹の根を打つと、他の一人が「なりますから御免々々」といふ、萬力男は得意氣に「さもさうすく、誰と思ふ萬力様だ」と呼ばりながら、果樹の邊りを歩き廻る。さうかと思ふと信州の或る地方では「柿よ柿よ、よくなれく、ならぬとこれで切つてしまふぞ」と

いふのもある。思ふに此の土俗は、「目傷」と稱する果樹剪定法を、自然に行ひ來つたものには相違ないが、その言葉や仕打ちから見ると、如何にも果樹果實を輕視する、卑しむべき念慮が窺はれる。

一般人の果樹果實に對する心持が、低級であるばかりでなく、實は神田の果物市場あたりの問屋連の、果物に對する没趣味と無知識には驚かされる。例へば「ヴィクトリヤ」その他諸種の莓に對しても、てんで原名などを覚えようともしないで、「圓」だ「長」だで通して了ふ。問屋根性は徹して斯うしたものだとしても、餘りにその非進歩的なのに驚かされる。需要者の方も同程度だ。千正屋の店で珍果類を買つて行く客が、必ずしも喰ふお客ではない。珍果なれば珍果なるだけ、高價なれば高價なるだけ、買ふお客と喰ふお客とは違ふのだ。即ち御進物用として、單買ふばかりに過ぎぬ。だから珍果を賞味する階級は、貰ひもし買ひもして賞味するが、眺めて済ます階級は、何時まで経つても珍果を味ふ機會はない。果物趣味が一般に普及せぬのは、此邊の消息に原因する。



メロンばかりが珍果ではない。つい十日ほどの航程の處に、南洋といふ果物の天國があるではないか。熱帯の果物として、邦人が唯バナナばかりを知つてをるに過ぎぬことは、この南隣の天産物に對して、餘りに没趣味過ぎる。成る程マンゴー（蒙果）やマンゴスタンは、兩三年前から千疋屋の冷蔵庫には輸入されてはあるが、それが如何な機會に、東京でどれだけの人々の口に入るかは想像に餘りある。ゾーリオやマンゴーには一種特有の臭味があるから、日本人の嗜好には適せまいなどいふ説もあるが、果物に對する邦人の味覺は、香味や臭味を區別するほど、左程に發達はしてをらぬと私は思ふ。先づ兎も角も熱帯果實の輸入を試みて、これが賞味の普及を圖るがよからう。葡萄よりも一層上品で、舌の上で淡雪のやうに溶けて了ふマンゴスタンやら英稱オーター・メロンと呼ばれて宛然西瓜のやうな風味のババヤの實やら、臭果とは云へドリヤンやら、外形がチャガ芋に似て柿の味のするチョコーやら、やゝ月並の嫌はあるがライチーやら、液汁の極めて多く水蜜桃の香に似たビリンピンやらは、如何に

も邦人の嗜好に適しさうで、我國へ輸入し來るには、至極適した珍果であらう。特に舶載して輸入することが可能であれば、一個の實から七八合の甘い汁の出る古々椰子の果汁の如きは、フルーツ・パラーのお客には、好適の品であらう。郵船の濠洲通ひの定期船は勿論、熱帯からの船には、大概は完全な冷蔵庫の設備はあるから、南洋からの各種珍果の輸入は今日では決して困難な仕事ではない。困難なのは珍果の輸入よりも、これを普及させる實際の方法であらう。それには果物店以外、三越白木の食堂をはじめ各カフェーで、瓜やら珍果やらの試食の獎勵が捷徑であらう。こゝ數年來東京で、食用果物として開拓されたものが、西洋梨とメロンとだけに過ぎぬとは、何たる心細い話であらうか。見事な西洋梨でも、一個三錢の札が立つと誰れも買手が無いといふまでに、果物に理會がないことは、進歩した都人士として歎かましいことである。北歐人が生果を食り得ることを楽しみに伊太利の旅を楽しむことを想ふても、吾々は柑橘類その他の温帯果實に満足しないで、その食慾を熱帯地方にまで擴げて、舌



の上で果實の大國を味はうではないか。

査 公

私は軍閥と官僚とは、若荷や獨活と共に嫌ひであるが、巡查諸君には衷心からの親しみを以てをるものである。警部以上に對しては、自然官僚の側に算入するものと見えて、他人のやうな氣がするが、巡查諸君の爲めとあれば、一ト晩や二晩は、忠實に代勤する位の親しみを持つてをる。たゞ騎馬巡查と申すものだけには恐れ入る。昔者は晏子の御者といふがあつて、變則な自己尊嚴者を嘲笑した代名詞とされて來たが、大正の晏子の御者は、騎馬巡查を措いて他になからう。處が妙なことには、騎馬巡查の創設者若くは建案者であつた松井といふ警察官僚が、この頃他への話の中に、騎馬の巡查が、あれで以て更に亂暴を働かれてはたまらぬ、と云ふやうな意見を發表してゐる。晏子の御者に、多

少愛憎がつきたのではあるまいか。

巡查の劍を廢止するといふ報道が、數日前の新聞に出た。が、これだけではまだ遽に其案に賛成することは出來ぬ。何故なれば劍は廢止されても、之に代るものが何であるか分らぬ不安があるからである。或は全然無腰となるのか、或は棒になるのか、それとも一躍してピストルになるのかも知れない。だが私の巡查觀は、棒や劍などいふそんな物騒な處から出發するのではなく、馬に對する注意から總てが起算される。

私は時々、人間が自殺し得る動物であることを、有難く思ふことがある。言ふまでもなく自殺は、單人類のみが能くし能ふ特權である。夏の日の炎天に、小山のやうに積んだ、見るからに重さうな荷車を、無理無體に曳かされて來る荷馬車を見る時に、私は特に此の感を深くする。馬に若し自殺をする能力があつたなら、あんな場合よく、世を悲觀して、馬小屋へ歸つてから、アノ長い頸でもくくつて、自殺を遂げることであらうなど、想像する。女同志の話を書き



いてゐると、時々實際死ぬにも死ねませんなどいふ言葉で、或る悲観した場合を形容してゐるが、重い荷を積んで苦しみ抜いてゐる馬こそは、形容詞ではなく事實死ぬにも死ねない境遇である。

「馬を呵らせては馬士も一人前」といふ古い川柳があるのから見ても、馬士が馬を呵責することは昔からの事らしい。しかもその程度に至つては、生産機關の發達と運輸事業の繁多を來した今日は、到底昔時の比ではなく、馬方の呵責は鞭撻となり打擲となる。そして此の過重な積荷と、この苛刻な虐待を、眼前に目撃しながら、殆どたいした感傷もなしに、其儘に過ぐすものは巡査諸君である。

支那の各地では、多少とも下級労働者の集まる所には、羊の肝や牛の脾臓や驢馬の胃袋のうでたものや、馬の頭の丸煮などを店頭之列べて、切り賣をしてゐる小店が幾つもある。吾々には見ただけでも胸が悪くなるが、支那の一般人民には、別段何の感じもないやうに見受けられる。荷馬を虐待する馬方と、そ

れを無感傷に見過す巡査との、その殘虐性が慢性となつて一歩進むと、支那のこの煮こみ屋の店頭の光景となる。そして其時こそは、官民の別などはなく、國民を擧げてバルチザンと化し去る時である。

警部さん以上は、官僚で收まつてゐてもよい。私の理想では巡査諸君だけが常に人民の友であり、人民は常に巡査の友であつて欲しい。それには今の巡査が、人民の友となり得るかと言へば、殆ど六ヶ敷いと言ふの外はない。動物愛護の精神さへ、完全に有つてゐない巡査が、どうして直ぐに人民のために、愛護の精神を振ひ興し得よう。御維新の時分に、巡査が薩摩の士族の專業とされたり、邏卒の名で警察を軍隊化したり、西南戦争に警官隊を組織したことが、やがて其後の四五十年間に、人民の友であるべきものを、人民を叱る役でもあるかに、變性させて了つた。丁度馬の愛護者であるべき馬士が、馬の虐待に無感傷になつて了つたやうに。此間新宿あたりで、馬方の餘りの殘虐な呵責に例の自殺といふ事の出来ぬ、馬殿が、腹の底から起した忿怒の餘り、すつくと



立ち上つて前脚で其馬方を抱き込んで、頭やら肩へ噛みついた揚句、前の石の敷いた道へ放り出して、とう／＼馬方を死に致らしめたといふが、官僚に成り切つた高級警官連は兎も角、親しく人民に接する巡査諸君は、この現実な人馬の悲劇を、如何に觀らるゝであらうか。

## 銀座繁昌記(一)

音楽の世界から最も縁の遠い仲間の一人である私は、銀座の三大楽器店の前を通る毎に、楽器——特にピアノのやうな大なものが、一體月に幾つ位賣れるものであらうかなど、素人らしい餘計な心配をする。そしてその度毎に「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春」と、江戸の繁昌を諷つた古い俳句を想ひ出しては流石に東京だ、その又た銀座だ、三大楽器店が鼎立の姿で、日新の装ひを窓際にもまで現はして、繁榮して行くのが當然であらうと、想ひ返すことがある。共

益商社の製造高だけに就て見ても現時一ヶ月に百五十臺のピアノが製造される。米國の或る大會社で、一時間に五臺平均でピアノが製出されることを考へれば月に百五十臺といふ數字は、比較にならぬ氣もするが、こゝ兩三年來、オルガンと殆ど同數のピアノが、賣れて行くやうになつたことは、樂界の急速な進歩であると同時に、また銀座文化の向上であらねばならぬ。

銀座文化史は、尾張町の角から始まらねばならぬ。その上から言ふと、アノ四ツ角の交番は、繁華と交通の邪魔にこそなれ、交通巡査が十字路の交通を刻々に支配して行く今日、あの交番は當然取拂ふか、少くとも家の五六軒も南方へ移して、日夜に榮え行く銀座の繁華を、ヨリ自由にする必要がある。モ一冊年ほどにもならうか、尾張町の四ツ角が、四ツの新聞社で占められてゐるのは。しかし吾吾中老にも、その四新聞社の中の二つが、何新聞であつたか、今日ではモ一明確と記憶がない。流石に今のライオンの處に東京毎日新聞社があつてそこに島田先生が銀座され、民論を主張されてゐたことだけは、今でも時にラ



イオンのお客の話頭に上るほど、誰にも記憶されてゐる。

尾張町が銀座繁昌の中心を成し來つたことは、江戸時代からの事である。雖市や人形市は、今日同様十軒店が繁華第一ではあつたが、尾張町にも三月と五月に此の二つの市が立つた。「雖に菰葺きはせずの尾張町」といふ古川柳に徴すると、歳の市同様、街上に假小屋をかけた位のものに過ぎなかつたのであらうが、それにしても尾張町は、日本橋から南での繁華の中心點であつたことは確かである。龜屋、濱田屋、布袋屋、恵比須屋といふ四軒の呉服屋が、尾張町の四ツ角に店を張つてゐたことは、後年四新聞社がこの四ツ角に據つたことに對して、銀座史中の面白い對照であると思ふ。「尾張町通りぬけると静かなり」「名はたいをあらはして居る呉服店」といふ古川柳があるのを見ても、恵比須屋の暖簾に大きな鯛でもついてゐて、四軒の店で呼び立てゝゐる賑やかな光景が想像されるではないか。

尾張町の四ツ角ほど、臭と音と煙とが絶えず四方から來て、それが真中で旋

回して、交通巡查を惱殺させることの、これ程の場所は、東京市中の何處にも外にはなからう。數寄屋橋方面からは、風につれて天金の油臭い臭が來る。辻の東からは、風のあるなしに拘らず、竹葉の蒲燒の臭が、交通巡查の嗅覺と、會社歸りの電車を待つお客の味覺をそゝる。ライオンの獅子の看板の代りに、清浦さんの木像でも安置して、この鰻香を一手で嗅いで貰ひたく私は思ふ。音としては新聞賣子のせき込んだ鈴、場所柄には案外悠長な響のする、服部時計臺からの時の音、小僧さん連の自轉車の鈴、自動車の喇叭、舗道での下駄の軋などであらうか。木村屋の麵麴を焼く煙は高く飛ぶがために、行人の感傷を呼ばぬにしても、自動車やオートバイの尻から落して行く臭煙は、尾張町の繁華の諸要素中で、迷惑なるものの一であらう。

今の尾張町の角の服部時計店が、明治廿七年に朝野新聞から、アノ地所を僅かに四千五百圓で譲り受けたといふ事實は、大正今日の東京人をして呆れ且つ驚かしめよう。それは兎も角、四軒の呉服屋から四軒の新聞社へと變つて、今



はそれがカフエーと洋服屋と時計店とで、三つの角を占められてをることだけは、誰にも強く印象されてゐるが、交番の後に當る一角が、低い洋風の家であることだけを知つて、その何屋であるかを判然知らぬ者は、恐らく私ばかりではあるまい。尾張町といふ此目抜き四辻の一角に、こんな不明確な印象を遺してをることは、銀座繁昌記の上に、まだまだ偉大な將來のあることを暗示してをる所以である。

## 銀座繁昌記(2)

銀座は繁華の要素を夫れ自身に備へてをる。出雲町の背景には、所謂金春藝者が、その粹な窩房を列ねてゐる。支那流に言へば即ち教坊といふのであらうが、如何にも慘憺たる蝸廬を、よくもあゝ小ぢんまりと人間の棲家に造らへ上げたものだと思心させる。それに引續いて同じく銀座の背景を成してゐるものが

鍋町から日吉町へかけての新聞街である。都人士の群衆心理が新聞號外賣の鈴の音から急變し得ることを知れば、銀座の繁華と雑鬧とが、その東裏西裏及び表通りの諸新聞社に負ふ所の尠少でないことが肯かれる。更らに今一つの有力な背景は、言ふまでもなく歌舞伎座である。木挽町に「かぶき」の興つたことは萬治三年以來のことで、守田勘彌といふ名と共に、木挽町の芝居が、銀座の繁榮を扶けて來たことは、正に二百六十年間引續いての由來であると云へる。婦人が都市文化の上の大勢力であることは言ふまでもないが、我國の婦女道徳が、徒に籠居主義を神聖なものとして爲し來つたために、江戸から東京へかけての各時代の繁榮に、容與する所のあつた婦人は、家庭の婦人ではなくして、所謂教坊の女共であつた。處で下町の素人の女も、山の手の古い奥さん連も、その籠居主義から僅に抜け出て、殆ど無意識に藝者や藝人共と、混然雜然立交つて、社交的空氣に浴かる唯一の場所がある。それはお芝居である。この關係は昔も今も殆ど同一で、籠居主義を通り越して閉門主義を強ひられてゐた徳川大



奥の女中によつて、木挽町の山村座での有名な江島事件が惹起され、日本演劇史に一波瀾を造つたことは、歌舞伎の吸引力が如何なる時代にも、我國婦人の前に、その籠居主義をも閉門主義をも、そして纏足同様の舊道徳をも、無造作に破壊し去つたことの何よりの證據である。そして此の吸引力こそは、今日木挽町の歌舞伎座が、銀座のために其の繁華を彩る好背景であることの、偉大なる動力であらねばならぬ。

これだけの有力な背景的勢力を自然に備へ得た銀座が、それ自身の繁榮のために、是等の背景を如何に利用してゐるか云へば、遺憾ながら何等の利用だも講じてをらぬ。或はそんな事實に、全然氣が着かずにゐるのかも知れぬ。最近銀座の商店仲間の問題になつてゐることは、銀座通りの中に銀行や會社の建物が殖えて、舗屋と店舗とを隔てるために、銀座の繁榮を妨げることが夥しく、その爲めには大きな建物の第一階を、是非とも商舗とすることの交渉だといふ。これも勿論必要な一策には相違ないが、尾張町の辻の南にも北にもその東側に、

十數軒から廿間以上に亘る板圍ひが、二年も三年も其儘で打棄つてある事實が、どれ程銀座通りの繁榮を妨げてゐるか分らぬ。何々會社建築場などいふペンキの板圍ひは、その建築が永引けば永引くほど、その會社のためにも名譽な事でもあるまいが、銀座全體のためには、二三本の抜けた歯が、前歯や臼歯などの健全を著しく害なふと同様、他の繁榮に暗い影を投げるものであらう。

然らば背景利用の銀座繁榮策は何であらうか。私は銀座の夕景に、一二時間ほどの『散歩時間』の習慣を造り出すことが、實効のある新案であると思ふ。歌舞伎座にしてもが、この先何時までも、晝間から夜遅くまで十時間に餘るほどの長時間の興行舊慣を維持する譯にも行くまいではないか。そこで舊慣を打破して興行時間の改造が出来るまで、一時の變則として、五時頃から一時間半ほど休憩外出の時間を造るなども、日本劇場として一種の新案ではなからうか。結局それ等の芝居客——奥さんも藝者も學生も労働者も會社員も、種種雑多な階級の人々が、勿論女を中心として、銀座の舗道を、尾張町の角から或は南へ



或は北へと、思ひ／＼に散歩するといふ案である。道徳的社會改良家からは如何にも外道視されさうな考案ではあるが、「流行」を平民化し「繁榮」を時代化するために、先づ一應私の藝者論を聽いて頂きたい。

### 銀座繁昌記(3)

この間皇太子がお見えになつた羅馬尼の首都、ブカレストの夕ほど一種變つた派手やかさはあるまい。市の中央公園には、環圓を成した車馬道と散歩道とがある。夕方から集まり來る市民——必ずしも紳士淑女ばかりではないが、散歩の際には有ゆる階級の市民の總てが、一様に申分のない紳士淑女となることは、他の歐洲諸國のそれと同様である——は軽い散歩を續けるものもあり、車馬道に對するベンチに腰を卸して、涼風を入れてをるものもある。その際輕車に鞭打たせて、若い女が、大概是單身、時には男と同乗して、馬蹄も軽くその

車馬道を乘廻す幾輛かゞ、數輛から十數輛、やがては數十輛となつて、恰度走馬燈の人馬のやうに、幾回となく環圓の道に乗廻す。これ等は言ふまでもなく私娼の女共で、成るべく人目を惹くやうな色合の羅に装ひを凝らして、人の出盛りの々方の公園に示威的遊弋をやる次第である。

私はなにも物好きに新橋藝者をブカレストの私娼と同視しようといふのではない。たゞ閉門主義籠居主義の結果、所謂素人の女が、全く社交といふことと没交渉になつて了つた我國で、社交的女性として藝者が現はれ、藝者道が彌榮えに榮え行くことは、寧ろ當然なことであると思ふ。性慾を表面から目的とする公娼こそは、一日も其存在を容しおくべきものでないに反して、縦し裏面に於て幾分私娼の實を備へてをるにしても、その本來の職分に於て社交的婦人としての藝者の存在は、婦人籠居主義の頗る合理的な結果である。そして之が發生を促したものが、我が家庭婦人の舊來の籠居主義であることを知れば、之を自滅させるものは、また當然家庭婦人の社交的進出であらねばならぬ。總ての



婦人が正當な意味で、家庭から解放されて、自由な女、社交的女性となり得た時に、藝者の自滅はひとりで行はれる。

そこで銀座の繁昌——首都の夜の賑ひを見せる代表的のものとしての繁昌の爲めに、銀座の舗道を舞臺として、階級も職分も全く無差別な繁榮を現出させた。其處から新時代の好尚に應じた「流行」を産出したのが、私の理想である。例へば兩三年前に羽左衛門が、自分の嗜好に基いた渦巻き模様を、勿論芝居を舞臺としてとはあらうが、何かの機會に流行らせた。するとそれが呉服屋の手によつて、巧に山の手の奥さん連の間に、こん度は上品な意匠をこらして、同じ渦巻を流行らしたことがある。日比さん時代の三越が、不圖した動機から、模様型に所謂「元祿」の流行を作り始めて、あれほどに大流行を見たことは、吾々の近い記憶である。だが斯んな風に、呉服屋の案で呉服屋の手で造られる「流行」は、實は政友會の幹部で捻出された「輿論」と同様、決して有難いものではない。

こゝに今一つ見逃すべからざる婦人の心理がある。それは婦人美の上に假裝慾とでも、無理に名づけ得るものである。即ち素人の女が藝者と間違へられるまでに扮するのと、藝者が亦往々にして好んで素人風をする、その矛盾した心理がそれである。婦人を専門に扱ふ白木や三越の呉服の賣場に立つ番頭連さへが、近頃は奥様やら藝者やら、幾ら見ても見分けの着かぬお客が殖えたと言つてをることは、此の矛盾心理の旺に實現されてをるのを示すものである。

これ等の總ての現象を網羅し、それに銀座の諸背景を加算して、私の銀座繁榮策は生れて来る。先づ「散歩時間」の制が、銀座の日々の行事となると、アノ舗道では總ての階級の婦人男子の、その個々が紳士となり淑女となつて、所謂織るが加く相接觸する。斯くして其の間から生れた繁榮は、單に今日迄の紳士閥の繁榮ではなく、また此の織るやうな接觸から生れた「流行」は、即ち時代の流行であつて、決して大商店の意匠部が、獨力專斷で造り上げる「流行」ではない。新橋の連中も、化粧が出来上つて、これからお花へ出るといふ一時



開程前に、銘々が十分か十五分宛も、銀座の通りを遊弋することは、商賣上から云つても決して損はなからうぢやないか。正當な家庭婦人の籠居主義の身代りを勤めてをる藝者であると見做せば、彼女等に銀座繁榮の先驅の名譽を與へても、左して差支はあるまいではないか。

### 銀座繁昌記(4)

市役所側で現に銀座について問題としてゐることは、アノ舗道を狭めること、今一つは柳の並木を、他の行路樹に代へようかといふことらしい。私は多くの銀座愛好家と共に、此の二つの考案には双つながら反對する者である。あの見事な柳の竝木があればこそ、銀座が雨に好く灯に好く、風にさへ風情があるのではないか。如何に篠懸木が、観賞用の行路樹として、舶來ものとして珍重されてゐるにしても、銀座を單なる買物の場所とせず、観賞散步の心地好

い街として發達させるためには、是非とも柳でなくてはならぬ。夕方の驟雨の後で、雨に洗はれて一段と青い柳の樹間に、瓦斯や電燈が、まだ全く暮れぬ街に輝いてゐる趣は、如何に銀座を美化するであらうか。柳であればこそ、雨も風も灯も、更に日盛りの炎暑も、皆この大通りに得難き風趣を添へるのではないか。行路樹統一論者どもの、銀座の柳を他のものに代へる考案などは、是非とも芽の中に撈つて了はねばなるまい。

柳の竝木で飾られてある舗道の幅を、現在より狭めるといふことは、元真中の車道を廣めようといふ窮策から來たものに相違ないが兩側の舗道こそは、それ等に沿ふ商舗の窓飾と共に、益々改良と進歩を加へべきであつて、それを反對に狭めようなどは、以ての外な愚案で、觀やうによつては銀座繁榮の致命傷といつても可いかと思ふ。ガタ馬車の復活を想ひ起させるやうな、不格好な乗合自動車はじめ、一切の荷車は、然るべき裏通りを通させるが可く、積載量の嵩んだものは、夜中零時以後の運搬に限る歐洲流の規定を實施するが可い。こ



れ等のために車道の擴張が必要とされ、随つて今の舗道から半間も狭めるなどいふのは、歩行本位であるべき銀座を、車馬本位に換へんとするもので、この大通りの繁華に大影響を來す愚案であると私は思ふ。

序に説き及ばねばならぬことは、夜店の問題である。「銀座の夜店」と折角名物の一つとなつてをるものではあるが、これは銀座の眞の發展と今後の繁榮のためには、モーター時代の要求として、撤退して貰ふより外なからう。それは恰度葛紅葉の寄生木のやうなもので、一時相應に美觀は添へるが、何時かは樹の發育のために、取拂はねばならぬ時が來る。今日尾張町の角から三丁目の角までたゞ東側ばかりが、夜分の散歩客で押すなりの賑ひを呈してをるのは主として夜店のある爲ではあるがその代り自由な散歩や心地よい氣分を妨けることは決して尠少ではあるまい。それも去年あたりまで出雲町に月に一度ほど催された晝から夜へかけての植木市の露店のやうなものなら、却つて趣を添へて好いかとも思ふ。

次には當然商店自身の内面的改造やら、夫々の窓飾りなどに就て、一ト通りの評判を吟味すべき順序であるが、その第一着に私の小さな注文を、店の御主人連の前へ差出したく思ふ。お客として買物に入つた際、風の具合と時の具合とでもあらう、ふと煮物の臭ひが、奥の方から傳はつて來て、客の嗅覺を刺激することがある。この臭は、銘々の家でも日々慣らされてゐるのではあるが、店頭に立つた時のお客の心には、美しく想像された商品があるばかりで、それを心持ち快く買つて行かうといふ念より外ない。この客の美しい想像を、その儘に満足させることが、文明的商店として、第一の義務であり伎倆であらねばならぬ。それ故理想の小賣商賣は、荒い聲一ツ立てぬ圓味のある親切の籠つた、そしてお客の美しい物慾を満足させる、純美な取引でなければならぬ。そこへ店の奥の方から煮物の臭——如何にも堪へ難い悪臭が傳はつて來て、客の嗅覺を打つばかりでなく、その臭が賣臺のあたりへ低迷してゐると、美しく想像を描いた商品慾も、一時に打消されて了ふのは勿論、白色の商品などが急に煮



しめられるやうな色に變つたやうな氣までする。同じ道理で奥の物蔭から、赤ン坊のイラ／＼する泣聲の傳はつて來るのも、客の平和な心をかき亂すものである。銀座の商舖ともあるものは、モーこんな時代遅れな臭と音とは、店頭の禁物として、根絶を計らねばなるまい。そしてそれは店と住ひとを別々にすることに由つて、容易に解決がつく。

## 曝書氣分

繁華な銀座の話で氣くたぶれをしたので、こゝ一兩日家に居て、古臭い氣分に浴かりたく思ふ。今日の紳士共の夏の樂しみは、避暑といふことにあるらしい。數年來流行を極めた登山熱さへも、今年はモー下火だが、狭い宿に窮屈さうな避暑だけは、流行すたりがなく毎年大繁昌の模様である。處で昔の人は暑を避けんとはせずに暑を忘れることを努めた。そして暑を忘れる工夫は、文

字の親みあるものに在つては、午睡よりも寧ろ曝書にあつたらしい。然るに此頃のやうに、日本紙刷の書物が殆んど跡を絶つやうになつて來ると、曝書は漸次不用なことになつて了ふ。西洋本も風に當てる必要はあるが、曝書の趣は、唐紙や日本紙の書が、梧桐から來た風になぶられて、自づと繰り開けられて行く處に趣が存する。斯う云ふと、私が如何にも和漢書の藏書家のやうでもあるが、決してさう云ふ譯ではない。

狭い室の中に擴けたまゝ、時節柄北樺太から露領方面のものに眼が注ぐ。それには先年購ひ込んだ松浦竹四郎の蝦夷日誌十四卷、新井白石著蝦夷誌などを、手に任せて打開いて見る。外でもない、ニコラエフスクの土地が、如何いふ風に扱はれてゐるかを知ることが、私の興を惹いたからである。先づ安政二年出版の蟲喰ひだらけの「蝦夷地全圖」を見ると、今の露領大陸の一端が圖示されて、單に「サンタン」と書いてあるばかりである。次に嘉永六年版の「蝦夷國境與地全圖」といふのを見ると、流石に經緯度まで割付けてあつて、大陸の一角



には「山丹滿洲」とあり、黒龍江の江口が描かれて「マンゴー川」と記されてある。北樺太については極めて細密に圖取られて「北蝦夷唐太一名サカレイン」とあるが、アレキサンドロフスキの名は勿論見えよう筈がない。然るに松浦竹四郎著『北蝦夷餘誌』（萬延元年・一八六〇年出版）に左の記事がある。

「……別ても此近年滿江（黒龍江）の川筋に俄羅斯と滿州の合戦有ニカライスカといへるところに俄羅斯人等馬頭をひらき其邊りを蠶食せん勢有に依て滿州地に土匪の起ること止む間無故彼地え交易に行ざる故煙草はいふもさなり針等にも甚不自由致し居由なり」とある。

こんな蟲喰ひ本から、兎に角『ニカライスカ』の字を見出した瞬間だけでも、暑は忘れて了ふ。間宮林蔵口述『北蝦夷圖説』の第一巻には、下のやうな一節がある。

『拂郎擦版海上圖中サカリインと題せる島あり其島大抵カラフト島の所在に置

畫すまた其地名を書するもの大むね林蔵が圖中に載するところと合せり是に依て林蔵島より東韃に入るの間稱呼あるの處を鑿求せしに東韃夷マンゴー河の源を指してサカリインヲウラ（ヲウラは江の稱）と稱す其河源魯西亞の境界中より發し』云々

とある。同書卷之四を散讀すると、更に面白いことがある。それは或る年（乾隆十二三年頃の事）滿州のスメレンクル山韃の夷が、十人許り交易のためナヨロ（北樺太西海岸）へ來た。それをナヨロの酋長ヤエソヒラカンといふ者が殺戮して、齎し來たものを悉く奪ふたといふ老夷の話を、間宮林蔵が親しく聞き取つた筆記である。どうやらアレキサンドロフスキ邊から尼港あたりへかけての百七八十年前の光景と、その血腥い臭がするやうでもある。

その傍に『中外新聞』第二十一號慶應四年四月六日印行定價一匁といふのがある。その中に「佛蘭西在留友人書狀の寫」といふ面白い一項がある。

「博覽會も去る十月八日終に相成申候



佛蘭西帝の輕便なる事は自ら馬車の馬を使ひ諸人に交り往來致され候……且外國の氣風は唯主君を守るのみに無之國民を保護する事を專一と致し候」などあり、巴勒は馬の多き所にて騎兵の分を除いて三萬餘匹もあると驚いたり「婦人は實に美なり色飽くまで白く肌細かにて鼻高く唇薄く言葉やさしく候」などと書いてをる。

幾年経つても人間は、同じ場所で同じ様な事を仕出かしたり、同じ事を言つたりしてゐるものだと感じられる。

## 浪人氣分

昔の浪人は敵を討つか、居合抜きをやつてゐたかに定つてゐたものであるが、今日の浪人は相應に器用に飯を喰つてゐる。この時節に浪人などの必要があるものかと新しい手合が言ふかも知れぬが、その新しい人々の口癖のやうに言ふ

ことは、人間の自由といふことではないか。人類が苟も自由を欲するものである以上、何時の時代にだつた、人間に浪人氣分の宿つてゐることが當然ぢやないか。

柳田國男氏ほど、浪人振りのすつきりした人は稀である。それもその筈で、前貴族院議長などいへば、ケチな様であるが、柳田氏は田原藤太秀郷の後裔である。在官中から柳田氏ほど浪人氣分を露出してゐた人は、今の俗吏中には到底見當らなかつた。官吏が皆んな斯んな人であつたら、「官僚」などと云つて嫌はないがなと、私は幾度も思つたことがある。が、結局浪人されたことを思ふと、本來の性分に還元されたやうな氣がする。この頃の役人共は、イヤ役人に限らぬ、總ての月給取りは、チャンと行先をこしらへ上げておいて、私も浪人しましたなどと云ふ、結局官吏を止めたことを浪人と心得てをる。浪人を出したお役所としては、外務省が第一のやうであるが、倉知、小池、永瀧などいふ人々の會社と銀行入りは、餘りに何んの奇もなく、特に最後の人が、安田銀



行の保善會——善三郎氏を保護する會であらうと人は言ふが——の世話役になつたなどは、非浪人の尤なるものであらう。これ等に較べると奥田竹松氏の白木屋入りなどは、兎も角も奇抜だ。しかし奥田氏が岡山の呉服屋の息子であるといふことを聞いては、これが却つて還元されたものであるかも知れない。

外務省の若手の間には、こんな話まである。豪い連中は一度浪人させるに限る、船越男にしても貴族院に入つてからは、一廉の物議となつて、復活の芽が出たやうだと。處が逆に絢ふた繩は、何時の間にかよりが戻ると見えて、御大の内田外相などは、先年の浪人中に、丁度オイケン、ベルグソンの流行つた時であつたが、「君、哲學をやらすに政治が談せられるカイ」など云つてゐた程なのに、就任してよりの戻つたこと、御承知の通りではないか。

輪廓だけには面白味があつた故山座は、浪人になる前に酒にあてられて死んだ。恐らく浪人氣分よりも、酒仙氣分の方が旺であつたのであらう。浪人として名士であつた稻満君は、在官の人となつて頗る凡化して了つた。畑は違ふが

林田雲梯は、在官中有名であつたのに比して、浪人時代が餘りに振はなかつた。李赤傳には『李赤江湖浪人也』とあつて、浪人の本義は、官職なくして流浪する士人文人の謂であらうが、斯んな型は今の日本には全くなくなつた、恐らく支那にだつてなくなつたであらう。此點に於て私は郷土研究家として、郷土研究氣分の浮々とした柳田氏を、勿論上院の翰長よりも、亦恐らく先祖の田原藤太よりも豪いものとして尊敬し、その天分の完成を祈るものである。未だ氏が在官中の事である。美濃の長良川上流のムカフコダラ村に行つて、其村で古くから諺はれる

向ふ小だらの牛の子を見やれ、親がくろけりや子も黒い。

といふのを、其土地に種畜改良の行はれてゐることを知つてゐた柳田氏は、即吟に

向ふ小だらの牛の子見やれ、親が黒うても子は白い。

とやつた。この即吟の中には、科學的進歩も、時代精神も總て讀み込まれてゐる



るではないか。そして最も嬉しいものは、氏のこの放浪気分である。

さて浪人の倶楽部といふものが何處にもない。浪人そのものがないのに、倶楽部は不用だと言ふ人もあらうが、官吏中にも、會社員中にも、僅かではあるが大學教授の中にも、持つて生れた浪人氣分が、近頃流行の髭位残つてゐる人々がある。尤も大概の人は、口こそ自由を唱へてはをるが、頭だけを質に入れたり、精神を牢屋へ繋がれたりしてゐる人は、澤山なことである。其際に於て「同人會」といふものが——その中には柳田氏も加入されてゐる——あつて、見やうによつては、浪人談笑會の趣を備へてをることは、大正の今日珍とせずばなるまい。然るに同會の中心人物であつて、浪人と仙人を兼ねたほどの大野若三郎氏が、先月末病歿されたことは、同人會のためにも浪人氣分發達のためにも、惜しき限りである。

## 朝の街

夏の生命は朝と夕とにある。植物界では、それを朝顔と夕顔とが具象してをるが、舊來の人事から見ると、餘りに夏の夕方の風物を尊重し過ぎてをる。成程一日中の苦熱を過ごし、浴を取つた後の神身と觸目とは、全く別乾坤のやうに感ぜられはするが、草の葉にまだ露の残つてをる夏の朝には、眞に爽快な別個の趣がある。まだ電車が今ほどの發達をしてをらぬ時分の東京は、却て夏の早朝、入谷の朝顔と不忍の蓮の花が、遠い山の手邊から、朝の客を引いたものであつた。根岸邊の木槿籬の趣などは、たゞ朝のみ味ふべきであつた。今日交通機關の發達した東京の街々と、其の商舖とが、その美觀やらその繁榮やらの爲に、この特趣な夏の朝の利用方を案出せぬことを、私は殊の外遺憾に思ふものである。



ルーゲル博士といふのは奥太利のクリスチャン・ソーシャリストで、その領袖の一人であつたが、戦前の帝制時代に、維納の市長に選挙された。皇帝は初め其就任に裁可を與へられなかつたが、幾度選挙をやり直しても、その都度當選して、彼は遂に維納市長の椅子に就いたほどの人である。私は今此人が名市長として、維納で表はされた智慧と成功とを、朝の東京の街に借用して見たいと思つてゐる。朝起のルーゲル博士は朝の街の散歩家であつた處から、維納の朝の街の美觀を添へることに、殊の外意を用ひた末、アノ無格好で没趣味な電信柱に、美しい草花で飾りを施した。それは柱の中央の邊に、軍艦の檣の望樓様のものを造つて、それに美觀に富む諸種の草花蔓草の類を植附けたのである。幸に我國には朝顔といふ代表的な朝の花がある。銀座から日本橋の通一帯へかけて、兩側の電柱一つ置き位に、然るべき工夫を凝して、第一には各種の朝顔を咲かせ、それに混せて熱帯の蔓性植物、羊齒類、蘭の種類等を植ゑつけたならば、相應に特色ある街の美觀が保てると思ふ。

青物市にしても魚市にしても、夫れど朝立つことの永い習慣を有つてゐるが、これは直接市民には關係がい。私の新提案は、下町の大通りに『朝の賑ひ』を創めることである。それには銀座と日本橋の通と、及び本郷の通と——兎も角舗道を有つた是等の大通りで、夏の季間を限つて朝の六時から九時まで、『朝商ひ』の新習慣を造ることだ。多少の廉賣をやるも可からうし、例のカフェーなどは西洋風に、卓子と椅子の幾組かを一列に、舗道の柳の下や、蔓草類の美しく垂れた柱の側に持出すも可からう。そして市民に、男といはず家庭の主婦も子女も、夏の朝街へ出かける習慣をつけさせる。朝飯をどうするかと云ふ心配があるならば、赤瓢箪式の簡易食堂で、心持の好い朝食の用意をするもよくカフェーなどで新鮮な牛乳に麵麩を出しても可いではないか。つまり家庭の人々が、夏の一日の中に充すべき用向を、朝の涼しい心地好き時間の中に、街の美しさを感じながら、愉快に果すことの新習慣で、その街の商舗としては、夜の街を電燈で飾つたり、晝の暑さを扇風機で防いだりする代りに、自然の美に



朝の装ひを凝して、その美化した街に「朝の賑ひ」を呼ぶ工夫なのである。窓飾りを朝夕に取換へるなどいふことは、繁雑で出来ぬこととして、店の入口にまだ朝露を含んでをる植木の鉢を置くとか、窓飾りの一角に、涼しげな西洋草花を挿しておくとか、樂器屋の店頭からは銀鈴のやうな涼しげな調べが傳はるなどは、朝の客を呼ぶ特種の工夫ではあるまいか。私は東京の街の繁華は、銀座から日本橋へかけての大通りと、須田町角の邊と、大學前の本郷の通りが、種々の新しい試みを示すことによつて、文化的都市の進歩した繁華が、持來たされ得ることゝ信ずる。進んだ頭の商店の支配者達は店の夜の賑ひを考へると同時に、夏季に在つては朝の賑ひを招來することに、まだ十分の餘地のあること忘れてはならぬ。

## 球家文化(二)

「まりや」文化と讀む。讀んで見た處で、大概の人には何の事やら分るまい。球はグローブを意味するので、世界の知識と物品とを集めるといふ趣意から、慶應の何年かに、西洋の書籍、唐物類、西洋家具の直輸入を企てたのが、球家である。來るべき日本の新文明は西洋の文物に負はねばならぬといふのが、即ち地球を理想とした球家で、その計畫者であつて營業を開始したのが、早矢仕有的といふ人であつた。その早矢仕氏は福澤諭吉翁十哲の一人とも云ふべき人で、西洋文明輸入の熱心なる首唱者であり、又實行家であつた。

その時分——恐らく慶應の三四年位の事であつたのであらうか——の東京の書林仲間の名簿様のものを見ると、『福澤屋書店』といふのがあつて諭吉とある。西洋文明輸入論の急先鋒であつた福澤翁が、假令一年でも二年でも、書店を開業されてゐたと云ふことは、誠に面白いことで、仰山に言へば我が文化史上にも一行や二行は書くほどの値打はあらう。が、今の慶應義塾の連中の間にも、こんな事實を知つて居らるゝ人が、果して幾人あらうか。そこで福翁十哲の一



人が、西洋書籍、小間物并に家具類の直輸入業を営み始めたのに不思議はないにしても、球家の屋敷が如何にも面白く感ぜられる。その球家が明治二年頃までの中に丸屋となり、早矢仕有的翁が何時の間にか丸屋善八といふ名で、「丸善」といふことになつた次第だ。そして最初横濱に開店した丸屋が、東京にも店を開くことになつて、前記の商賣以外、銀行業までやるやうになつて、丸屋銀行といふのを開いたほどであつた。丸善創業の記で見ると、營業目の中に、「死亡請合規則」とか云つたやうなものがある。言ふまでもなく今日の生命保険の謂であつたのだ。

私は此處で少しばかり、所謂球家文化が、どれ程多く我が國の學界讀書界及び思想界に貢献し來つたか、またどんな具合に其業を進めて來たかを、四角四面に物語るほどの餘裕を持つてはをらぬが、福翁十哲の一人早矢仕翁——丸善の店で今でも單に「先生」の稱を以て通つてをるのは、今は既に故人になられたが、その創立者たる有的翁ばかりである。通常商家としてなら、「先旦那」と

いふべき處を「先生」と呼做して來た——の創業の精神が、その五十年間を通して、今日の「丸善」に、尙ほ歴々と残つてをる事實を、一二物語りたく思ふのである。そして其話は「きんさん」から始まる。

栗本癸未——と云つた處で、極く僅かな人の外に知る者はなからうが、世界的人類學者の鳥居龍藏氏が、或時他の同學に向つて『これが日本第一のビブリアオグラフィアです』と紹介したのが、我が癸未君である。丸善の店の内では、癸未さんが「きんさん」に轉訛されて、「きんさん」くゞで通つてゐる。三十餘りの番頭さんである。ナインダ番頭さんかと言ふこと勿れ。拉丁は勿論のこと、英獨佛露伊西語に亘つて、苟も書目と云ふ書目、多少とも名のある書籍、「きんさん」に於て解せざるなく、知らざるなしと言つて可いほどである。白鳥博士やモリソン文庫の石田學士などは、丸善への用向は何時も「きんさん」を名指して來る。先年の火事に可なりの部分を焼失したとは云ふものゝ、たしか今でも第十八世紀末からの、歐洲各國に亘つての書目は、丸善に備はつてゐる筈で



ある。そしてこの種の整頓は、我が「きんさん」の丹精に負ふ所が少くないと云はれる。

成金を除いた外の人々には、これ程天成のビブリオグラファーが日本に在ることを、我國文化の爲めに多とせぬ者はなからう。そしてこれ程の篤學者——若くは特學者——を全くの子飼ひから悠々と養成し上げた「丸善」に對しても少からず感謝して好からう。引合ひに出すのも如何なものであるかも知れぬが現に外國語學校教授（佛語）である瀧村氏などは、全く丸善の小僧さんから仕上げた人である。もつと驚くことは、イブセンのものを、その原本で研究してゐる、無名の番頭さんも現に「丸善」にゐる。諸威語が單に出来るだけの人さへ、我國に果して何人居るであらうか、聞きたいものである。次には私は當然「丸善のバイロン」君を紹介せねばなるまい。

## 球家文化 (三)

「丸善のバイロン」——それは誰やらが附けた名である。兎も角帝大の教授達の間には、可なり此名が通つてゐる。丸善の二階へ上つて行つて、あれこれと多少でも迷つたやうな顔をしてゐると、何處からともなく何時の間にか、幾分具合の悪いやうな足附で、ビョツクリ出て来て、あれこれと親切な斡旋をして呉れる番頭さんがある。「丸善のバイロン」とは此人の事で本名は平凡な田中次郎と云ふ番頭さんである。モ一兩三年内に、四十年勤續の表彰があるといふから見た處は若いが、我がバイロン君はもう相應な年配と見える。

「商賣は道によつて賢し」と云ふが、自得といふ力は畏ろしいものである。我がバイロン君が歐米の機械工業の書に精しい事は——大學の學者先生から言はせたら、なんだ「目錄學者に過ぎぬ」位に言ふかも知れぬが——恐らく日本に



唯の一人として、尊敬するに足るであらう。そして此人の技倆として最も驚かされることは、單に目録や案内で見ただけで、之れは良書之れは凡籍との、判然としたそして適確な鑑別を容易に着け得ることである。言ふまでもなく卅餘年來養ひ來つて、自得し得た感能によつてである。田中氏の事を一例として見ても、これ程の人を十一二の小僧さんから仕立上げた「丸善」が、直接間接我國の文化に貢献した功績の大を、何人が能く否定することが出来よう。

エンサイクロペディアの業は、古來支那と佛蘭西が、世界に冠たるものであり目録學の發達整頓は、今日に於て獨逸を第一に推すべきであらう。近世獨逸の文化が他に比して異常な發達を來したことは、同國の圖書館や大書店での、内外古今の典籍の目録及び索引が、完備の極に達してをること、大なる原因が存すると私は思ふ。今の「丸善」が日本橋通りに赤煉瓦の三階であるばかりに或部類の人々には、單に一個の本屋さんに見えるばかりであらうが、是等の人々は、せめて一度でも北京へ行つて、書林街で有名なアノ瑠璃廠の通を歩いて

見るが可い。權威ある書店と、其の特種な科目々々に精しい番頭達の、如何に一國の文運の上に、彼等の貴さが感ぜられてをるかを知ることが容易である。瑠璃廠の書林は、どれもこれも可なりの老舗で、孰れも時代々々の名流の揮毫になつた看板を擧げてをる。中にも明の儒者や名士の筆になつたものさへ尠くない。そして夫等の老舗には、それ相應な目録學者が店にゐるばかりでなく、或は古版の鑑定に、或は拓本の研究に精しい「先生」が居る。私はこれを想ふと、何時も内田魯庵先生が「丸善」に居られることの、その關係の相應はしいことを、聯想せずには居られぬ。

これに反して我が東京の書林街といつたら如何だ。先づ神田の裏表神保町を推さずばなるまいが、アノ多くの店先に、どんな程度の書が列べられてあるか稀に掘出しものが無いでもないが、大體に於て下宿屋書生の需要書に過ぎぬ。時々南明館あたりで即賣をやる古書籍展覽會へ出品する各書林などは、古書珍籍を蒐めてをらぬでもないが、それは只營業一天張りで、研究もなければ知識



も集めてゐない。單に古書の取次業者で、文化の上に貢献するといふ風な點はない。此點に於て先づ人材を養ひ且つ集めて、書籍業者として進歩的設備を整へてをる「丸善」は、瑠璃廠街頭のものに匹敵する。

「倫敦タイムズ社が賣つた數千部のブリタニカやセンチユリー大辭典はツンドク先生の客間や質屋の庫に埋れて了つた」などと、小利巧さうなとを、如何にも眞理でありさうな顔をして話す人だの、やれマルタの換算がどうの斯うのと云つて、兎角ケチを附けたがる物識り連の少くない我國では、所謂球家文化の意義と其の一國文化との關係などは、容易に理會は出來にくからう。西と北の方の何々大學とやらが、一片の新聞記事——それこそ値打なき一片の新聞寄書——に煽られて、駈抜け單獨注文をやつたら、一方では諸雜費で結局一マルタが四十錢に相當することになり、一方では二千圓ばかりの獨逸への注文品が、アノ國のゴクスタ状態で紛失したとか云ふ話ださうな。こんな算盤勘定で、書を読まうなどと思つてゐる大學連中は、五十年前ダローナ文化を理想とした有

的翁に、地下で笑はれぬ用心をするがよからう。

### 球家文化(3)

有的翁の息子さんも親父に負けぬ程の變物である。早矢仕四郎さんと云つて帝國大學に八年も在學してゐた人だ。八年とはどうしたのかと云ふと、化學研究に二年、理科に三年、工科に二年、と云ふ風にそれからそれへ轉々して最後に最も面白いことは哲學を全一年やつた。そして言ふことが面白い。哲學なんてあんな分らないものはない、あの研究者達がよくも分つたやうな顔をして、あんなものを二年も三年も續けてゐるものだ。本來が物質的の頭の持主である四郎さんは、有的翁の在世中その學生時代から、汚い八疊の間に立籠つて、理科の實驗をやるのが本業で、その暇々片手間に大學へ通ふといふ風であつた。功名富貴の念の毫末もない人で、其時分既に卒業とか學士號などといふことに



てんで無頓着であつた。その四郎さんが今、丸善でのインキの主任なのだ。特に面白いことは、世間ではどうかすると、丸善の商賣敵を中西屋のやうに極め込んでゐるものもあるが、中西屋書店の持主こそは、此の四郎さんであり、現在の支配人は、有的翁四天王の一人であつた人の子である。

一體書籍は勿論、西洋小間物類にして所謂舶來品を西洋から直輸入してゐる店が東京に何軒あらうか。唐物にしても以前野澤組が扱つてゐた頃は、實際の直輸入をやつたものであつた。名だけは爰では略すが、銀座で有名な一二の洋物店にしても、決して西洋との直取引ではなく、横濱の商館との取引に過ぎない。獨逸書の専門で有名な本郷の□□堂にしてもが成るほど同店送附けの箱は直接には來てゐるが、取引としては直輸入ではなく、神戸の洋館との間接取引であるのだ。勿論今頃東京の商店が、西洋との直取引をすると云ふ其事が、どれ程も豪い譯ではないが、球家文化の精神を遂うてをる今の「丸善」が、かなり早くから實際に直輸入をやり來つたことは、多少とも記憶に値することであ

る。その他全般に亘つて「丸善」が早くから進歩的であつたことは、初めて電話のかゝつた年に、逸早く申込んで二十八番を獲たことの一例で見ても分る。

尤も斯うは書いて來たものゝ、私は「丸善」のみが書肆として豪いと言ふのではない。東京の書林と云ふ書林を睥睨してゐるかの概ある、文求堂と其主人公のやうな豪物があることを逸するものではない。が只この頃のやうな流行を逐うての出版業者、並に夫等の賣捌店や書肆に、一種の文化的理想を有つて貰ひたいと、並に有的翁が歐洲新文明の輸入を、我文化事業に貢献する目的で創めた、私の所謂球家文化の精神に基いて、築き上げられた「丸善」そのものを多とすることゝに過ぎぬのである。寺田寅彦博士が「丸善」を記かれた、中央公論所載の隨筆は、近來にない面白い讀物であつたが、其中に唐物店の部分だけ止めれば好いといつた風な、學者の純な希望が書かれてあつたが、それは球家善八時代の西洋文物輸入の理想を、今日まで其儘に承繼し來つたもので、それが西洋小間物から、文房具類にまで及び、善八翁の嗣——ニツ三ツの學士



號位持つに値する四郎君によつて、インキが特製されるやうになつたとは、球家文化本來の精神に合適したこととして、寧ろ沿革的に洋品部の發達を是認したいものだ、私は思ふ。

物識顔をして、瑠璃廠のことを書いた後で、先輩から聽いた話によると、横濱の「ケリー・アンド・ウォルシュ」書店には、番頭さんとしては極僅な人数より外ならないがその番頭さんが、或機會から名刺の交換でもやることになつて、差出した名刺を見ると、ドクトル何某、何々大學のフェローなどと肩書のある人であるのに驚かされると。私は此意味に於て今日の丸善が、その抱負を益々大にして、所謂球家文化の建設と完成とに、力を伸ばされることを、我國文運のため切に望むものである。

## 文 求 堂 (上)

私は斯道の先輩某氏——それは私も兼々交際を願つてゐる有數な博物蒐集家——から、左のやうな有益な知識を得たことを、心から嬉しく思ひます。先づそれを爰に掲げる。

「……福澤先生が福澤屋諭吉と名乗つて、本屋の仲間入をされた事情は、維新當時先生が頻に其著書を出版される、それに其賣行がすばらしいので、従來の本屋仲間が苦情を言ひ出して、素人に無暗に出版されては我々の營業妨害である、今後は我々仲間出版を託されるか、或は本屋仲間に這入られるか、何れか其一を選ばれたいと申込んだ處、卒直な先生の事故、直に本屋仲間へ這入られたのが、明治六年出版の新刻書目便覽の卷末本問屋百四十五人の中に、福澤諭吉の名を列せられる所以である。この話は去七月に亡くなつた和書出版界の古老大島屋武田傳右衛門老人から、嘗つて聞いた話です。

又古書籍展覽會に出品する各書林は單に古書の取次業者である云々は、貴下が御馴染が薄くつて、事情に通ぜられないからでせう、廣小路の淺倉屋主人



御成道の文行堂主人などは、本に就いてはそれ／＼理解をもつて居て、其道々々の學者に古書を供給して居る「文化の上に貢献するといふ風な點は無い」と言はれるのには反對です、其他の書林にも専門々々の知識を有つて居るものは尠くない、中にも和書の古本屋は慾ばつた仙人だと高唱する徒士町の吉田屋主人を、貴下に紹介する、御通りがけに御立寄りになつて主人の氣焔を聞かれたら、早速前言は取消されるに違ひないと思ひます。八月十四日東京  
閑人

盲滅法界な私の妄斷は、前掲の御忠告によつて取消します。私としても必ずしも和書の古本屋諸君を、平日から輕蔑してをる譯では勿論ない。今からは三十年ほど昔の事になりませうが、三久、泉勳、それに今の淺倉屋の先代を加へて此三人が、古本屋として豪かつたことや、恰度獨逸あたりの書肆へ參つて、何問題を調べるのにはどんな書を見たらよからうと尋ねると、聲に應じて適當な書を教へて呉れるのと同様、死ぬ迄チョン髭を赤チャビンの後部に潜ませて

ゐた「三久」の三河屋久兵衛さんなどは、和書殊に軟文學ものに就ては當時の文人や書生達に、得難い指導を與へてゐた、など云ふ話を私は私の先輩から聽かされてゐます。三久が和書、泉勳の和泉屋勳兵衛さんが漢籍といふ譯で、肌合と云ひ識見と云ひ、書肆の主人として豪かつたと云ふことです。

洋書店の爲めに「球家文化」を書いたその對照として、私は此處で漢書林の巨頭「文求堂」について、二三の話を書いて見たいと思ふ。

北京へ毎年、それも年に一兩度必ず買出しに行く日本の書籍商としては、文求堂主人田中慶太郎氏が、唯の一人だと言つて可からう、大阪で有名な鹿田なども出かけるには出かけるが、文求堂主人の豪放な遣口には及びもない。北京で「文求堂來」となると、琉璃廠の書林は勿論のこと、名家舊家の間でも、それ／＼立派なものを賣りに出すので、文求堂の去つた後には、北京に珍籍が空いと言はれる程である。交求堂主人田中慶太郎氏は元哲學館出身で、後更に外國語學校の支那語科を出た人であるから深い漢學の素養の上に支那語が十分に



話せる。而て北京第一流の旅館に陣取つて、區々たる値段の争ひなどはせず、買ふべしと見込を着けたものは、數千金を投じて、時には萬金を投じて、頗る大膽に買ひ取ると云つた風だ。

そんなだから文求堂の書は、實の處却々廉くはない。しかし其處に主人の見識も存してゐるので、珍籍古書を購入しようと思ふほどのものが、値段などを論ずべきものではないと云ふのが、彼の主張である。どれ程威張られて見た處で、今日どんな學者でも、我國で亞細亞研究を進める上に於て、文求堂を閑却しては、全く出来ないと思つて差支あるまい。毎年發行して學者や得意先に頒ける。唐本仕立ての凝つた同店の目録は、文求堂の誇りでもあらうし、また我が讀書界の福音でもある。

## 文 求 堂 (下)

流石に支那は文字の國で、書を受することは到底日本人の企て及ぶ所ではない。今度の新内閣に司法總長となつた董康君であつたと記憶する。曾て教育總長であつた時に、病に罹つて一時全く危篤に陥つた。丁度其時であつた彼は不圖、「宋版の資治通鑑が賣物に出た」といふことを聞き得た。宋版といふからには通鑑の原版である。彼が日頃の愛書熱は、病床の體熱よりも激張して、直ぐ數千金を侍吏に持たせて遣つてそれを購入させ、命旦夕に迫つた其枕頭に、屏風代りにブラリと此の珍籍を列べた。彼の病は幸に癒えたが、董氏後に人に語つて言ふには、予の病は醫藥のために癒つたのではない、全くアノ得難い古書を枕頭へ列べ得た時の心氣の爽快さが、病魔を拂ひ得たのだと。

また斯んな話もある。先年袁世凱と喧嘩して、我國へ亡命して來た有名な羅振玉が、今に亡命して來ると報ぜられた頃、日頃から同好の知友である内藤湖南氏は、羅氏今回は亡命して我國へ來る以上、定めし困り果てゝ來るに相違ない、随つて一時の窮乏に便せねばなるまいと、その爲め諸方を奔走して一千金



を用意し得て、羅氏が渡來したら提供しよう思つてゐた。やがて亡命客として神戸へ上陸した羅氏は、埠頭に出迎へた内藤氏を見て、「老兄時に近頃何にか珍籍でも手に入れられたかな」といふのが、その最初の挨拶であつた。多少は窮状でも漏されるであらうと豫期してゐた内藤氏は、上陸最初のこの挨拶に遭つて、金の事など言ひ出す處ではなかつたと云ふ。董氏の事と云ひ羅氏の事と云ひ、眞に得難い文人の美談である。自分が死に瀕しながら古書のために千金を擲つ人が、日本人の中に一人でもあらうか。「古書を列べて見て欣んでゐるなら骨董に等しい」など云ふものがあれば、其人は「文化」といふものが何んな處から生れるものであるかを知らぬ人であらう。

文求堂主人田中氏の話も面白い。「支那の大臣などは、平生出會つての話は、大概文藝美術の話に限つてをる。それ故北京へ駐劄する各國の使臣共は、支那へ赴任すると、支那の美術を愛好したり文學を研究したりする。ラインシュ然り、クルペンスキ一然りであつた。それだのに獨り日本の外交官ばかりは、二

言目には「利権」の二字を持出すばかりとあつては、日常の交際に於て既に仲間外れにされてゐる譯で、斯んな風では日支親善も、口先きばかりに了るも當然ではないか」と。豈獨り支那に於てのみではなからう、歐米の何の國でも、文學藝術を談ずることの出来ぬ外交官は、自然と其國の社交界から、又外交團から仲間外れにされる外交官ではなからうか。

それにしても年々北京へ出かけて、千金を惜まずに古書を漁つて來る文求堂があつてこそ、我國でも相應に、亞細亞研究上貴重な文書が、夫れ々所藏されてゐる。今帝大の史料にある、古代の日支通商に關する繪卷物やら、大倉集古館にある康熙帝南清巡幸の繪卷物などは、孰れも文求堂主人の手で携へ歸られたものである。だか先年此の主人が黃庭堅の書を手に入れて、日本へ持歸つたことがある。何分稀代の珍品であるといふので、凝り性の主人はそれを何版かで立派に複製して、知人同好に頒つた。さて其の眞物の肉筆を、愈々賣り出した處が、誰もとう／＼買手がなかつた末、不圖これを聞き込んだのが、臺灣



の林家の息子で、當時早稻田あたりの下宿にゐた青年であつたが、直ぐ話をきめて一萬何千圓かで買取つたさうだ。「金持の息子の道樂サ」と單に評し去るのと勿れ、金持であらうとなからうと、日本の青年には、とても斯んな方面への斯んな氣概は、持合せがない。

文求堂主人田中慶太郎氏は、故品川彌次郎子在世中、相當に永く品川邸に客として居たことがある。それは維新當時、まだ文求堂が京都に大きな店を構へてゐる時分のこと、品川さんも未だ松下村塾の愛弟子として、松陰の香の失せぬ時分であつた。不圖した縁から文求堂の奥座敷に客となつてゐたことがある。慶太郎氏が風格氣品に於て、何處となく故品川子に似たやうな處のあるのは、明治の前後に、お互に其家に客となつてゐた縁にでも因るのであらう。主人には怒られるか或は笑はれるかも知らぬが、終に臨んで内々で一つの御願ひがある。それは廉い書にも良い書はあらうから、大物の片手間に、廉いものを扱つて頂きたいといふ私の小さい希望です。

## 天才到處

千住で有名な鰻問屋の舊家から、今は故人になつた京大教授の文學博士内田銀藏氏が出たことは、當時多少とも世の語り草となつた。しかしそれは知識を知識階級の私有財産のやうに考へ來つた爲めの驚きであつた。尤も舊幕時代でも文學美術だけは士族の階級以外に多少ともその世界を擴めてゐたには相違ないが、それは極めて寥々たるものであつた。流石に此點に於て、維新後五十年を経た今日では、文學美術は勿論のこと、如何なる特種の知識も、全く一般のものであることを、事實に於て證明し得るに至つた。

「花月」の若主人が洋畫家の平岡權八郎氏であり、上野の「揚出し」から洋畫家の小糸源太郎氏が出たとは、餘りに世間に知れ過ぎてゐるが、「天金」の息子さん——池田大伍氏が逍遙門下の奇才で、大伍氏が脚本以外に、新古書の所藏



の多きを以て有名であることは、「天金」を知らぬ者のない東京人の中にも、知らぬ者は少くはあるまい。深川八幡前の名代の蒲焼屋宮川の主人公宮川曼魚氏が、軟文の大家として隠れもないことは、大伍氏と併せ稱するに足るであらう。

近來餘り名を聞かないが、小説家の山岸荷葉氏は、今でこそ其店は無いが、幕府時代日本橋通りで「ギヤマン所」として有名であつた加賀屋の家の直系の人である。ギヤマン所とは舶來上等のビードロ細工店で、加賀屋は大傳馬町の蘭物店中島屋と相對して、東都唯一の商家であつた。たゞ東京では、同じ商家の中でも知識階級に最も接近する書林の家から、これと名の聞えた文人の輩出してをらぬことは、何んとなく物足らぬ氣がする。其點になると、京都で佛書をして聞えた舊い書林の小川柳枝軒から、兄息子に文人として小川煙村氏、弟に畫家として小川千麿氏を出して居ることは、大に珍とせねばならぬ。

人材の輩出が断じて家柄や血統などに因らぬことは、幾らでも實例を引いて證明が出来る。「白樺」に屬する理想的畫家の岸田劉生氏が、有名なる奇才岸田

吟香翁の令息であることを想ふと、知識や思想なども、何等か血統にでもよるかの念も起るが、同じく尊敬すべき洋畫家木村莊八氏は、牛肉店「いろは」の門の人であると言はれる。更に最近老坪内の愛婿を以て評判の高い、法學士にして劇通の飯塚友一郎氏の如きは、牛込横寺町の一膳飯屋の息子さんではないか。私は是等の點からしても、逍遙先生が學問や藝術の天才を、單に知識階級の間にもみ求められぬことの達見に、敬服措かざるものである。

京都の呉服業者の店の子から、知名の畫家を出したことは、實際驚かれるほどである。先づ二科會の新人としての安井曾太郎氏は京都の呉服屋の息子であり、同じ梅原龍三郎氏も同様である。淺井門下で關西美術院の經營者である澤部清五郎氏は、京都の油屋であり、黒田重太郎氏は上方特有の名稱で呼ばれる悉皆屋さんの出である。日本畫から言つても、平井樸僊氏は京都の下駄の鼻緒屋であり、西山翠璋氏は袋物仕立屋の息子と云ふことである。大阪でも兩三年前亡くなつた俳人水落露石氏が、小間物問屋の主人であつたやうに、多少は未



だ此種の人に乏しくあるまい。美術院新人の足立源一郎氏は、現に心齋橋の或る商家の出である。

若し此種の調査を、官吏や軍人に及ぼしたら、可なりに面白く且つ有益な事實を發見するであらうが、知識階級を特種階級のやうに思ひ込んでゐる習慣の前には平民の間から輩出した學者の實例を、出来るだけ多く知りたいたいものである。全く世界的學者として尊敬すべき人類學者の鳥居龍藏氏は、徳島での大きな宿屋の息子さんであり、アノ道樂學問のために、その古い大きい宿屋さへ潰したと云ふに至つては、記憶に値する話ではないか。野田大塊翁がどうかすると、「他は種々な事を言ふが、乃公は豆腐屋ぢやなかばい」などゝ否定をするのは、馬鹿らしい否定である。

## 東西文化

ビードロとギヤマンと、どつちの名が先に用ゐられたらう、などゝ云ふことは、一寸考へると愚にもつかぬことのやうであるが、東西文化の接觸の道筋を研究する上からは、相當な問題とも見られ得る。前回「ギヤマン所」の事に言及したが、通稱和蘭屋と云つた大傳馬町三丁目の中島屋の店と、ギヤマン店の加賀屋とは、蘭人通航以後に於ける江戸唯一の舶來品屋であつた。西洋書籍や漢籍古書の輸入が、我國の文化を扶けることに至大な貢獻であつたとすれば慶長の末年頃乃至それより餘り年處を經ぬ早き時代に、西洋貨物の輸入を専業とした商賣も、亦どれ程我國の爲に開國的文化を促進させたかも知れない。現に歴史的記録によつて見ても、文化年間には既に長崎と江戸とで、ガラスの製造業が立派に行はれてゐる。其後嘉永頃になつて鹿兒島や福岡で、硝子製造業が發達し、明治九年に工部省が、斯業の模範工場を品川に設けたなども、淵源はと云へば加賀屋と中島屋であらう。

シーボルトが長崎へ來たのは、文政六年即ち一八二三年であるが、此の先生



に灸點と鍼術とを教へたものがあつたと云ふに至つては、教へた者も、教を忠實に受取つた者も、兩方とも豪い。現にそれよりも前に、灸點用の艾が、日本から和蘭に渡つてゐたといふことなどは、愈々面白いではないか。松平石見守の一行であつたか、誰れであつたか、兎も角幕末の洋行使節の一行中の何某が、和蘭へ到着した時分、或る日の事不圖灸が點ゑたくなつた。生憎荷物の中の艾は水に濡れて役に立たぬので困つてゐると、艾なら此土地に日本物を賣つてますといふことで、早速買ひに遣つて見ると、立派に商標まで附いてゐた伊吹艾であつたと云ふことである。是等は幕末時代の頃に、ビードロ製の簪などが、一時婦人の髪に挿されたり、酒鍾や酒盃や酒盃臺までも、所謂ギヤマン製の品が、江戸で賣られてあつたことと共に、東西兩洋貿易史上重要な事實でもあり、西洋文化の接觸上見逸すべからざる史實である。例の勤王家の表彰のあるやうな機會には、是等の文化關係の商家の追賞も、大に必要なことではあるまいか。

尋常一様な意味での歴史家は澤山あるが、斯んな風な東西文化接觸史とでも云ふ方面の研究者は、一體誰れであらうか。第一に先づ指を屈せられる人は、京大教授の新村出氏であらうが、其次に誰れだらうと云ふと、モ一一寸考へ出すのが困難である。それならば忠實な研究者が無いかと云へば、決してさうでない。先年越前福井邊の舊家の佛壇から出たといふ、所謂吉利支丹版の稀觀書を手に入れられた我國有數の蒐集家林若吉氏の如きは斯種の東西文化史料の熱心な研究者である。氏の現に所藏にかゝる『こんてむつすむん地』一六一〇年(慶長十五年)の日本版などいふものは、獨り我國での珍籍であるばかりでなく、文字通りの天下一品の書である。この書の事に就ては、新村教授が大正七年の夏「藝文」誌上で書かれてゐるから、爰に重ねて言ふ必要もないが、林氏が同時に手に入れられた吉利支丹關係の、文書やら附屬品なども、至重な品々である。其中の一品である聖母の像などは、西洋繪畫史の研究上からも得難き資料の一であらう。特に其中の一品である一年中の基督禮拜日の覽帳(厚い雁



皮紙の素人綴の帳面) などから考へて、これ程の日取の精密な必要からして考へると、當時の信者仲間の間では、恐らく太陽暦が行はれてゐたであらうと云ふ、林氏の推論の加きは、確かに學者の深入りした研究の欲しい處である。終りに例の芥川龍之介氏の『れけんた・おれあ』が一時人騒がせをやつたことは、其後神経の落着いてからの研究として、若し芥川氏が今一層精しかつたなら、『れせんた・あうれや』と讀ませべきであつたなど云はれたが、今となつて考へて見れば、東西通交史研究上の挿話的美談として、寧ろ後々へ語り傳へられ得る事柄であらう。

### 特殊雑誌

「ほととぎす」が初めて刊行された時分自介には、俳句雑誌さへ特殊研究の雑誌と見なされるほどであつた。然るに出版界の傾向は、兎も角も急速度の繁榮状態

を呈して、雑誌と名のつく定期刊行物の数だけは、他の文明國に決して負けぬ盛況である。盛況であるだけそれだけ、雑誌といふ雑誌はその性質が頗る凡化して、特殊研究の雑誌は、近來甚だ稀になつた。

斯かる際に、納豆研究の専門雑誌『納豆』といふ定期刊行誌のあることは、正に雑誌界の珍であらう。札幌で刊行される雑誌で、納豆容器改良會といふ想像もつかぬ程、妙な會の發行である。納豆容器の改良といふことは、薬を用ひずに、他の衛生的容器並に納豆菌の純粹培養を使用して、納豆を製造することの謂であるからには、正さに「納豆改造」の叫びで、珍誌『納豆』は當然その宣傳機關だと見られる。其中に納豆の歴史が出てゐるのを見ると、支那で所謂「鼓」が即ち納豆のことで、淡鼓、鹽鼓、鼓汁などの稱がある處から見ると、納豆汁が東海道は鞠子の宿の名物に始まつたかに考へてゐるは、大きな間違ひで支那からの渡來であると思える。神田の「中華第一樓」で出す「豆鼓」は濱名納豆に比して色が黒く、鹹らいといふことであるが、前漢の「食貨志」にさへ早



く其名の出てをる鼓即ち支那納豆が、大正の今日神田で喰べられるなどは、時代の糸を引くと、猶ほ納豆の糸を引くが如しとでも言はうか。納豆に関する狂詩を一つ書き抜いておく

玉鼓一佳物 調和五味加 風流花月伴 宜酒又宜茶

此他多少とも珍しい雑誌もある。鶉の流行つた時に「鶉」などいふ特殊雑誌も刊行されたが、流行が己むと同時に廢刊になつたらしい。現に大阪から「將棋」といふのが刊行されてゐるのも、特殊雑誌の一であらう。「犬の雑誌」といふのが、モ一三四年も續刊されてゐるのは、背景に銃獵といふ高等遊戯の存してをるためであらうが、愛犬傾向を擴めるために、犬の世界を人間の世間に近づける爲に、喜ばしい事である。更に驚くべく號數を重ねてをるものとしては、「尺八界」といふ雑誌で、既に第十卷第百號を算へてをる。其最近のものなどは、思ひがけもないドクトル加藤時次郎氏などが、元祿あたりから文化文政へかけての所謂「旦那藝」なるものが、日本音曲界への至大な貢獻を、眞面目顔

に説いてゐるなど、愈々珍である。

北海道刊行の「納豆」に對比すべきものは、長崎で發刊されてゐる「土の鈴」であらう。大體に於て郷土藝術の研究雑誌で、主として我國古來の玩具中、各地に擴がつてをる「土鈴」を中心としての、特別研究雑誌である。土鈴は第一雅趣に富み、第二自然の美音を發することゝ於て、愛すべきものであるが、これが世間から兎角に忘れられんとするために發刊されたのが、此の雑誌である。此頃の雑誌界が兎角に流行題目を逐ひ、且つ大冊で嚇かす傾向の、益々競争的になり行く一方にこんな我不關焉流の趣味に富んで特色のある研究雑誌の刊行されあることは、大に吾黨の氣を強うする所である。「大阪の鈴屋」と呼ばれて同好仲間て有名である柳政一氏などの、専門的研究も載つてをり、玩具畫集で著名な川崎巨泉畫伯の畫及び文などもある。

最後に五指中に算入すべきものとしては「從吾所好社」刊行の「奇書珍籍」であらう。私の手許には今偶々其第二號があるが、同號は「潮來號」とでも言



ふべきものであらうか。各方面からの潮來研究で、全號を蔵ふてをる。詩佛や  
 鵬齋の潮來竹枝は、比較的知れてゐるにしても、「潮來圖誌」なる珍本が、かの  
 「揚州畫舫錄」に據つた處があるなどは、流石に名所記編纂者としての苦心を見  
 るべきであらう。今記念のために「潮來絶句」の一二對譯を抄録する。

ぬしのかへりをかしかから見ればふねに帆かけてかけもなし

郎歸一片舟 妾送大江頭 懸帆暫不住 只見水空流

わしによう似たあの杜鵑啼いてあかしてゐるわいな

天邊視蜀鳥 正是與妾齊 哀音人不識 日夜吐血啼

## 愛書癖

書籍談を今一度書いて見たく思ふが、それに先つて千束里人と匿名された、  
 篤志家からの有益な投書を左に掲げる。

「……東京にても藏書家愛書家が随分ありました、中にも大野酒竹氏が、齋藤雀  
 志の俳書類を手に入れし時は、死地に入りし先生の肺病も嬉しさの餘り、一度  
 は全快して赤飯を配りました。島田蕃根翁は常に言ひました、本屋と車屋に借  
 金がなくなつたら、最早死ぬんだと。松平頼平子は本屋の市のあつた翌日には、  
 未だ汽車のない時分、田端の村から早朝一番で、都下の書林を軒別に見に歩か  
 れた。長谷川泰先生が死後、馬力に藏書が三臺あつたに拘らず、存生中は残ら  
 ず讀んで、佛書でも唐本でも落丁があれば、矢立を持つて何處の本屋へでも寫  
 しに出かけて補はれた。」

「黒川博士や井上頼園博士、小杉楳村、小中村清短、横山由清、鈴木眞年の諸  
 先生は貧生の頃より萬難を排して、いづれも四庫に充る藏書家と成られました。  
 現今でも松井簡治、狩野亨吉、白井光太郎の諸博士、林若吉氏、千葉鑛藏氏、  
 加賀幸三郎氏、安田善之助氏は個人として驚くべき藏書です。近來久原や岩崎  
 の富豪が文庫を設け金力を振つて買ひ集めた書が、官立の圖書館にも優るほど



であることは、外國に對して日本の誇りです。其外三河の西尾に岩瀬彌助と申す人が、數年來出京の度びに自身買集めました珍本奇籍乃至自筆本には得難きものが多く、私立文庫が立派に公開されてをります。木村正辭博士や野村素介男の藏書が、岩崎家や久原家へ買取られました外に、稲田政吉氏の藏書も兩家へ行きました。稲田政吉といふ人は、元が本屋で、後に衆議院議員になりましたが、月島に隠れてゐた爲めに世間から忘れられた人ですが、宋元板や五山板、古寫本、法帖などを澤山所藏されてゐました。……我國でも愛書家が昔から随分多くありまして、文行堂竹清兩氏合著の藏書印譜を見ると分ります。これは集古會の藏板です。』

そして千束里人と無名氏とから同時に、故内田銀藏博士の生家に關する訂正として、『……博士の生家の屋號を「耐興」と申すことから、雀燒きを聯想させたのでせうが、千住で「松の鰻」といふ大きな鰻問屋です』云々とありました。これで聯想することは、岩崎家の愛書癖です。モリソン文庫が如何に大仕掛

けに、且つ鄭重に保管されてあるかは、世間の想像以上だか、久彌さんと圖書館長格の桐島像一さんの、愛書家であることは驚くばかりである。桐島といふ人は、地所の心配ばかりしてゐる人かと思ふが、書の顔を見た時だけは、確かに別人だといふことである。宋板を二百種類も集め得た文庫（これも岩崎文庫の一）などは勿論金の力にもよるが、愛書癖がなければ到底實現の出来る筈がない。

それについても想ひ出されることは、人格の兩面である。田中光顯伯は婦人關係の方面では、箸にも棒にもかゝらぬ人のやうに言はれるが青山居士として古書漢籍に對する時には、全で別人となつて了ふ。その消息については、早大圖書館の市島謙吉氏がよく熟知されてゐる。現に早大圖書館の最大の誇り——これには帝大圖書館でも何處でも垂涎の有様であるが——である宋板の玉篇（私寡聞であるだけに多少間違つてゐるかも知れぬが）が、早大圖書館の所藏となつたことに就ては、青山居士に關する美談がある。初め此の天下の珍本を手



に入れた田中伯は、之を立派に複製して知友の間に配つた。多少時経てから市島氏は使ひに手紙を持たせて、其複製の本を一部早大図書館へ寄贈方を伯の許へ申込むと、やがて戻つて来た使ひは、大きな風呂敷を背負つて歸つて来た。添へてある手紙を見ると、市島氏は驚いた。複製本は總て友人の間に配つて一都も残本がない、折角の貴意に背くも不本意ゆゑ、原本を揃へて寄贈するといふのであつた。この天下の珍籍が一萬圓したか數萬圓したか、それは別としてその授受の具合に、所謂「古人の心」が見出されて、嬉しい話ではないか。早大図書館から慶大図書館を聯想すると、其處にも、一面では剛復惡辣の政治家のやうに誦はれた星亨氏の、他の立派な一面を遺憾なく窺はせる「星文庫」が永久に同図書館の一室を成してをることは、何人も深く考へさせられる、人を論ずるには、その人格の両面を精知したいものである。

### 中齋小記

レーニンの事を考へると、何時も妙に大鹽平八郎のことが聯想される。レーニンがマルクス學者として、當代第一流中の一人であるやうに、大鹽中齋は我國に於ける陽明學者の代表者である。國內でのレーニンの聲望が、果して如何なる程度であるか不明であるが、大鹽亂の兵燹にかゝつて家を失つた町人中にも、尙ほ「大鹽様」の尊稱を用ゐたものが多かつたと云ふ。本邦在留の露人間では、レーニンを無道の逆賊のやうに言ふが、春日潜庵は大鹽を稱して「勤王の魁」といひ、伴信友は彼を「狂儒」と呼んだ。レーニンが愈々革命の舞臺に立つたのは、彼の四十八歳の冬であつたが、中齋の起つたのは四十五歳である。後に心友の第一人者であつた頼山陽が、初めて洗心洞を訪問した際に、中齋の賦した詩の中に「非上高樓撞巨鐘、桑榆日暮猶昏夢」といふ一句があるが、革



命の初年露都へ還り来たレーニンの志は、此の一句に盡きて居はしまいか。彼は現にクレムリンの高樓に上つて、巨鐘を撞いてをるではないか。

が、青筋を立てゝの議論は、夏の隨筆には禁物である。たゞ此處では中齋の交友中の二人であつた頼山陽と篠崎小竹とに關した、私の平生からの疑問を一つ二つ書きつけて、世に問ひたく思ふと同時に、幾分現代の我が學者連の上にも、反省の料ともならうかと思ふ程度に止めておく。

中齋と山陽との交際は、誰も知つてをる如く、山陽の母氏梅枝女史が、最初山陽に紹介したに始まる。梅枝女史が初めて大阪の小竹の宅で中齋に會つた時に、女史は初対面の大鹽の人格に全く惚れて了つた。それで息子の山陽に、大鹽を推稱して措かなかつた。勿論山陽と中齋とは齡は十三違ひ、山陽は年齢の上でこそ長者であるが交友の狀は全く同等であつた。ただ後世の吾々から見ると、精悍奇傑の中齋が、才氣と學識とを生命とした山陽と、どうして信じ合つたかと疑はしくなる。唯一つ此間の消息が肯かれるのは、山陽が大鹽の不在中

に洗心洞へ上り込んで諸書を散見して後の感慨を綴つた詩の中に「巧勞拙逸不足異、但恐器折傷利器」といふ句がある。即ち中齋が巧にして勞するは可けれど、餘り鋭敏に事務を處し過度に聰明を勞すと、人に忌まれて利器を傷つくる恐れがあると云ふ意であらう。言はゞ山陽は、河豚は喰ひたし命は惜しゝの我國今日のマルクス學者のやうなものではなかつたらうか。良知説に徹底してゐた中齋としては、こんな點では左ほどに多く山陽に推服してゐなかつたであらう。好都合に山陽は、天保三年五十三で、中齋に先だつ五年にして病歿してをるが、若しもう數年生延びて、天保八年の大鹽亂に出合つたならば、中齋は事を山陽に謀つたであらうか。山陽は其際如何に身を處したであらうか。歴史家の議論が何時も穿鑿にのみ流れて、斯んな點に觸れぬ事を、私は常に遺憾に思ふ。

篠崎小竹の方は、生憎と生殘つた。亂後此の學者が「咬菜秘記」の著者坂本鉉之助に語つた處によると「中齋の學問筋は、己が心より思ひ付くことを皆良



知より出づると思ひ、次第に驕慢に傾いたのは、丁度某富商が茶道に耽り、段々高價な茶器を求め、名物の茶碗一個を抱いて、終に其家を滅したやうなものだ」と云ふのであつた。辯と文とに巧い今日我國の學者中には、小竹の茶器説を他日に學ばんとするもの、否今日現に學んでをる者も少くないやうであるが人情に今昔なしとも言ふべきであらうか。但し小竹は當時「儒中の鴻池」と言はれた程の代物である。今日「博士中の三井」の尊稱は抑も誰れに奉るべきであらうか。

浮 沈

「人間の一生は、それ自身が一つの大博奕だ」こんなことを言つて、以前書店仲間の飯を喰つたことのある私の舊友は、或る書店の主人の、生活の今昔について、私に物語つた。

神保町の三省堂の筋向ふに、十二間間口の開進堂といふ書店があつた。今から二十五六年はども前であらうか、沼津から出て來たもので、加藤鎮吉といふ名だけなら海軍大臣にでもなれさうな男であつた。彼は實に神保町の書肆村の開拓者で、十二間間口の大店を構へるやうになつた時分は、書肆村の覇權は彼の手に握られてあつた。三省堂の主人も、同じ沼津出身で、これは牛込邊に下駄の齒入をしてをつたさうだが、同郷出身と親戚關係とから、開進堂の軒下へ席を敷いて古本の夜店を出すやうになつた。當時數學物理学の出版屋としての開進堂の威勢は、隆々として神保町の書坊を壓した。

開進堂主人が四邊近所での評判は、單に商賣繁昌の所以ばかりではなかつた。彼の妻女は神田中での評判の美人で、その妹も亦美人の評判が高かつた。一方下駄の齒入から露店の古本屋になつた人も、其後段々仕出して、何間間口かの小さな店を愈々三省堂として神保町に出すやうになつた。しかし最初に神田乃武男の英和辭書の出版を試みた時などは、洵に以て悲惨なものであつたが、其



後大に仕出して、開進堂の向ふを張るやうになつた。

一方開進堂の細君と妹とは、依然として美しかつた。處で主人の加藤氏が投機心に富んでゐた處から、主人も兩親も一家を擧げて、相場をやるやうになつて、開進堂の店は番頭任せの有様であつた。何時の間にか不運の神様が臺所の天窓からでも覗き込んでゐたものと見えて、或日の事その美人の細君が美人の妹をつれて、家出をしてつた。多少とも傾きかけんとしてゐた開進堂は、暫かな間に斃れた。たゞ家出の美婦は、間もなく陸軍大佐の許へ嫁り、妹は其後、これも亦今現に海軍大佐某の妻となつて、青山邊にゐる。

神田男の辭書から打あてた方の書店は、女房が賢妻にして豪ものであつた。年と共にいよ／＼ノシて、東京で屈指の大書店となつたが、日本で空前の大辭典を刊行し出したのが原で、悲境に陥つたのは眞に同情に値する。同時に龜井忠一君の名は百科大辭典と共に永劫に消滅するものでない、其の國家的功績に對しては何んとか表彰の途もありさうなものだ。下駄の齒入れから身を起して、

アレ丈け我が學界に貢献した龜井君は確かに立志傳中の人である。

話はこれ丈である。こんな事は固より一例に過ぎぬ。商賈の浮沈は、まだまだ激しいものが幾らでもあらう。單り商賈ばかりではない、所謂知識階級連の浮沈も、猶ほ陰晴の如きものがある。英文學者で埋れかゝつてゐた淺野愚虛がこの頃妙な邊で復活したに就て聯想される人々としては、漢文學と文章とを以て、一時天下に鳴つた中西牛郎君は、今どうなつたであらうか。我國で考古學の先驅者で、人類學者としても一權威であつた鈴木券太郎君の現状は、餘りに不振に過ぎるではないか。哲學館開業當時、最初の女權擴張論者で、そのクセ妾を圍ひ、お抱へ車で風を切つた辰己小二郎君は、淺草の區長を失敗つて以後如何の消息であらうか。こんな風に算へて來ると、死んだかとまでに忘れ果てられた以前全盛の人は、決して尠くならう。

一人々々の此やうな浮沈は、固より賢愚に因るのでもなければ、また運不運によるのでもない。蓋し他に大きな原因が存するのであらう。照降りのない社



會に出喰はしたものである。

## 十一階 下(上)

断つておくが、私は極端な私娼論者である。言換へれば絶對な公娼全廢論者である。何であつたか或る古い書の中に、支那にては「脂粉錢」の制がある、蓋し教坊税であるが、我國にはまさか斯んな税制はない、と云ふ意味の記事があつたのを記憶してゐるが、税を取り立てるばかりでなく、國家が賣姪を公認するなど云ふことは、何んとしても道理に合はぬことである。私娼には此點の不合理はなし、議論はぬきにして記事に移らう。

安永九年版の或る草子に「今岡場所の多きことさつま芋のふえたる如く」云々とある。僅か一語であるが、如何にも面白い。岡場所とは言ふまでもなく私娼窟のことで、つまり岡目八目の岡と同意義で、官許の本場所以外の遊女場所

の謂である。そこで此の本の出來た安永九年は、薩摩芋の宣傳者青木昆陽が死んでから十一年目で、甘藷が全國へ擴まりつゝある頃であるから薩摩芋の殖えたる如くとやつたもので、それに一方では、正徳享保年間に至つて、幕府の威令を以てして、吉原以外の江戸各所の私娼窟を一掃全滅せしめたにも拘らず、安永の今日では薩摩薯の殖え行くほど、それ程岡場所が繁榮し行くといつて、幕府の制令も、この必要機關の自然の發達を、如何ともすることの出來ぬ狀を嘲つたものである。物の殖えることの形容とさへ言へば「雨後の筍」一天張りで通す、今日の記者先生に較べると、僅の一句が如何にも生動してゐる。

徳川幕府の制令が、岡場所に利目がなかつたやうに、大正政府の警視廳の御威光も、私娼窟には兎角に徹底せぬ憾みがある。久松町警察を眼の前に控へての濱町こそは、未だ回復の状態までには至らぬ模様であるが、所謂十二階下の其當時の寂れ方と、復舊せる現在の盛況との間に、果して何年何月何日の時間を隔てをれりや、と問ひたくなる。しかもこれは、警視廳や岡總監の威光如何



などの問題ではない。例の水野越前守などは、天保年中に二三度までも躍起となつて布令を出してをる。「陰賣女」の文字が、公文に用ひられたのは、大方此時の布令が最初のものであらう。流石は水野越前守だけに、禁止後の賣女共の渡世方にまで言及して、『商賣替致し正路に渡世可致候』と云ひながら、直ぐその後、「吉原の人別に加はり奉公住替は差支なし」云々とある。吉原だけを正路正業と見做して怪しまなかつた矛盾は、笑ふべきであるが、公娼主義の今日の當局者にも、どうやら此の程度の矛盾はあるやうである。處で天保後から御維新へかけて、私娼は益々發達して、折角越中守の當事も、正に向ふから外れた状況である。

公娼私娼には、明娼暗娼の稱もあるやうであるが、私は寧ろこれを官娼民娼と呼びたい。官娼が官の保護下に僅かに存続して行き得るに反し、民娼は社會民間の需要に應じて發達する。その點に於てこの兩者の實狀は、昔も今も決して變りはない。この道の記録である嬉遊笑覽、江戸土産、諸覽大鑑、吉原讚

嘲記、客者評判記などの、断片的記事さへもが、往々にして夫れを證據立てゝをる。日本全國中に公許の遊女町が、江戸の吉原、京の島原を始め廿五箇所であつた時に、江戸中での岡場所は、深川、本所はじめ山の手の各處を合せて、これ亦廿五箇所を算へ得たことは、公娼が人爲的であるに反し、私娼が自然的であつて、しかも民娼の實を具へてをるものであることを、事實上に證明し得たものではなからうか。

アノ豊亭芥子——神田の芥子粉商人で、博覽強記の風俗學者として著書の頗る多い芥子の著『岡場所考』に倣つて、大正の『新岡場所考』を作るほどの餘裕は、私にはないが、所謂「十二階下」を例證にとつて、私の「私娼説」を徹底させて見たく思ふ。



明治二十三年の一月から十一日までかゝつて、辰野工學博士が、建築學上の最新學説を應用し、其時分では可なり的大金であつた金四萬圓を費つて、建て上げたものが、淺草の十二階である。所謂十二階下——その四圍の卅年間の變化發達は、到底同年から開かれた日比谷の議會の、其の變化や發達の比較ではない。その發達と繁榮とは、西久保警視總監の鐵槌の跡も、ホンの蚊のくつた痕ほどで、今復た最初に倍するほどの繁榮を極めてをる。面白いことには文化文政頃の、江戸市中の所謂岡場所の所在地と、大正今日の第三流藝者屋街並に私娼窟の所在地と、甚だよく似通つてゐること、昔の岡場所で今日同様な區劃の全くないのは、麻布市兵衛町、四谷鮫ヶ橋、三田の三角位なものであらう。白山や道玄坂——これ等は實際に於て私娼窟として算ふことに何の差支もあるまい——などに至つては、江戸二十五箇所の岡場所以外で、江戸市民の到底想像し得なかつた場所であらう。

然らば性質の變化は如何であるか、言ひ換れば、岡場所時代の私娼と今日の私娼と、更に遊蕩兒（古めかしい斯んな稱呼は、私としては用ひたくないが）の私娼に對する心理とに、變化がないかと云へば、それは大にある。この證明には、鋭敏なる時代觀察者としての、川柳子の觀察を借りて來るより外はあるまい。

「岡場所で禿といへば逃げて行き」私娼窟なる岡場所には「こぢよく」と稱へる小婦がゐる。お客がツイ吉原などの習慣を出して、「禿」と呼びかけたので、本來劣等で低級である岡場所の「こぢよく」は、弄られたやうに逃げて行つたと云ふのである。「下女でなし禿でもなしこぢよくなり」といふ川柳まである處から見ても、岡場所ものゝ可なり劣等であつたことは想像される。處が今日東京の私娼窟の現状は、漸次その發達につれて、官許の公娼廓よりも、又紳士閥を背景とする藝者街よりも、時代の理會に於て、優に新らし味と、高尚味と知識傾向とを具へ來る實狀である。これは江戸時代と吾々の時代との私娼の上に、見逸すべからざる著しい、且つ肝要な相違點であると思ふ。



「岡場所はくらはせるのがいとま乞」といふ古川柳もある。きぬぎぬの風情などいふ上品なことは、到底岡場所では望めない。客を送り出すかと思ふと、また來なヨ位で、客の脊中をボンと一つくらはせると云つた風な低級な光景を描寫したものである。新たに復興した十二階下の實際から云つても、今日の私娼窟は決して斯んな低級なものばかりではない。一步其家から出さへすれば、素人と見え處女と見え、更らに令嬢と見える女が、決して尠くない。尤も五渡亭國貞が江戸各處の岡場所風俗を描寫して、三枚續きの錦繪が賣出された時分に於て、既に動ともすると藝者街を壓倒するほどの、素質を備へかけてゐたのであらう。それにも拘はらず歴代の偽政者は、公娼官許主義を支持して來た。現に幕府時代の時々私娼禁令の、眞の一次的効果に過ぎなかつたのにも鑑みず、維新後には改定律令中へ「私娼街賣條例」と稱するものを規定し、それを明治九年と十九年との兩度に「密賣淫罰則」と改定して、依然たる私娼撲滅方針を續けて來た。

私娼が一方で益々時代精神を迎合して、且つ自由な、知識的な傾向が著しくなつて來ると同時に、他方では公娼の墮落、低級、無識、地方的傾向が、一日と著明になつて來た。現に舊幕時代の社交的機關であつた吉原と、その太夫連の、今日の墮落サ加減を見よ。この明白な事實が、公娼の衰退と私娼の繁殖とを來す、自然の趨勢ではなからうか。過去二三百年來日本全國に亘つての、私娼の分布詠から見ても容易ならぬ勢で、到底官許公娼の企て及べる程度ではない。各地方々々の私娼の異名だけでも、眞に枚擧に遑あらぬ程である。芭蕉翁の句の「海にふる雪や戀しき浮身宿」なども其一で越後では私娼を浮身、その家を浮身宿といふ。敦賀で私娼を「かんびよう」と呼ぶのは、夕顔をさらすと云ふ意であらう。こんな詮索をしてゐては數限りもないが、公娼が今後その時代化と共に低落卑野となり、私娼が新らし味に於て、愈々向上發展して行くことは、全く自然の趨勢であらう。



## 斗

## 鶏

この二字では恐らく何の事だか分るまい。土圭——この二字でも亦分るまい。その形状が斗（とます）に似て、鶏のやうに時を告げるといふ處から、最初に用ひた時計の原字である。土圭も亦同様で、舊幕府の營中には「土圭の間」といふ一部屋があつて、其部屋付きの御坊主が、時刻を報告されたものである。私は時計に就て、徒にこんな古臭い詮索をしたいのではないが、此器械的に細密な組立てから出来上つた機械が、今日では歐洲へ、その純日本製が供給されつゝある盛況に對して、機械品とさへあれば、歐洲品のお蔭を蒙つてばかりを我國として、初めて一種の寄與を白人の社會へ齎し得た欣ばしい感に、私は堪へぬ次第である。

明治になつてからの時計製造史は、案外に未だ新らしい。明治八年に麻布で

水車を利用して、時計の製造に従事した人があつた。少からず見戯に類したものであつたには相違ないが、志は嘉すべきである。惜いことには今その名を逸した。所謂ボン／＼時計が、純日本の原料で製造可能になつたのが、明治二十年であり、懐中時計の製造が出来るやうになつたのが、同廿九年である。處で明治廿五年に、柳島に精工舎が起つたことが、我國の時計製造業に一新時期を劃し、ボン／＼時計の如きは、卅年代に米國ものを我國から全く驅逐し、四十年代には、支那へ輸出して、獨逸ものとの競争に打勝ち、更に印度まで西進して、この大戦前には、印度市場を日本ものと獨逸ものとで、相折半するまでに成功した。其後大戦のために、獨逸品が杜絶したので、戦時中から今日へかけて、日本製の目醒し時計は、値と質との競争に打勝つて、今現に全歐を支配してゐる。最近歐洲の或る商館から、精工舎主の服部時計店へ、歐洲全體の、若くは巴爾幹の一手販賣權の獲得交渉を申込んで來たなど、時計製造工業の進歩として、大に欣ばしい消息である。



だが、これ程の發達にも相當な淵源はある。我國へ西洋からの時計の渡來は第十六世紀末の事に屬するが、所謂「漏刻」と稱した水時計は、天智天皇が親しく製作を創め給ひしものである。ペートル大帝が自身で、諸種の機械類を造られたことは有名ではあるが。そは第十八世紀の初であるに引換へ、第七世紀下半の天智天皇が、秋の田の刈穂の庵を念とせられた一方で、時計器械の必要に聖慮を注がれたことは、我が國人として誇るべき史實である。水時計、日時計、砂時計、尺時計は支那文物の輸入時計で、後年和蘭からの西洋もの、舶來を見るに及んで、所謂「自鳴鐘」の名が始まり、新井白石の解説によれば「斗鷄」の字をも見るに至つた譯である。寛政の初に麻田剛立といふ人が、振子と器械を發明して、振子時計を製作したのも、和蘭系を逐うての製作であらう。

最近新聞紙の記事によると、正午の「ドン」を廢止しようと云ふ説がある。電氣時計を備へ付けて、時刻の正確を保つて行けば、毎日一發に十圓づゝを煙にする午砲の如きは、當に廢止すべきものだといふ説であつて、私はこれに大賛

成である。モ一今日になつて「ドン」でもないではないか。赤染衛門の歌に「けふもまた午のかひこそふきつなれ、ひつじのあのみちかづきにけり」といふのがあるやうに、時を知らせるに貝を吹いた時代もある。貝から太鼓、鐘、それから午砲と變化進歩して來たのであるが、一般に時計が發達して、電氣時計の案出さへ出來た今日、法螺貝の遺物である「ドン」などは、モ一廢止しても可さうなものである。

「石町は江戸を寢せたり起したり」と川柳子に諷はれた石町三丁目の時の鐘は、江戸の時刻を支配してゐたのであつて、家持共は一軒で、月に鑄四文づゝの鐘役錢を納めてをつた。その江戸の後身の東京の柳島から、懐中時計が製出され、ボン／＼が中央歐羅巴の、家々の時刻を支配するに至つたとは、芽出度しとも芽出度しと言はざるを得ぬ。



流行

流行はいづれにしても都會から始まるものであるだけに、極めて群衆心理的で、何等の道理や理由などなしに、急速な運搬力を伴ふものである。その中でも、最も理由に乏しいものが動物や植物の流行で、殆んど馬鹿々々敷い程度のものが多し。兎が明治六年から七年へかけて、大流行を極め、更に同二十二年になつて、復た大流行を極めた模様などから考へると、一旦廢れても、潜伏期があつて、妙な動機から一點火されると、また一時の流行を來すものらしい。明治六年の兎の流行といふものは、極端な程度まで進んだもので氣の狂つたもの、破産したものさへ續出した。米利堅種と稱する耳長のもの、白の更紗、三毛、茶更紗、淺黄更紗などいふ種類になると、一匹が數百圓から、特に優等なものには千圓の値まで出た。最も面白いことは、その主な餌である豆腐殻が、

非常に騰貴して豆腐の値より高くなつたことであつた。この流行は東京から名古屋大阪へ及んで、二度目の流行の際には、寧ろ大阪方面が熾であつた。明治七年に布令が出て、兎一匹に付一ヶ月一圓の賦課をするといふことになつて、飼養者が頓に減つた。一旦流行が下り坂になつたとすると、數百金の三毛も、たゞの兎なりけりで、一月と經たぬ中に、藪や濠などに棄てるやうになり、上野公園や下谷の三味線堀あたりには、食扶持を失つた兎が、ごろごろしてゐた程であつた。氣の早い大道商人が、一鍋一錢五厘の「兎鍋」を始めたのも、此時であつた。

同様な種類の流行は、モルモットであらう。明治二十三年頃に流行を極めたが、古い頃には今から百七十年ほど以前安永の頃に、一度流行つたことがあつた。幕府時代には支那から渡來し、明治の流行は、廿一年に伊太利の貴族が白無垢と稱するモルモット雌雄を、宮内省へ獻納したのが、流行の動機を成したものである。九段坂の鳥鐵や向柳原の松前などと云ふ鳥屋仲間が、主な取引



商であつた。昨年あたり流行の全盛を極めた鴉なども、亦これ等の亞流ではあるが、兎やモルモットの空相場的なるに引換へて、鴉に至つては實利實益が伴つてをる。流行までが時代に應じて、實利主義になつて來た處が面白い。萬年青は天保の末頃から、一般的流行を見るに至つた。その流行が可なり極端になつたものと見えて、嘉永五年十一月幕府は禁令を出して「近年世上無益の鉢物を翫び、就中小萬年青之價格別高價の品賣買致し、其上武家寺院の輩植木屋共に立交諸所にて集會致し、専ら損益を競ひ身分不相應の所業に及候族も有之」など心配してをる。しかし兎でもモルモットでも乃至萬年青でも、其流行は一般的であつた。流行の源は縦し貴族上流者であつたにしても、例の社會心理群衆心理に驅られて、何時の間にか民間の公衆的流行となつた。が、狎の如きになると、モ一貴族的愛玩物で、貴族社會ばかりを限つての流行物である。

英人が Chin-dog と呼ぶのは、浮世繪などで紹介されてからの名であらうが、

願の下に懐いて愛撫するから、此の名があるなどは幾分附會説であらう。最も盛んに支那から狎が輸入されたのが、奈良朝平安朝の頃であるのを想ふても、狎が貴族的愛玩物であることが知れる。そこで川柳子の觀察が奇抜だ。「奥の狎木綿ものさへ見ると吠え」又「じつとして目見えは狎に吠えられる」など、徳川時代の半頃には、古くからの支那輸入種は、最早人為淘汰で純日本種となつてゐたらしい。しかし狎だけは飽まで貴族社會だけの流行に止まつて、竟に民間公衆の流行物とならなかつた。それにしても種々の信仰教儀に隆替興亡があつて、天理教の後に大本教の興り顯はれたやうに、民間の公衆的流行であつた兎やモルモットが、今後復た何時か流行兒とならぬことを、誰れが保證し得ようぞ。



今一二回書籍と書肆の話を重ねさせて頂く。私は麹町の通りを電車で通る度に、アノ街が、其の十年前二十年前に較べて、左程の變化のないのを、不思議なことにも思ふが、特に或る店に就ては、その變化のないことを喜ばしくも思ふ。こんな事を考へる時に、何時も一番に想ひ浮べるのは、四丁目の角の書林磯部屋さんの事である。磯部屋さんの先代は如何にも新進奇鋭の人であつた。十九歳の時に、當時有名であつた假名垣魯文と協同して、「いろは新聞」といふのを始めて、マンマと失敗した。根が江戸ッ兒肌の意義ある人であつて、一見婦人のやうなやさしさうな風でゐて、思ひの外の政治狂で、中江篤介先生と深い交際があつた。「廿三年氷來記」といふ小冊子を出版したのも、此方面の趣味からである。さうかと思ふと、一面には粹な處も十分あつて、日本橋の叶屋歌吉といふ藝者と、深い仲であつた。

商賣が一風變つてゐるだけに、書肆仲間には段々奇抜な風變りな人が少くはないが、磯部屋の先代のやうな人は、如何にも慕はしく思ふ。例の政治狂から

後には星亨氏の顧問格になつて、石山を買ひに行つたこともある。辯護士などに向へ廻して、法廷で辯論をするなどいふ道樂まであつた。伊藤大八、利光鶴松など云ふ人々は、磯部屋さんから可なり引立られたものである。そんなことの方では、唐本の書史彙傳などを、木板の活字で製本したり、伴信友の書入本の六國史を、石版で印行したりなどした。書肆としては如何にも豪い人であつた。その同じ麹町へ、當代出版界の奇人、金尾文淵堂主人が居を構へたことは、何となく喜ばしい。三百六十五日一日も缺かさずに、淺草觀音へ參詣するといふ奇行ばかりでなく、その著作家に篤く、出版物に忠實である文淵堂主人の熱誠と俠氣には、誰でも動かされぬものはなからう。

書肆の變り物——善い意味に於ての名物男を擧げるなら、佛書屋の大村屋惣兵衛といふ人も其一人であつた。若年の頃に淨土宗目録を編纂して、坊さん達を驚かせた。また淨瑠璃が上手で、京樂といふ名まで持つて、野崎が得意だつた。大阪から新太夫が東京へやつて來ると、一度は大村屋さんへ挨拶に行つた



ほどであつた。文行堂の先代なども特色のあつた人で御成道の全盛時代には、伊與紋が常得意であつた。また例の鈴久に三千圓で朝鮮本を賣つたので有名な野田と云ふ洋書屋は、狩野博士の御最良であるが、子供を負ふつて女郎買ひに行き、断られたのに腹を立て、懐中の札束を投げつけたといふ奇談さへある。書肆さんの話は、この位で止めておくが、先日一寸書いたことのある田中光顯さんの此方面に關した事を、今一度書いておく、「古芸餘香」といふ寫本で十三冊の本があるが、これは田中青山伯の未だ内閣書記官時代の著書である。五山板宋元板古寫本等の解題で、若い時分から漢籍古書にかけては一家を成した鑑識家であつた。池の端の琳琅閣の先代が、青山伯の懇意で、古板本や書畫骨董は、皆此家から納めさせたものである。世間が兎角古社寺からタダで持つて来たかのやうに想像してゐるのは、此の愛書家に取つて、少からず迷惑なことであつたらう。佛書の研究から禪に入り、後には當時流行の八宗兼學に轉じたのは、故渡邊國武子であつた。これも未だ大藏書記官時代に、モ一佛書研究

に熱中されてゐた。序ながら記すが、禪の流行は最初油町の鼈甲屋の主人川尻實峯といふ人などが初めて、それから鳥尾得庵、山岡鐵舟、お醫者で佐々木東洋、桑田衡平など云ふ諸先生が始められて、一時流行を成すまでに、熾になつて来た。貴族院には今日でもまだ名前だけ出てゐる河禮之氏——星亨氏の先生に當る人——なども、八宗兼學の研究者である。話が少々岐路に入つたが、明治時代に於る出版上の文化事業については、田口鼎軒先生の事業を、追想せぬ譯には行かぬ。

書籍談(下)

私は一週間ほど前に、神保町の或る古本屋の店先で——書架に列べてあるのではなく、眞とうの店先に、幅廣に切つた紙片に、筆太に値段の明記されてある大小の雜書が「買ふなら買へ」と言はんばかりに、亂雑に散らかされてある中



に、丰大な二冊の書が、三圓の紙札を表紙の正面に貼り付けられて、積み重ねられてあるのに不圖眼が着いた。一見してそれが經濟雜誌社出版の「日本社會事彙」であることを知つた。手に取り上げ奥附を見ると、明治廿三年九月印刷の、振もなき社會事彙である。私は雜草の裡に、丁子の芽生でも見つけ出したやうな氣がしたと同時に、古本商が三圓の棄て賣りにする以上、前の所有者からは恐らくは一圓にも足らぬ値で、買取つたものではなからうかと思つた。

田口卯吉氏が百科全書編纂の素志を起されたのは、明治十年前後で、先づ明治十七年に泰西政事類典を完成し、十九年に大日本人名辭書が完成され、明治廿一年五月から業を起して廿四年五月まで、全三年を費して成功されたのが、この日本社會事彙である。そしてその三年間に亘つて、豫約の應募者が僅か九十名に過ぎなかつたことは、今日馬鹿々々敷い安値で棄賣をした藏書家と相待つて、我が所謂知識階級の眞價を疑はぬ譯に行かぬ。人名辭書に於ける嵯峨正作、社會事彙に於ける川上廣樹兩氏の偉大な功績は、我國文化のために永遠に

感謝すべきものではあるまいか。

此頃の御役所と違つて、蕪幕時代でも亦明治初年の頃でも、官板に却々良い書があつた。營利の目的に叶はぬやうな珍籍類は、徳川幕府では官板にしたり、又は諸大名に命じて、大部の書を出版させたりした。明治になつてからも諸官省で、可なり良書の出版をやつた。民間では吉川半七、後に弘文館と云つて、其代表者の林縫之助といふ人などは、利益以外に超越して珍書を印行した。國書刊行會や故實叢書、古書備考、朝陽閣字鑑、其外大部の貴重品を活版にして、誰にも容易に見られるやうにした功は、明治文化史上に特筆する値打が十分であらうと思ふ。田口先生の經濟雜誌社にも、前記の諸辭書類以外、國史大系、群書類従などの大出版がある。

岩本梓石などと云つた處で、それがどんな人であるか知つた人は極僅であらうが、珍書屋として有名な達磨屋五一の孫で、芝の日蔭町の「フミヤ」といふ書林の主人である。學和漢洋を兼ねて、其著述も可なり澤山ある。岩崎灌園の



名著「本草圖譜」は、永年寫本でのみ傳はつ來たが、岩本氏によつて目下現に豫約中である。木版彩色摺で月二回の出版といふことであるが、完成の上は博物家や美術家を喜ばせることであらう。一體書籍の出版事業は、昔に較べて今の方が容易になつたのか、或は困難になつたのか。須原屋や出雲寺などは武鑑の出版元だけに、その名は全國に知れ渡つてゐたが、新聞廣告といふ好機關が備はつてゐなかつた時代には、出版物の汎布が容易ではなかつたであらう。だが茅町の須原屋が江戸名所圖繪を賣出した時、その前夜から買手が押しかけて來て、戸を壊したと云ふ事實談やら、八大傳の板元の丁子屋さんなどは派出な人であつたから、近火のあつた翌朝などは、角力や役者が見舞に來て店にゐたので、大に人目を引いたなどいふ事は、世が豊であつた爲めであらうか。

一寸圖書の檢閲のことを書添へると、舊幕時代には和漢書は總て聖堂で檢閲をした。聖堂即ち當時の帝國大學で、圖書の檢閲をやつたといふことは、内務省檢閲の今日の現制度に優つてゐる。特に面白いことは、地本草双紙類の檢閲

が、例の仙女香主人の名主様の坂本氏の、擔當であつたことである。此頃内務省圖書出版の檢閲係の中へ、夫れくの専門家を囑託に入れたら、と云ふ民間著作家側の希望を、遠の昔に徳川幕府が、實行してゐたなどは、眞に人を笑はせる話だ。坂本氏の檢閲ゆゑ、草双紙類の本の奥附には仙女香の名が入れてあつた。

### 河岸の弟兄(上)

江戸は日本橋の魚河岸の弟兄については、頗る奇抜な話がある。過般關東關西の俠客連が、大手町邊のお召しを畏み、東京で寄り合をして、一時新聞種を販した時分に、私は慶應四年の正月に發揮された、日本橋魚河岸連の義俠氣分の事實譚を、想ひ出さずには居られなかつた。

俗に苦しい時の神頼みと云ふが、神頼みが間に合はぬほと急場になると、



結局人頼みとなつて、もう面目も名譽も言つてゐられなくなるのが、尋常人の遺口である。慶應四年の關東武士は、モーこの尋常人になり切つてゐた。丁度この辰年の正月廿二日の事であつた、江戸町奉行小出大和守は、其役宅へ魚河岸行事をお召しになつた。今日で言へば府知事から出頭のお達しだ。イヤ寧ろ内務大臣からの御召に相當しよう。魚河岸の世話役である行事の赤茶ピンは、何事の御用命かと罷り出て見ると

「此節上方筋不容易御時節柄に付此上薩長の徒攻め下り候はゞ御當地の者一致防戦可致儀に付其方共儀は兼て人氣荒き場所柄に付萬一の節同心協力盡忠可致尤も平時の上は何事に依らず願筋も相立候間一同能々申合せ銘々得道具相携え可申此段可相心得候」

といふのが、町奉行のお達であつた。町奉行など云ふものは、昔も今も——今は町奉行とは言はないが——何んと言ふと「不容易御時節に付き」を、振廻したがる宿世の約束があるものと見える。

魚市場の行事も、永年この商賣はやつて來てはをるが、こんな御申渡に接したことは、固より生れて初めての事である。お上の御沙汰ではあるが、しかし「兼て人氣荒き場所柄」を「不容易御時節柄」に官命で結び付けられては少々災難だと思つた。が、今更遽に人氣を吹らける術もなく、と云つて其場で請書を認める勇氣も出ずに、只頭を垂れて罷り下つて來た。さあ魚會所では、市場の同業を急に召集して、大評議が開かれた。評議の席には顔は揃つたか、誰一人發言するものはない。平生は喧嘩や喧嘩の仲裁こそ得意でやるが、眞劍の戦争となつては、少々勝手が違ふ。喧嘩人種と戦争人種では、人種に差別がある、とまでは考へ着かなかつたらうが、銘々の腹ではさう考へたに相違ない。

しかし口利きと云ふものは、何處の社會にもある。満座水を打つたやうに森とした中から、一膝のり出したものがあつた。見ると相摸屋武兵衛さんである。流石は平生から俠氣で評判な相摸屋さんだなど、皆の衆は思つた。舊記によると、大約下のやうな趣意で、相摸屋さんは述べ立てたといふ。



皆サン……嘉永三年の六月、浦賀沖へ唐人船の参つた時、浦賀奉行伊澤美作守様より江戸表への御注進、江戸の騒動はト方ならず、處が町奉行井戸對馬守様より行事へ御達があつて、船は廻船問屋へ申付けあれば、異人共日々の容子を其方共にて見分の上、御番所へ注進せよとの御沙汰であつた。其時萬公さんのお親父さんなどは、江戸つ兒の氣前を見せるのは斯んな時だと、鮪庖丁を逆手に持つて、初日に出なすつたもんだ。」

武兵衛さんの演説は尙ほ續けられた。

「敵手が唐人船では、萬一捕まつて連れて行かれた時、「オレツチは河岸の者だ、勘辨しねエ」と言つて見た處で、言葉は唐人に分りツこなし、ぐづくしてゐる中には胴と首とは別々になるかも知れネイ。處が薩州の奴等なら、兎も角日本人同志だ、ワツチラ肴屋のもので、御番所からの言付けで、ナニはほんの眞似事に出かけて参つたばかりですと、弱音を吹いて見ネイ、命には別條はありやしまい。……逃げる時は一所に逃げるとして、此の處一番魚河岸

の威勢を見せてやらうぢやネイか。」

衆議は忽ち一決して、「……去十二月芝騒動の節御大名様方橋々御固めの例により、日本橋江戸橋は乍恐私共手限りに被仰付度如何様にも堅固に相構へ戦ひ可申」云々といふ請書を、正月廿五日附で北の御番所まで差出した。江戸の防守に於て魚河岸の哥兄連は、一朝にして「御大名様方」と同格になつた次第だ。

### 河岸の哥兄(下)

俗に八萬騎と稱せられた旗本が薩長武士の侵入に對して、江戸の防守に獨力で當り得ずに、河岸の哥兄の助太力を頼むに至つたことは、必ずしも徳川幕府三百年の昌平が、關東武士を軟弱ならしめた事に因るばかりではない。寧ろ時代が薩長の田舎武士を驅つて、急激に突進せしめたものであつて、河岸の哥兄の俠氣位が、何の役にも立つやうな場合ではなかつた。大正の俠客團か、左程



お役にも立たぬ中に、影も形も噂も消え失せたことなども、亦同様な次第ではなからうか。

魚河岸の總代は、相摸屋武兵衛、佃屋佐兵衛、千足屋甚兵衛の三兵衛であつた。その勢實に一千人、庖丁蔦口竹槍といふ出立ちである。薩州勢を邀へ撃つべき軍事の評定は、蛸魚や鮪の値を定めるほど易くはなかつたにしても、相摸屋武兵衛は兎も角も總大將として、采配を振つた。前日のお達しに對しては、立派な請書を差出し、二十六日には『神妙の事に思召さる』と、町奉行から賞美の言葉さへ賜はつた。そして二月朔日には、書面を町奉行へ差出して『假令鎗刀、飛道具相用候ても勝手次第の儀にて一同の身に取り冥加至極有難奉存候』と、武士同様の武器を使用する特權を、先づ收めておいたものらしい。二月下旬には、西郷吉之助が官軍の先鋒として東海道を前進し、三月の初に品川へ乗込むといふ報道があつた。蛸の頭ほどイキリ立つた魚河岸勢に對して相摸屋武兵衛——此時にはモー相摸守武兵衛位の心持になつてゐるに相違ない——は軍

令を下した。

戦争専門の武士の軍令も、喧嘩専門の河岸勢の軍令も、大した變りはなかつた。「進退駈引は合圖の太鼓に従ひ、一人立の働決して致間敷」とか『兵糧の儀は差支無之焚出し相廻し候事』とか云ふのであつたが、『合言葉は舟と申候はば水と答へ可申』といふので、幾分商賣柄の因が窺はれ、『萬一の節作病を構へ或は其場に至り逃げ去り候儀決して不相成』との一箇條で平民の非戦闘氣分を反證した。直ぐ手當のことを彼是れ言つた當節の俠客仲間にもこの最後の一箇條だけは、どうやら訓令として内達しておく必要があるらしい。

慶應四年三月の初め先鋒西郷吉之助品川へ着陣との注進が、芝濱の魚組合からあつた。日本橋最寄では、それ今にも切り合が始まると、大變な噂である。武兵衛大將の配下は、愈々勢揃ひをして見ると八百何十人、銘々がさしこの神天に、股引草鞋穿きの出立ち、舊記によると孰れも「魚がし」の三字を染抜いた手拭を鉢巻にしたとあるが多少おまけがあらう。



處で西郷どんは品川へ陣取つたばかりで、直ぐには江戸へ入らず勝安房さんが恭順の談判に、所謂兩雄の腹藝とかを品川でやることになつたため、折角いきり切つた魚河岸の哥兄の、戦闘準備を全く水泡に歸せしめたのは、返すくも遺憾の極である。哥兄連の肌の九紋龍の文身には、その爲に刀疵一つ着かなかつたであらうが、平素人殺しの稽古をせぬ平和な民衆の一心が、小供の時分から斬棄御免の稽古を、他一倍勵まされて育つた薩摩武士の刀の双先に、果してどれ程の抵抗力を有つてゐたかを、實地に試すことの機会を、永久に逸したことは眞面目な意味で、残念なことであつた。

斯んな具合で、品川での腹藝が日本橋連の腕試しをお流にして了つたが、これが、若し大阪であつたなら、アノ雑喉場の若い者達であつたなら、到底も町奉行のお達しに、請書を差出すまでの運びには立到らなかつたであらう。相摸屋さんの後が、今どうなつてゐるか、當年捕の手拭で鉢巻をした連中の、一人や二人は尙存命であらうと思ふが、冬にでもなつたら河岸の手軽な店へ飛込んで、

鮫鍋でもつゝきながら、そんな古老から半日の閑談に接したいと、私は願つてをる。

## お 臺 場

品川沖の所謂お臺場が、既に取毀されたか、未だであるか、甚だ迂濶千萬なことであるが、實は判然とは知らない。それは東京府の役人かなんかでない以上、それを確かに知るほどの必要がないからである。恰度一時名を知られた士が、一旦世の中から忘れられたが最後、死んだか生きてゐるか、世の中はそんな事に氣をつけてゐないのと同じ事である。だが考へて見ると、品川のお臺場こそは、國防即ち對外的の防備として、我國で設計した築造物の、恐らくは最初のものではなかつたかと思ふ。若しさうだとすれば品川のお臺場に就て、それを此處に一日分だけの話題とすることも、決して無用ではなからう。



凡そ一國の國防が、自國民によつて嘲笑の的となつた時には、如何ほど立派な砲臺や砲門が備はつても最早それは死砲に過ぎない。品川沖へお臺場が築造され始めた嘉永六年の夏、例の京童の間には、新作落首百人一首が歌はれた。その中に安部仲麿「高繩でふりさけみればはるかなる品川沖へできししまかも」小式部内侍「あめりかへゆくのみ海の遠ければまた舟がきて臺場おかため」と云ふのがある。それが餘りの泥繩主義であること、莫大な費用と人足とを消費することとで、先づ平民一般の反感若くは嘲笑を買つたものであらう。米艦が一旦解纜した翌七月の朔日には、守戦孰れかの意見を諸大名に徴するやら、同時に節儉の布令を一般に下すやらして、そして直ぐに一ヶ所金五十萬兩の見込である砲臺十一ヶ所（最初の設計）を築造すると云ふ、一弛一張の政策に出遭ふた京童は「それ見たかあまり儉約なすゆゑに、三國一のふじの物入」と嘲つた。

砲臺は當時砲臺と書いたらしい安政元年に愈々竣工した砲臺は一番から五番

まで、第六番は水面を出づるまで、工事を中止したのであるが、最初の設計案は十一臺であつた。その位置の如きも、第一番砲臺から三番までを外郭として、四番から五六番と引續いて金杉沖、濱御殿沖へと延びて、佃島の岬角まで、五丁又は十丁の間隔を取つて、第十一基まで築造する設計であつた。しかも實際に江川太郎左衛門が築造に取かゝつて見ると、一番から五番までを完成して、六基の半まで、當時の金で七十五萬〇二百九十六兩といふ莫大な入費がかゝつた。處が一旦去つた米船は、お臺場の工事などには頓着なく、翌安政元年正月に再び遣つて來た。論語の作り替が出來て「有亞墨自遠方來、亦不苦乎、水戸不聽不愠、亦不軍師」など、平民に擲擲されたのも此頃の事であらう。第一番砲臺が二萬六千餘坪、深さ平均滿潮一丈一尺五寸、これに要する土砂二萬七百坪餘、總體に要する木材總計松杉杭木三萬二千二百本と計上されてある。肝腎の人夫についての記録が見當らぬのは残念であるが、決して少い人員ではなかつたであらう。後に出來た歴史類を見ると、當時幕府の眞の意向は、



開國通商にあつたけれども、第一關門に國防機關さへ出來てゐないやうでは、外人の輕侮を買ふ所以であるから、臺場として位置や築造に不當な點があつたにしても、嘉永安政の當時としては、必要な設計であつたといふ風に辯護したものがあつた。何しても明治に入つて間もなく、それが全く無用な築造物であることが明瞭になり、たゞ品川沿岸の漁民のために、屈強な海苔干場となり、臺場の石垣が牡蠣の好繁殖場となつたに過ぎないことを想ふと、所謂國防の標準と云ふものも、進化變遷の常なきものであると同時に、幕末動亂の頃であつたとは云へ、政治上の權力者といふものが、随分無駄な勞役と、實用に足らぬ設計のために、人力と國帑とを、大勢の推移にも構はず、徒費して行くものであることを思はずには居られぬ。一兩日内に東京に遣つて來る米國議員團中の歴史趣味でもある人に、例のペルリ來と此のお臺場の話でもして、國防の今昔でも語り合つて見たら、案外の面白味があるかも知れない。

## 長崎文化

新進の佛蘭西學者として名のある太宰施門君の、施門といふ名は、日本流の名としては如何にも變な名であるが、これが西洋流の名、特に宗教的に因の多い「シモン」といふ名に、たゞ漢字を當てはめたものであるといふことを知れば、この不調和な二つの漢字に、言ひ難いほどの趣味が感ぜられる。とても佐藤顯理氏の「ヘンリー」などと較べものにならない。近來洋風の建築談に就て、専門家をも凌ぐ程の趣味生活の人西村伊作君の、伊作も明かに「アイザック」から來た者である。この類の名は、未だ調べて見たら幾らもあらう。勿論是等諸氏の名が、何にも直接長崎文化に關係があるといふのではないが、耶蘇教に因縁の淺からぬ是等の名が、今日何の不思議もなく、其處此處に見出されることに會ふと、今更のやうに、「長崎文化」を想はずには居られぬ。



幕末の外交家で、且つ當時の外國通であつた岩瀬肥後守（忠愍）の自筆書寫の「輿地便覽」（寫本）を、私は先年古本の市で手に入れた。安政己未嘉平月鷗所釣隱識とあるからには、安政六年十二月に、アノ攘夷論の旺な最中の書寫であることを想ふと、邦家の近き將來を洞見した識見家の、靜かな研究に感心せぬ譯に行かぬが、その世界の國名地名が、漢字に當はめて正確に發音されてあることを見ては、その由來の久しい長崎文化が、我國維新の改造事業に、直接間接貢獻する所の至大であつたことを、誰も容易に推想するであらう。

例へば英領印度の部で、マドロスを言ひ現はすに「綱礁臘」と書きそれに麻打拉薩、麻哆刺斯、秣達刺沙、馬達拉斯其他三種ほどの用字例が書添へてある。露領西伯利の如きは、止白里と書いて悉畢盤阿、止百里亞と書添へてある。魯西亞に對して片假名で、一名リュスランド、ガヲシと附加へてあるのも、要を得てをる。そんなものは瀛環志略からでも、書き集めたものに過ぎまいと云ふ人もあらうが、私は斯んな知識こそは、本來長崎文化が産んだ念の入つた產物

であらうと思ふ。

今日蕎麥屋の目錄に、「鴨南蠻」と書いてあるのを、誰れも見て變な名だと感じる人はなからうが、これも亦私の所謂長崎文化の餘惠で、鴨南蠻の名それ自身が、和蘭料理の遺存記念であることを證明してゐる。例の切支丹婆天連が、關西關東の各地へ擴められ始めた頃、葡萄牙人西班牙人等が、京都へ入込むやうになつて、遂に京の四條に南蠻寺を建てた。その時分から、是等外國人が食べてゐた料理を眞似して、南蠻料理が始まつた。我が「鴨南蠻」こそは、二百年來生遺された唯獨りの正系の遺孤であるのだ。「長崎土産」に阿蘭陀料理の獻立を書いたものを見ると、正月の獻立として、大蓋物に味噌汁とある、蓋しスープであらうか。それに註をして、鶏、かまぼこ、たまご、椎茸とあるが、或は日本固有の蒲鉾を利用して、スープの浮かしにしたのかも知れない。次に大鉢潮煮とあるが、この方が或はスープであるかも知れない。各種の油揚、帶腸（ソーセージ）など數種あつて、菓子に丸焼カステラとある。獨り阿蘭陀料



理と云はず、支那料理に至りても亦、その初期に在つては正しく長崎文化の寄與物である。所謂卓袱料理——「シツボク」は卓袱の唐音から當てはめたものと云ふことであるが、本來は所謂南蠻語ではなからうか——が享保の頃から京阪地方に（後に江戸にも）流行を見るに至つたのは、長崎文化の傳搬である。その他我國への歸化人の系統を見ても、亦長崎の地が如何に重要な部分を占めてをるかゞ知れる。長崎の名利が其最初の住職に明清の歸化人を有してをることの多いことは、今更算ふるに違がない。今日の何氏（貴族院議員の）が何毓楚の後裔であり、元大藏省官吏であつた盧氏が、盧君玉の末裔であり、元三井物産店員の鉅鹿氏が、魏之珍の出生地を姓としたものであることなどは、知れ渡つた事實である。有名な英人アダムスの三浦安針は言ふも更なり、蘭人ヤンヤウスの歸化が、今の「八重洲」河岸の名を作すに至つたことなどを想ふと、「長崎文化」は社會的に、あらゆる方面に亘つて、特殊の研究を重ね、ばならぬものであらうと思ふ。

## 馬鹿話

何を書いて見ても、どうも理に落ちて了ふ。そこで一つ何の役にも立たぬ、全くの馬鹿話を一日試みて見たいと思ふ。話と話との間に、聯絡があるでもなく、趣味が立つてゐる譯でもない。只「はなし」を列べたまでである。

何かつまらぬ場合に用ふる「ベケ〜」といふ言葉ほど、船や書物に載せられて、輸出されたり逆輸入されたりした言葉はあるまい。我が開國前、阿蘭人などが盛んに日本へ——と云つても大概長崎邊まで——やつて來た時分、或る西洋人がその「日本紀行」中に日本の國では「バカ」といふ言葉を種々な意味で用ひる、否定するやうな場合にまでも用ひる云々と書いた。その Baka の綴が、書物の上で西洋へ行つて、何時の間にか Baka 即ち「ベーカー」と成つた。それを新來の和蘭人や英吉利人あたりが、長崎邊のお茶屋だの店頭あたりで、



あらゆる否定の意味で生半可に、「ペーケー〜」と使つたものが、復た日本人の耳で轉訛されて何時の間にか「ペーケー〜」と成つて了つた。

「笹棒」といふ言葉も、どうも眞の起源は分らぬやうであるが、延寶元年（一六七三年）に和蘭人が初めてアフリカの黒奴を伴れて渡來した。そして珍しいと云ふので、日本橋堺町で見世物にした。處でこの黒奴の名が「ペラボラ」と云ふのであつて、性頗る愚にして頑。顔から體まで眞黒である上に、頑固で阿呆と來てるから、忽ち江戸ツ子の評判ものとなり、馬鹿で頑固な者さへ見ると「ペラボウ」の如しと云つた。そしてこの稱呼が如何に熾に流行したかと云ふことは、同八年に小石川白山邊の或る菓子屋で、焼麩と黒胡麻とで製らへた色の黒い菓子に「ペラボウ焼」といふ名をつけて、其頃の名代となつて、ペラボウに賣行が盛んだつたと、舊い記録に載つてゐることを見ても分る。

次は菓子に因んで、澤庵和尚と善哉の話である。東京詞の「しるこ」は分つてゐるが上方の「ぜんざい」は言葉だけでは分らぬ。寛永の昔の事である、堺

の祥雲寺の開山澤庵和尚が、各地へ行脚されて歸山の日が近づいた。甘黨の和尚のことであり、日頃牡丹餅が好物である處から、留守居の坊主達は、牡丹餅を造らへて和尚の歸りを待つてゐた。處で豫程が違つて三四日延びて和尚は歸山された。折角の牡丹餅は、その爲めに硬くなつて其儘喰へなくなつた。坊主と云ふものは頓智の良いもので、早速餡を煮て汁にし、その中に餅を入れて鹽梅を良くした。歸山された和尚の前へ薦めると、和尚は一椀を試みて、嗚呼、「善哉〜」と云はれた。善哉の佳名はこれから起つたといふ。

「ジャンケンボンよ〜」と小兒が遊んでゐる。ケンには拳に相違ないが、ジャンは何であらうかといふ。勿論ジャンケンそのものは、紙石鉄の拳であるが、氣になるのは「ジャン」である。これには二説あるやうで、其一はジャンケンが兩拳の轉訛である、兩方で拳を出すから兩拳だといふのであるが、他の一説はこれを反駁して、凡そ拳の如何なる種類（藤八拳蟲拳その他）も、皆兩拳を要するものである以上、紙石鉄の拳に限つて、兩拳の稱は可笑しい。蓋しこれ



は石拳と云ふので、その石の字を温石の場合のやうに吳音で讀ませてジャク拳と云つたのが、小兒によつて何時かジャン拳と訛つたものであらうと。最終に一つ疑問を遺して置きたいのは、最近流行語の一である「茶目」といふ言葉である。茶目さんと云ひ、茶目式を發揮するといふが、由来や起源の一向に分らぬ現代語である。「茶目」といふ詞は、正式の解釋から言へば、眼球の一部である「虹彩」の通稱である。つまり虹彩と瞳孔とを併せての俗稱が「蛇の目」で、虹彩が「茶目」である。だが流行語の所謂茶目は、こんな眼科的な説明では、到底説明が出来ない。蓋し「チャ」といふ言葉は洒脱圓轉飄々乎とした丰狀を意味するので、茶番狂言と云ひ、茶氣満々と言ひ、茶々を入れるなど皆その用例である。茶目の茶は、この意味から來てをることとは、殆ど疑ひを容れぬが、特に目へ持つて來た處が、何にかの起源でもあらうか。今頃から考證してをかぬと、二三十年後の風俗史家は、大にこれが詮索に困ることであらう。

## 小川町の話

武州忍の城主松平下總守の藩中から、小川町へ三人の本屋が出てゐる。澤屋さんと云つて今の三省堂より先きの所にゐた。今一人が原田博文堂と云つて、例の有名な「佳人之奇遇」を出版した本屋である。「佳人之奇遇」の當時の賣行こそは、眞に洛陽の紙價を高めたもので、讀書界を賑はしたものであつたが、博文堂自身も、本屋をして一時全盛を極めたものであつた。他の一人が、今日の有斐閣を築き上げた江草芥太郎氏で、兩刀さした出身にも拘らず、先づ日本橋の伊せざと云ふ本屋へ奉公して、自ら風呂敷を貰つて、古本の仲買をやり、後に小川町へ床店を出した。

丁度その時分のことである。帝大が未だ一ツ橋に在り、圖書館と云つたら、恰度今の武蔵野線の池袋の停車場の様な建物に過ぎなかつた。江草氏には流石



に一隻眼があつた處から、毎日のやうに帝大の湯呑所へ、御用聞きの序に入込んで、眼星をつけた書生さん達と友達になつた。この書生さん達の中から、第一期の博士や大臣を出したことは言ふまでもない。その内に早稲田の専門學校が出来た、同じやうに江草氏は其處へも出入した。權威ある法律書の出版が、年と共に容易になつて、有斐閣の今日あるに至つたのは、決して偶然ではなかつた。

士族の歸商といふことが、維新後には生活の必要からでもあるが、一つには流行のやうに實現されたが、その多くが失敗に終つたに拘らず、書籍商賣だけは、玄人以上の成功を収めたものが少くなかつた。小田原の警部さんが南江堂と爲り、神奈川縣の小學教師が金港堂となつたなどは其一例である。勿論元からの商人で、地方から東京へ出て来て成功した人もある。長岡から出て来た大橋氏が、「大家論集」から「文學全書」等を経て、前内第一の博文館となつたなどは、その好例である。元貸本屋であつて、一寸變つた邊に眼を着けて、圓朝

物の出版を始め、それから講談本を出版して、その安價供給で成功した大川屋なども、特色ある遣口の方であらう。

江戸時代の古い本の奥附にある書物問屋は、今は跡方もなくなつた。その中最も著名であつた須原屋は、名前だけは今京橋邊に残つてをる。山城屋佐兵衛稲田政吉氏の本店は通二丁目、今の柳屋の隣で、江戸一番賣れた本屋であつた。其主人が口癖のやうに、須原屋の名前だけが欲しいと言つてゐたといふから、須原屋の信用の偉大であつたことも想像される。その當時の山城屋といふものは、市へ出た書の九分通りが、山城屋の手に落ちた程であつたといふ。芝に和泉屋市兵衛、岡田屋嘉七といふ二軒の本屋も、それ／＼特色があつた。前者は明治になつて書林の頭取になり、山中氏の盛名を都下に振はせたものである。岡田屋は和漢書以外に佛書をも扱つた。非常な勉強家で、早朝小僧を伴つて仲間を廻り、店に品切の本があると、買取つて揃へて置いて學者に満足を与へた。處が其次の主人が所謂高襟の極端で、福澤翁初年の門人であつたが、舊



弊な書は勿論、家から地所から皆賣飛ばして、後には西洋人の通辯などしてゐた。洋服を着て車へ乗つて、舊い仲間の中へ、大威張で小使錢を借りに歩いたりなどしてゐた。

泉助の本店である泉金事玉儼堂といふのは、今の文求堂のやうな唐本専門の本屋で、その頃はまだ長崎輸入時代であつたために、良い本も可なりあつた。その主人が維新後に小倉庵青木彌太郎の手下になつて、其仲間の一人となつた。所謂聖賢の書を扱つた本屋の末路として妙な譯である。和泉屋の分家の二代目の主人が、老泉と云ふ學者で、鵬齋、文晁、抱一などの友人であつたため、鵬齋の胸中山、文晁の寫山樓、抱一の鶯郵畫譜などを出版した。此頃でもどうかすると、是等の書が坊間に見えるが、今時の摺とは全然別本の觀がある。此人の一代の事業とも云ふべきは、經典釋文三十冊の印刷である。珍書屋としての達磨屋五二さんのことは、梓石氏の配本「瓦の塵」に出てゐるから略する。

## 京 大 阪

上方と東京の風俗習慣に相違の多いことは今更言ふまでもないが、私は大阪や京都へ旅行して、假令一兩日でも逗留すると、必ず氣になる一些事がある。それは小便所の隅に、紙屑籠が吊つてあつて、用の濟んだ不淨な紙が其の中へ蓄められてあることである。これは如何にも一些事のやうではあるが、此の變の風習が容易に廢たれない以上、上方と東京との風俗習慣が似寄つて來る日は容易に到らぬであらう。不淨な紙を蓄める處に、京大阪人の經濟的に細かい氣分が窺はれるが、其外に風俗上の大問題として、女の立小便といふ風習が、この紙屑籠の素因を成してゐるのである。私の姉は非常に極端な潔癖屋であるに拘らず、若い時分から大阪で暮した爲に、近年まで大阪在住の間は、型通りこの紙屑籠を後生大事に、小便所の隅に吊してゐた。時たま止宿した私は、



小便をたす度毎に、文字通り鼻の先に、その不快な印象やら想像やらを餘儀なくされたものである。

處が此風習に惱まされたものは私ばかりではない。京の女の立小便については、蜀山人も享和二年（今より百十八年前）に、その紀行羈旅漫録中に書いてをる。「京の家々厠の前に小便擔桶ありて、女もそれへ小便する故に、富豪の女房も小便は悉く立てするなり但良賤とも紙を用ゐず」云々とある。して見ると百年前には、今日京阪で多く見られる外高架は、單に小便桶であり、例の不淨紙さへなかつたものであらう。京都の狂詩の大家愚佛の作中にも『女雖奇麗立小便、替物茄子怕數違』とあるほどで、京阪婦女の立小便は、恐らく何百年來の風習であらう、今日こそ多少は見かけなくなつたが京阪の宿屋にでも、甚だしきは共同便所にまでも、例の紙屑籠の吊るしてあつたことは、全くこの風習からの要求である。我國婦女子の立小便に關する或る獨逸人の觀察に、動物同様に局部が下についてゐるためとあるのは、全くの妄斷である。

以上は一例であるが、この尾籠な紙屑の習俗などから見ても、江戸以來の東京人の氣分と、上方者の氣分との間には、可なり大きな相違がある。名稱一つでも、上方で「チョンガレ」と云ひ、江戸で「チョボクレ」と稱し、上方の、「にわか」が東京の「茶番」であるなどから言つても、その言葉に備はつた調子や感じが、よく東西の氣分を現はしてをるのに、氣付かぬ譯に行かぬ。其他東京での荷車が、殆んど馬のみに限られてあるのに反して、京都のそれが牛を本位とし、大阪の荷車が枕一本に、曳子の肩を利用する様式ども、亦東京に較べて、京都人の重厚な性分と、大阪人の經濟的に細心であることとが肯かれ

る。

安政年間刊行の『京大阪江戸三ヶの津自慢競』といふ書がある。その中で現に今日も尙ほ事實であるものゝ、二三を擧げて見れば、

東 京 都 大 阪  
山 王 祭 祇 園 會 天 神 祭



|      |       |       |
|------|-------|-------|
| 隅田川  | 加茂川   | 淀川    |
| 歳の市  | 伏見初午  | 十日戎   |
| 上野花見 | 伏見茸狩  | 住吉沙干  |
| 湯島天神 | 北野天神  | 天満天神  |
| 兩國川開 | 大文字   | 大川花火  |
| 魚河岸  | 宇治茶園  | 雑喉場   |
| 金龍山餅 | 大佛餅   | 虎屋饅頭  |
| 兩國橋  | 五條の橋  | 四ツ橋   |
| 吉原   | 島原    | 新まち   |
| 雷門   | 東寺羅生門 | 天王寺猫門 |

これ等は僅か七十年許り前の、安政頃からの事ではなく、餘程舊くから永年かゝつて醸成された事柄であるに相違なく、各地方の風物誌が、漸く風物史となり、やがて風俗習慣をも作る媒となるのであらう。

天理教の教祖が大和の山邊郡から起り、大本教が丹波の綾部から發生した事實などにも、上方の人心や民風と、機微の關係があるのではなからうか。女の

立小便から大本教の話に終つては、如何にも神罰に會ひさうな氣もするが、前記三都自慢競の中の一二種に就て見ても、安政の昔と云はず大正の今日でも、吉原と島原との状態や氣分、日本橋の魚河岸と大阪の雑喉場の景況の其相違點の上に、一一關東と關西との民心氣風が、歴歴と見出されるではないか。

外來語

勝屋英造と云ふ人が、先年編まれた『外來語辭典』は、相當な苦心の産物ではあらうが、惜いことには九分通り英語であつて、葡萄語や和蘭語から出て、日本化された語が餘りに乏しく、大槻文彦先生が往年蒐められたものゝ範圍を殆ど全く出ない程度である。特に印度語や支那語から來た、趣味ある言葉に至つては、全く採録されてないやうに思はれる。そこで茶目式を發揮して、その二三を書き付けて見る。



「旦那」と言ふ言葉は、可なり広く使はれてゐる日常語であるが、印度語からの外來語である。印度語では佛者に對しての「施す人」といふ意味の詞であるが、それが其儘用ひられて今吾々が使つてゐるやうな廣い意味になつた處が面白い。「蒲團」に至つては印度でも支那でも用ひられてゐる以上、印度——支那——日本と傳來した詞であらう。

支那渡來の詞には、深い詮索をしたら餘程面白いものがあらう。「行燈」の如きは、原語その儘で受取り用ひられた常用語である。支那語即ち *lantern* である。それよりもモツと面白いことは、薩摩日向あたりから佐賀へかけての方言で「しやんす」と云ふ言葉がある。「惚れた同志」とか「戀人」とかいふ意味で誰れには「シヤンス」が出来たとか、誰れさんの「シヤンス」だとか云ふ。處がその「シヤンス」こそは、紛もない支那語の「相思」を、その儘受入れたものである。支那で「相思病」といふのは戀の病である。

一民族の用ひてをる外來語は、その渡來に當つての由來を知ることによつて、

始めて興味が出て来る。イナ興味ばかりではなく、歴史的に地理的に其言葉が活きて来る。例へば「カステラ」の如きも、單に葡萄牙語といふ丈では面白くない。西洋皿に載せてあつたカステラを賞味し乍ら、當時の長崎人がこれは何といふ名かと尋ねたが、恰度問者の指さした其皿に、城廓の繪が描かれてあつたので、葡人は早合點して「カステラ」(城)だと答へた。これと恰度同じ話か幾つもある。今では鐵葉に「鐵」といふ字まで新たに造つて、何んの不思議もなく用ひられてゐるが、石油の空罐などのブリキが、初めて我國へ渡つた時分は極めて物珍しかつた。丁度その時分には西洋建築用の煉瓦も珍重なもので、皆西洋からブリキの大罐に詰めて輸入されたものだ。例によつて不思議な金屬らしいブリキの洋名が知りたいので、煉化入のブリキ罐を指して、此名は何と尋ねると赤髯君は罐中の品物と早合點して「ブリーク」と無造作に答へたのが、抑もの鐵葉の發端。

「キャラメル」は茶目さんに付きもの、新しいお菓子のやうであるが、吾々の



先祖が其名と一種の菓子とに接したことは、却々に古い。やはり葡萄牙人からの傳來であらうが、長崎邊から流行り出して、明治の十五年頃までは、上方其他に廣く行はれた菓子に「カルメロ」といふざらめ砂糖を煮て、泡を立たせ其儘凝まらせた一種の菓子があつた。これが即ち Caramelo の原語から來た、西洋傳來の一種の製菓であつた。大正茶目の祖父さんなども、一度はキャラメルの不思議な風味を味つた譯である。

終に馬鹿話中の「茶目」について一言する。三通の投書があつた中で、多數の成人に泣かされた小兒が、また笑はされた時に「僕、泣いたんぢやないヨ、このお茶を目につけて泣いた眞似をして威かしてやつたのサ」と云つたといふことから、茶目の名が出たといふのが一つ。下層階級の母が兒を叱る時に「コンチャメ」（この畜生の意）と呼ぶ、それから出て悪戯小僧を「チャメ」と云つたといふのが第二説。ナーに別段理窟などはないので、目茶苦茶、目茶くなどどの用字をさかさまに用ひたまでに過ぎないと云ふが第三説である。私は此中

の第三説に同感を表したく思ふ。「籠棒」に就いても異説を申込まれた。昔我國で死刑の時、彈左衛門の手下が、首の既に刎ねられた胴を、前の穴に押落す棒を「籠棒」と云つた。それ以外に用途もなく、且つこのやうな卑い役に使ふものゆゑベラボウ奴とは卑しむ蔑みした稱呼に使つたものであらうと。序ながら「ベランメー」は江戸ツ子とその舌の上で「卑棒奴」をつめたものであること、言ふまでもない。

更に第四の投書があつた。それは「今から十八九年も前、東京バツクに北澤樂天氏が居つた時分、バツクの中に、茶目助といふ小兒のいたづらの繪が、長く續いて出た。其小兒の顔が樂天式に面白かつたと、その悪戯が奇抜なもので、其時分随分評判なものでした。自然いたづらな兒を茶目助くと言ふやうになりました」云々とあつた。この投書家が須磨の消印で、てる子といふ女名前前であるセイでは決してありませんが、私はまた第四説に賛同したくなつた。



文化無疆(上)

北京大學がベルトラント・ラツセル氏から、先頃受取つた電報といふのは「約に従つて多分今秋貴國に到り、謹んで北京大學に學を講ずべし」といふのであつた。尙ほラ氏に亞で、アンリー・ベルグソンをも招聘する豫定で、目下交渉中であるといひ、更に今秋の新學期からは、デュー井博士が哲學と教育學とを、ロシー夫人が史學の講座を開くことに決定してをると傳へられる。こんな調子では、やがて近い中に、我國から北京へ留學に出かけなくてはならぬことになるかも知れない。そこで一つ極近代に於て、西洋人の努力の加はつた支那文化が、我國の文化を扶けたことの、最も著しい事實に就て、瞥見を試みたく思ふ。

清の仁宗の十二年——といふと西曆一八〇七年に、廣東へやつて來た一人の英人があつた。龍動傳道會社から支那へ派遣された宣教師で、ロバート・モリソ

ンといふ人である——斷る迄もないが、モリソン文庫のモリソン氏とは時代も違ひ、全くの別人である——一八〇七年から同三四年まで、その間に二年だけ歸英したのみで、前後二十五年間に亘つての在支生活中に支英、といふよりも寧ろ支那と西洋との文獻に關して、彼が世に捧げた功績の至大なことは、今更言説を要せぬほどのものであらう。今その主なものを擧げて、新約全書(一八一四年)並に舊約全書(一八一八)の漢譯、支那の地理學年代學を主とした英文雜筆(一八一七年)最後の最大著作としての漢字典(一八二〇年)等を算ふることが出来る。

處でモリソンの事蹟が、單にこれだけならば、吾々日本人には直接何の興味もないが、幸ひにも意外にも、我が開國史談の上に、有力な關係を有つてをること因て、私は愈々文化無疆とでも云ふやうな、深い感に捉はれぬ譯に行かぬ。外でもない、それは有名な高野長英の「夢物語」並に渡邊華山の「慎機論」と、密切な交渉を有つてをる次第である。



高野長英の「戊戌夢物語」は世に知れ渡つた書である。近々英吉利の船が漂流日本人七名を載せ、それにモリソンと云ふ人が使節のやうな格で、江戸近海へ來航するといふので、何も海外の事情を知らぬ幕府の評定は、英船渡來せば直ちに撃ち攘ふべしと云ふのであつたが、英人モリソンの名を聞いたばかりで、その容易ならぬ人物であることを、豫め知つてゐた長英は、則ち夢物語に事寄せて、斯程の人物を載せて來る英船を、ムザ／＼撃攘することの無謀極まることを、世に警告した。

長英がモリソンに就て知つてゐた點は、可なりに悉しく且つ極めて正確であつた。「モリソンと申す者はイギリスにて碩學宏才の者に付彼國學校の教授に擇れ、俸祿五六千石に當り候程の者」といひ『廿餘年前より廣東へ態々罷越遊學仕り、既に五車韻府杯もイギリス語に翻譯いたし開板仕り』云云「讀書隨筆」著せしは千八百十七年、今戌年より廿二年前也、此外西洋支那志あり、支那志は舶來未無之」と「夢物語」中にある。五車韻府の英譯が、モリソンの大業中

の一であること、所謂「讀書隨筆」が A View of China for Philological purpose なる雜著を指すことなど、如何にも正確な記述である。同じく新智識の愛國者であつた渡邊華山も、全く同様な趣旨で「慎機論」一篇を書いてゐるが、「莫利宋」といふ字まで造つて——或はモリソン自身が、此の漢字名を用ひてゐたのかも知れぬ——撃攘の非を説いてゐる。

「夢物語」も「慎機論」も共に天保九年（一八三八年）の著述であるが、モリソンは其四年前の一八三四年に、五十二歳で廣東で死んでゐるから、蘭人の風説書によつて、モリソンの來航を信じたことは謬つてゐるが、當時の交通状態で、在廣東の英人の死が四年間知れてゐなかつたことは、何の不思議のないことである。それよりも五車韻府の英譯者であるモリソンの來朝風聞に敬意を表して、日頃の攘夷不可論を力説した高野長英が、全くその爲めに下獄し後に自刃し、同じく渡邊華山が、蟄居後自殺するに至つたことを想ふと、其處に日支英に亘つた文化的交渉を、念はずには居られぬではないか。



文化無疆(下)

マルチン Martin と云ふ姓は、佛蘭西にも英吉利にもある可なり有ふれた名であるが、支那で仕事をした最も記憶すべき米人中の一人であるドクトル・マルチンの名が、リーピンコットの人名辭書に見えないのは、如何したものであらうか。目下在京中の米賓中の一人であるフード氏は、支那で漢字名を獲て、「福而德」と印刷した名刺まで造られたさうであるが、西洋人に取つては、同じやうな發音の出る漢字が、珍らしいものと見える。我がドクトル・マルチンも「丁達良」といふ漢字名を以て広く知られてをる。此人こそは有名な「天道溯源」の著者であり、「萬國公法」の漢譯者である。今でこそ邦人の間では、國際法は世界大戰の結果全く無權威なものになつたなど、大きなことを言つてをるが、日本人が最初國際法の何ものたるかを知り得たのは、全くマルチンのお蔭であ

らう。現に明治二三十年頃までは、我國一般に「萬國公法」と言つて居た。また「夢物語」を持出すのではないが、同書の中には、單りモリソンに就て語られてあるばかりでなく「本國(英國)より人物を撰み嘉慶帝誕生の祝賀のため、ロルド・マルテネーと申す者其撰に當り正使に任り」と記してをる。マルテネーはロルド・マカトネーの譯であるが、支那への英國正使といふ點は全くの事實で、現に「英國最初の駐支大使」といふマカトネーの傳記は、丸善にもあり、その古色を帯びた肖像畫は、大英博物館に保存されてある。當時東洋方面の通商と云へば、葡萄牙西班牙が漸く下火になつて、和蘭全勢の最中に、所謂暗厄利亞の英國が、支那に使節を特派したり、その宣教師中から支那學者を出したりしたことが、如何に當年の我が西洋通の間に刺激となり、又その開國的覺悟を促したかど、容易に想像される。所謂モリソン船の風説を、和蘭風聞書が一般に傳へた事それ自身が東亞貿易權の消長を憂慮しての、和蘭の排英的宣傳であつた。それ故モリソン船の擧擡を評定した幕府側は、和蘭の排英政策上



からの宣傳に陥つた譯で、擊攘の非を痛論した高野長英等は、此點から見ても達見と謂はねばならぬ。

更に面白い日米支三國に關聯した交渉は、舊き米人支那學者サミュエル・ウイリヤムス氏の事蹟である。この人は米國の博士で、史學及言語學者の立場から支那學に入つて、終に世界的支那學者として有名である。一八三三年廿一歳で支那へ渡り、爾來十五ケ年間に、支那關係の十數部の有益な著述を公にした。其中二種の漢字辭典と「中華王國」とは最も有名な大著である。私は一八六八年香港出版の廣全福選著「字典集成」一卷を所藏してをるが、支那人の手に成つた英漢對譯字書の、恐らく最初のものではなからうかと思つて珍重してをる。此字書のタイトル・ページには、前記の英人モリソンとこの米人ウイリヤムスの辭書を基として、といふ數行が記されてある。

ウイリヤムスの話も單にこれだけなら別段興味もないが、この學者が、我が吉田松蔭と交渉を有てをるから面白い、それも例の下田港での、米艦の上での

交渉であるから愈々驚く。變名して忍び寄つた吉田松蔭が、拉せられて米艦の甲板へ行くと、其處で甲比丹との應對となつた。その際一米人が通辭のやうに控へて、頻りに松蔭に種々の事を尋ねた。しかもそれが日本語を以て應對するので、松蔭が其名を尋ねるとウイリヤムスと云つた。如何にも支那日本の事に相應の知識があるやうであるが、問ふ事だけを松蔭に問ふて、松蔭の方から尋ねる時には、詞が分らぬ振をしたとある。このウイリヤムスこそは、即ち在支十數年の支那學者ウイリヤムス氏であつた。

開國論者の高野長英がモリソンに、洋行實查熱望家の吉田松蔭がウイリヤムスに、いづれも間接直接の交渉を以て、又いづれもそれが直接の因を成して、一命を殞したことは、偶然の事のやうであつて、而かも文化に國境なしといふことを、事實上から證明したものであるまいか。



## 墮胎

道徳の標準が、時代と社會によつて變り行くことは言ふまでもないが、最近時に於て「避妊」の感念の動搖ほど、痛い變化は他に類が稀であらう。Birth controlなどいふ名をつけて、紐育などではこれが宣傳の専門雜誌さへ出てゐると云ふに至つては、聊か驚かざるを得ぬ。處が更に驚かされることは、左の手毬歌である。

それは江戸から東京へかけて、ツイ近頃まで何の氣なしに、東京の婦女によつて、手毬つく手に合せて謡はれた『御正々々お正月松建て付立て、喜ぶものはお小兒衆……』云々を冒頭にした手毬歌の約半程の處である『……伊勢の長者の茶の木の下で、七ツ小女郎が八ツ子を生んで、生むにや生まれず降ろすにや下りず、向ふ通るは醫者ではないか、醫者は醫者でも藥箱持たぬ、藥御

用なら袂に御座る、これを一服煎じて飲めば、虫も降りるし其子も降生る……』云々と、墮胎に關する風俗に就て、極めて露骨な言ひ現はしである。手毬歌の中へ、これ程の社會描寫をやつて、それを平氣で婦女子に歌はせてゐたことを想ふと、その教育上の不取締を不思議がるよりも、徳川時代の或時期に、殆んど平氣で墮胎が行はれた事實を、容易に想像することが出来る。浦和地方の手毬歌の中にも、殆ど同じ文句がある『……袂薬は何に效くものか、これを一服煎じて飲めば、虫も降りし其子も下る。まずく一貫貸しまうした、御目度い鯛比目』といふのである。土佐の海邊の住民の墮胎の習慣などは、寧ろ言ふに足らぬものであるが、元祿から享保頃へかけて所謂『中條流婦人療治』が、公々然と看板をかけて、墮胎を專業としてゐた事を考へると吾々は今日避妊運動の急先鋒たるマーガレット・サンガー女史の、全くの社會經濟の見地から來た避妊宣傳の精神の前に、大なる羞耻を感じぬ譯に行かぬ。『中條は手ばかり出して水を打ち』といふ古い川流がある。『元祖中條流婦人療治、けんなくば禮不請』



などといふ露骨な看板をかけた家で、流石に商賣柄だけに、家の中の秘密と外への氣兼ねとで打水をするに暖簾の下から、手だけ出して打つてるといふ不氣味な光景を描寫した句であらう。中條帶刀といふのは秀吉の臣で、婦人醫を以て聞えた人である。その亞流が江戸で中條流婦人醫として公々然として開業し、之に對して京都には賀川玄悦といふのがあつた。

柳里恭の「獨寝」の中にも、墮胎薬の一項があつて、麝香云々とあるが、「獨寝」の書かれた享保年間には、所謂「中條商賣」が最も盛んな時節であつたであらう。享保十八年出版の「名物かのこ」の中には、此の中條の畫が出てゐる。白地に樹形を染め出した暖簾が下つてゐる。しかも斯道へかけての通人である柳里恭が、麝香云々と書いてゐる處から推して見ると、當時の中條の施術そのものゝ、極めて幼稚なものであつたことが想像される。

斯く看板を掲げたり暖簾を下けたりして、公然墮胎を商賣とした所謂隠業があり、また手毬歌が證明するやうに、袂へ薬を潜ませて、出療治を行ふ町醫者

があつたことは、争はれぬ事實であるが、徳川時代には、兎も角も法令の上からは墮胎を禁じ、諸藩でも文書上で禁じては居た。これが最も盛んであつたのは、平安朝時代であつた。しかも平安時代のものも、徳川時代のものも、主として上流階級若くば土中流階級の淫靡な風俗に、専ら原因して發達流行したものである。随つて吾々が墮胎を憎悪するのは、疑もなくこの歴史と事實とが、有力な素因を成してゐる。墮胎と避妊との間には、大なる種々の相違があつて、固より同日に論すべきものではないが、アノ貧民窟の俚諺である「米が高いとて宵から寝たら、米が高いのに子が出來た」といふ悲痛な状態からの、當然の解決方法であるとしたならば、避妊は勿論のこと、墮胎さへも、平安朝時代や徳川時代のそれとは、到底同一視することは出來ないではないか。



語源の詮索は、如何にも興味が多いものである。外來語に於て特に然りであるが、自國語中にも詮索に値するものが決して少くはない。例へばランプの「ホヤ」などが其一例で、外來語のやうでもあり自國語のやうでもある。支那語系と見てホに火の字を當てゝ考へても、ヤの字が到底解決が着かぬ。蓋し語源の末詮索に屬する此類の言葉は、可なり多いことであらうと思はれる。それにつけても、先年日本語源調査誌と云つたやうな意味の専攻雑誌が、確か十數號に亘つて發刊されてゐた。其後多分廢刊されたのであらうが、惜しいことである。語源に關して有力な投書が、一二來ましたに就て、多少私見をも加へて御披露に及びます。

『文化傳來の詮索の手がかり』として、九州邊の地名を研究したらどうでせう。私はマルコボロを此間中讀んで居て、時々妙な氣がしました。例へばKalinと唐津・San Tuma(San Tome)と薩摩・Kermen(Kimam)と久留米、Kiaに香椎など、それからマルコボロではないがDongと宇土など、怪しいと思ひますが如何でしょう。本

郷曙町閑人とある此の興味ある投書を得たことは、私に取つて寔に有がたく存じます。Chipangu として十三世紀末に、日本を歐洲へ紹介したマルコボロに就て、九州邊の地名を考察することも、適當でせうが、吾々が英語初學の際に、型のやうに教はつた所の Jaiam の名稱は、日本の漆の好い處から、それが由來したといふ説は、恐らく後代の附會であつて、「日本國」の支那音ジーペンコウ若しくはリーバンガウに基いた、マルコボロの所謂 Chipangu から由來して、歐人の呼び倣した稱呼ではあるまいかと私は思ふ。

鐵葉の語源については、英語青年社のお方から、有力な訂正を受取りました。それは現東京帝大文科教授市河三喜氏が、大正七年四月の「英語青年」に書かれたものに依つて、煉瓦が鐵葉に化ての誤謬に由來したといふ説の、妄が知れるといふのである。即ち市河教授の説はブリキは英語の Brick に由來したのではなく、それと全く関係のない和蘭語の Blik から來たので、錫やブリキのことを指すものであると云ふのである。今更ながら我國外來語の上に、蘭語が重要な



部分を占めてをることを想ふと同時に、正確な由來を知ることが得た慶びを、寄書者へお禮を申します。前述の曙町閑人も、その手紙の中でブリキに言及されて獨逸語の Blech から來たものと思ふ、Blech の音が可なり堅く發音されて「キ」に聞えるからと云ふのであつたが、結局その通りで、獨の Blech も蘭の Blik も同語源でありませう。其他「コツブ」や「ソツブ」が、英語の下手讀みから轉訛したものと思ひ込んでゐる人人は、それが葡萄牙語と和蘭語との直傳的外來語であることを思ひ、同時に吾々が葡萄牙の襦袢 Chinô を着、朝鮮のバッチを穿いて居ることを想ふと、我國の文化が其由來する所の、極めて世界的であることが肯かれるではあまりせんか。

「茶目」についての投書は十指に餘りました。結局第五説が、決定的に判明し得たことは、近時「茶目」なる名稱の起りは、北澤樂天君のバックで用ひられたのに起り、樂天君が「茶目助」といふ名を持出されたのは、恐らく梅亭金鷲編「七偏人」中にある「茶目吉」なる大茶目から、來たものであらうとの説で

す。墨堤閑人の説（投書）によると、「七偏人」が文化文政頃に坊間で喧傳された草紙のゑに、江戸時代に於ても茶目といふ名稱は、滑稽標語として随分流行したと、老人から聽いて居るとのことである。一寸した私の茶目式提案から、死せる茶目吉生ける讀者を騒がすとも申すほどの、御配慮に與りましたが、先づ、兎が着きましたから御安心下さい。

## 女の職業

「女性史」——とでも云ふものを若し書く人があつて、女の職業に就て、我國にのみ有つて、西洋に無かつた職業は何んであらうか、言ひ換へれば、女性の歴史、我國の婦人のみが、獨有的に記載されべき職業は、何んであらうかと言ふならば、私は躊躇なく「女角力」と「海女」であると答へたい。比丘尼——これは職業ではなく、身分と云ふべきものかも知らぬが——の如きも、我國同



様西洋にもある。女按摩は例のマッサージ女に相當するであらうし、西洋に發祥したモデル女も、今日では立派に、我國婦人の職業の一となつてゐる。我に巴、板額があれば、彼にもアーマゾンの史實がある。斯かる對比上から見て、恐らくは我國婦人にのみ特有であつた女角力と海女とは、特筆に値しようと思ふ。

女の職業としての女角力は、案外近代まで實在してゐた。男の職業としての陰間が、江戸時代の或時期を限つて、蜃氣樓のやうに消滅して了つたことを考へると、兩者の性質こそ違へ、女角力といふ面白味のある女子の職業が、明治年間まで残存してゐたことは、極めて興味あることではあるまいか。「勝鬨に毛なみを直す櫛もがな」といふ古い發句があるが、これは女角力を讀んだものではなく、兩國梶之助などは櫛をさしてゐたものである。しかも力水を化粧水といひ、元結代りの力紙を化粧紙と呼ぶなどから考へると、女角力なるものが、案外古くから當然の存在として、認められてゐたのかも知れない。身長七尺三

寸あつたと云はれる鬼勝と云ふ相撲などは、二枚櫛をさし白粉までつけたと云ふに至つては、或時代の相撲に、餘程女性氣分の混つてゐた事實があり、其邊から自然に、女角力も生れたものではなからうか。

文祿五年出版の或る古本に、京の伏見に觀進相撲の繁昌した或時の事、立石といふ關取に向つて、對手所望と見物席から立現はれた年頃二十ばかりの比丘尼、苦もなく二度三度立石を投げ、遂に大關の名を得たといふ怪談めきた話が見えてゐる。明治に及んでは十六年から廿三、四年頃まで、女角力は可なり盛んであつた。最初の地方巡業は、長野縣士族何某なる興行師の始めたもので、廿三年の十一月には遂に兩國回向院で興行した。番附なども、東の大關富士山よし、西の大關遠江灘たけと云つたやうな具合である。當時本所相生町警察署への届書によると、この西の大關などは丈五尺二寸、體量廿一貫三百目、餘技としては廿七貫の土俵を前齒で啣へ、左右の手に四斗俵をさけて、土俵の上を往來したといふ。一週間ほどもすると、其筋から角力は差止めになつて、女力



藝といふことで興行を續けた。

海女に至つては説明するまでもない。しかも鮑取りの海女のやうに、職業的に海中に入る女性も、日本の外世界の何處かにありやなしや、多分は海國の誇りとして、我國獨特のものであらう。尤も朝鮮には海女がある、かの濟州島の如きが其産地とせられてあつて、彼等の南鮮沿岸への出稼は、到る處に見られて可なり多數であることが推知される。湯女は元我國での温泉の産物で、獨創的のものではあらうが、名と形とこそ遠へ、西洋にも類似の産物は決して珍しくはない。強ひて言へば、昔の伊勢參宮で有名な、お杉お玉の如きは、我國特有のものかも知れない。一種の女乞食と云つて了へば、それきりであるが、あれ程の妙技を演ずることに於て、あれ程の郷土的性質を帯びたることに於て「女性史」職業の部分に、特筆するに足ると思はれる。尤も明治に入りてからは、此の伊勢の名物も少々怪しくなつた形跡がある。曾て三重縣廳へ奉職してゐた古老の話に、明治六年拙者がお杉お玉を取調べた時には、彼等は女装はしてゐ

たが、其實は男であつた。當時縣廳から説諭して廢業させることになつたが、平生可なり収入の多いため、廢業について種々苦情があつた。縣廳では相當な金子をやつて廢めさせたとある。女装男性のお杉お玉は恐れ入るが、昔ながらのお杉お玉なら、何にも政府が干渉して廢めさせる必要はないではないか。役人といふものは何時も、つまらぬことをするものである。所謂伊勢子正直を最も露骨に現はした、郷土的名物として、寧ろ珍重すべきであらうに。

## 肉 食

漸く冷氣となるにつれて、なつかしさを覚えるのは、牛肉のすき焼である。

或る年の冬の夕、私共の同僚數人が、堅炭のガン／＼をこつてゐる大火鉢を取圍んで、これから出し合ひで牛肉でもツ、かうと思つてゐる矢先に、飛込んで來た同僚の一人、その光景を一目見るか見ぬ中に「火を見て煮ざるは牛なきな



り」とやつたので、笑ふものと感心するものと相半ばした、餘りその洒落の巧かつたのに。

牛肉を食ふ風習の盛んになつたことは、米艦の來航以後に相違ないが、所謂「藥喰」の範圍を超えた、半公然程度の食ひやうは、可なり早い時代からの事らしい。屠戸屠兒などいふ言葉が古い書に見えてをるのから考へても、我國で牛肉を食ふことは、決して新らしい事ではない。兎の吸物が徳川家元且の嘉例となつてゐたことなどから見ても、獸肉の食用が絶対に忌まれたとは思はれぬ。現に江戸時代に、麴町平河町三丁目に獸店といふのがあつた。「勘平は麴町へも折々出」といふ古川流は、それを指したもので、「麴町芝の屋敷へ丸で賣れ」といふのは、三田四國町の薩摩屋敷が、例の暴食家の隼人だけに、此店の大のお得意であつたことを云ふのであらう。そして猪を「山鯨」と云つたのに對して當時は牛肉を「冬牡丹」と名づけたものらしい。古い狂句に「冷症で二十日程喰ふ冬牡丹」といふのがある。尤も平河町のけものだなは唯一軒だつたと云ふ。

「三河屋」の名は或意味に於て、今日でも牛肉屋の代名詞のやうに響くが、それには相當な因縁がある。横濱で早くから牛肉屋兼西洋料理を開いてゐたものが三河屋久兵衛氏で此點に於て彼は西洋割烹の元祖と呼ばれ得る。それが蘭學者連の勤めに因つて、神田三河町近邊の板新道へ、牛肉屋と西洋料理の間の千位の店を出して、一步一朱で喰はせたと云ふ。その看板に羅馬字で久兵衛と書いてあつたと云ふのは、今の世に日比谷邊の店で、電氣鍋ありといふ看板をかけてをるよりも、確に奇抜であらう。

馬と豚とどちらが先に常食的に流行出したかと云へば、馬のやうである。馬は明治廿年頃に、始めて淺草で賣出したものである。最初は並鍋二錢、ロース三錢、馬飯一椀八厘といふので、勞働者仲間には一時歓迎されたものである。豚が食用として奨励され出したのは、割に新らしいことであるが、結局風味本位の優勝劣敗で、馬肉が劣敗者の地位に落ちた次第であらう。こゝに疑問なのは同じく佛教系統の隣土でありながら、支那で盛んに獸肉を常食とする



に反して、我國で永い間之を忌み嫌つてゐたことである。單にこれが神道の教からばかり來たものとは、單純に考へられぬやうな氣がする。

支那には「能掌鳳髓」といふ形容詞があつて、美食佳肴の形容となつてゐる。鳳凰の腦味噌だけは、不死の藥同様一寸見當るまいが、熊の掌の肉こそは、今日でも大の珍味に算へられてゐる。西洋料理で現に羊の腦味噌を、恰度我が豆腐のやうな味で喰はせるのは、「鳳髓」の亞流であらう。その他支那料理の烏賊の寧丸、西洋料理の蜥蜴のブツ切などは、苟も動物と名のつく限り、あらゆる動物の肉を味はゞすば、措かぬといふ概が見える。

狸汁は、お伽噺に顔を出すほどであるから、可なり古いものに違ひない。隨つて吾等の祖先が、肉食をやつた——少くとも狸を汁にして喰つたことは確である。寛永年間の印刻に係る「料理物語」には「狸汁野はしりは皮をはぐ、みたぬきは焼はぎよし、味噌汁にて仕立候、妻は大こんごほう共外色々、古法は味噌汁にはあらず、酒のかす酒鹽を用ゐたり」云々、佛教渡來以前、歴代の天

皇が、肉食を致されしことも明かである。肉人部といふ稱が大膳職中に置かれたことは、雄略天皇の御代のこと、獸肉を料理する厨人の稱である。「調味故實」には、懷妊の忌み物として、うさぎ、鹿を算えてゐる。「落穂集」によると、犬も或時代織んに喰はれたことが知れる。即ち「武家町方下々の給物には、犬に増りたる物は無しとて、冬向に成候へば、見合次第打殺賞玩致すに付」云々とある。猿も可なり喰はれたやうである。江戸時代の何時頃の事であるか、四谷の宿はづれに、獵人の市があつて、猪、鹿、羚羊、狐、格、兎の類を商つた中に、鹽漬にされた猿が、今日鹽鮭でも釣るしたやうに、幾つも釣下けて賣られてゐたといふ。

これの正反對が精進料理であらう。東京では今精進料理と云へば、上野三橋の駿河屋と相場が定つてゐるやうであるが、これが精進料理の舊家清凌亭の後であるかどうか知らぬが、上野仁王門前の鰻家から、お山の坊主達の取締上にも宜しからぬと説諭されて、天保三年の春、一朝にして精進料理屋へ商賣換へ



をした、淨味専門の清凌亭の故事を想ふと、吾々は宿命的に大根牛蒡黨であるやうな氣がする。「豆腐百珍」「甘藷百珍」などいふ料理書を、父祖の代から遺されてをる吾々は、獸肉食家としては、到底支那人や西洋人の壘を摩する譯には行くまい。已むなくんば兩三の心友と、一枚の「猪」を懐中して、三河屋に「冬牡丹」をつつかん哉。

## 町の名

誰れが付けたものか、「山勘横丁」とは面白い。斯うなると例の癖で、山勘の語源から調べたくなるが、大方山形屋勘兵衛などいふ爺が、今なら赤チョッキでも着て、赤色に塗つた自動車にでも乗つて、朝から晩まで奔走すること約半年、一夜飄然として夜逃してけり、とも言つたやうな赤兎爺が、その語源を成してをるのであらう。アノ煉瓦建の碁盤の目のやうな街を、三菱村も面白

い。「三菱村から一寸道を間違へて、山勘横丁を通り、出た處が日比谷が原」などい書いてをくと、五十年後に大正の東京を、想像的に書く賣文家に取つて、大さうもない村や原が、宮城附近にあつたと云ふやうな誤解を遺さぬとも限らぬ。巢鴨に居た或人が、東京に出て來たばかりの郷友に會つて、番地を書いてやりながら、結局蘆原將軍の傍サと戯言を言つて別れたら、數日して尋ねて來た其郷友、巢鴨へかゝると其處等中で、「此邊に蘆原將軍のお屋敷は」と、尋ねさがしたが一向分らなかつたと、後で不平らしく話したといふ話さへある。町の名若しくは町の俚俗名では、昔から面白いのが尠くない。「浮世小路」といふのは、日本橋室町三丁目にあつた。同じく本銀町に「三日河岸」といふのがある。室町一丁目の「高砂新道」大傳馬町の「瓢箪新道」などは有名であつた。小船町から堀江町へかけてが「てりふり町」である。其他「貝杓子店」「式部小路」「樽新道」などいふのがあつた。こゝでは一ツ京橋だけの、町の名の詮索を試みて見たいと思ふ。



桶町は將軍家の桶の御用達細井某の宅が、半町以上にも亘つて構へられてゐたからで、猶ほ紺屋役を勤めたものゝ居た紺屋町と、同様の起源である。大根河岸の俚稱は、今なほ昔の如しであるが、青物市場又は青物河岸といふ代りに、大根の名によつて、夫れを代表させた處に面白味がある。白魚河岸は、年々白魚を幕府に獻上する網役の、住宅のあつた處。「豆店」と「稻荷新道」といふのが、南傳馬町の二丁目三丁目に在つた。古い狂歌に『京橋のぎほしにかける左り繩、結んでとめるせきのまじなひ』といふのがあるのを見ると、江戸ツ子の呪好きにも呆れ返る。竹河岸は京橋北詰より折れて、東に入つた所。昔は盛んな竹問屋町で、一は千葉から高瀬船で、一は群馬地方から筏に組んで送つたものである。「太刀賣」とは南紺屋町の俗稱であつた。出来合ひの刀脇差を商ふ店の多かつた爲である。その引續きに、弓師が多く住んでゐたのが、今の弓町である。

氣になるのは「金春」の名であるが、聞いて見ると案外平凡である。たゞ舊

幕時代の能役者、金春太夫の拜領地といふに過ぎない。此邊で逸してならぬものは「しがらき新道」であらう。茶釜を店にかけて、商人の寄合、開帳の出迎にあてた待合茶屋信樂の圖が、江戸名所圖會に載つてゐることを見ても可なり舊い名稱である。今の新橋藝者連が、尙ほこの名を呼んでをれば一興である。一寸序ながら記してをくが、新橋即ち金春藝者街の起りは安政の末である。「ころんだらくはふろ」と付て行く藝者の母のおくり狼」といふ、天保頃の狂歌が遺つてゐるのを見ても、此の社會ばかりは天保——大正、さほどに進歩も變化も改造もないと見える。

ヤンヨースの八重洲河岸同様、八官町も慶長元和頃に江戸に來てゐた和蘭人ハチクワンの名から出て、此字を當てたものである。采女町は松平采女正の屋敷跡で、馬場であつた。「狂歌江都名所圖會」に「夜鷹小屋並ぶ采女が原際に、身を切賣の鴨かしは見せ」とあるやうに淫賣の巢窟であつた。新富町は維新當時新島原と云つた。新島原といふ新しい遊廓が出来たからである。東叡山の類